

神奈川県地震被害想定調査 県民シナリオ

令和7年3月

神奈川県地震被害想定調査委員会

目 次

I 作成方針	1
1 作成目的	
2 作成方針	
3 作成手順	
(1) ステップ1 場面の洗い出し	
(2) ステップ2 場面の選定	
(3) 詳細場面の作成	
(4) 留意事項	
4 作成場面一覧	
(1) 一般県民	
(2) 要配慮者	
(3) その他(事業者等)	
II 被害の概要	11
1 被害の概要	
(1) 建物被害	
(2) 火災	
(3) 死傷者数	
(4) 避難者数	
(5) 帰宅困難者数	
(6) ライフライン	
2 過去の災害状況	
III 被害の様相	13
1 発災と被害の拡大	
(1) 被害の様相	
(2) 住民の対応	
2 避難生活	
(1) 被害の様相	
(2) 住民の対応	
3 復旧・復興	
(1) 被害の様相	
(2) 住民の対応	
IV 県民シナリオ	25

1 作成目的

県民が地震発生時に遭遇する場面をシナリオ形式で記載することで、地震発生時における対応行動や事前の備えに対する普及啓発を図る。また、防災対策上の課題についても明らかにする。

2 作成方針

県民シナリオを構成する地震発生時に県民が遭遇する場面については、発災からの時間経過や場所により無数の場面が想定される。

県民シナリオを作成する上では、まず発災からの時間経過毎に設定した基準により、想定される場面の洗い出しを行い、次に過去に発生した場面やヒアリング、県民アンケート結果等から重要度が高い場面を選定する。

3 作成手順

(1) ステップ1 場面の洗い出し

ア 発災直後(72 時間以内)

地震発生直後は、場所により県民が遭遇する場面が無数に考えられることから、次の基準(①・②)により、場면을洗い出す。

- ①場所と被害 (例) 自宅×挟まれ、外出先×津波、移動中×帰宅困難…
- ②人物や時刻、季節等

イ 避難生活(1～6 ヶ月以内)

地震発生から1 ヶ月以内は、県民の多くが在宅や避難所等での避難をしながら、生活をしていると考えられることから、避難生活場所毎に場면을洗い出す。

(例) 在宅避難、指定避難所避難、指定外避難所避難、車中泊、広域避難…

ウ 復旧・復興(1～6 ヶ月以上)

地震発生から1 ヶ月以降は、復旧・復興に向けて住居環境が変化しながら、生活をしていると考えられることから、住居環境毎に場면을洗い出す。

(例) 避難所避難継続、応急仮設住宅(賃貸型・建設型)、復興住宅、自宅再建…

(2) ステップ2 場面の選定

ステップ1による場面の洗い出しにおいても、条件等により様々な場面が考えられることから、更に次の基準により、場面を選定する。

- ・実際に起こった場面(過去の災害報道、手記等から参照)
- ・県民アンケートで関心が高い場面
- ・要配慮者等へのヒアリングなどから把握した場面
- ・事前の備えやその場での対応により、その後の被害が変動する場面

(3) 詳細場面の作成

ステップ2により、選定した場面の詳細や取るべき行動等については、神奈川県地震被害想定調査委員会事務局(県危機管理防災課)において、過去の災害報道、被災者の手記、要配慮者等へのヒアリング等を参考に作成を行った。

(4) 留意事項

場面の汎用性や検索を高めることが重要となるため、原則として次の基準により、場面の記載を行う。

- ①主人公は一人称(自分自身)の目線で記載
- ②主人公は一般県民と要配慮者とし、要配慮者の具体的設定は、要配慮者の特徴を場面ごとに考慮する
- ③被害の影響が高い詳細条件(時刻、天気等)は、場面の記載においては描写せず、可能な限り備考で記載する。

4 作成場面一覧

(1) 一般県民

No	場面名	ページ
発災直後		
自 宅		
揺れの被害(怪我・出欠・閉じ込め等)		
1	家具の下敷き	26
2	倒壊した家具に家族が挟まれ、救出が困難	27
3	高層マンションのエレベーターに閉じ込め	28
4	飛散物で出血	29
5	強い揺れによる落下物や玄関に損傷で封じ込め	30
6	入浴時に被災	31
火災		
7	自宅で火災発生	32
8	高層マンション内で火災発生	33
9	自宅に火災が迫る	34
ライフライン停止(停電・断水等)		
10	ライフラインが停止した自宅	35
11	マンションのトイレが使用不可	36
その他の被害		
12	エレベーター停止により、孤立したマンション高層階	37
13	家族と連絡が取れない	38
14	SNS で出回る真偽がわからない情報に戸惑う	39
津波		
15	津波が迫る中、幼児2人を連れての避難	40
16	マンションに津波が迫る	41
17	家族の居場所が分からない中、自宅に津波が迫る	42
土砂災害		
18	余震で土砂災害が迫る	43
外出先(屋内)		
揺れの被害(怪我・出欠・閉じ込め等)		
19	商業施設で被災	44
20	会社のオフィスビルで被災	45
帰宅困難		
21	交通機関の停止により、会社で帰宅困難に	46
22	交通機関の停止により、駅で帰宅困難に	47
その他の被害		
23	地下街の非常階段に通行者が殺到	48
24	外出先で買い物中に被災し、家族と連絡が取れない	49
25	デマでパニックに	50
津波		

No	場面名	ページ
26	観光施設で被災、津波が迫る	51
土砂災害		
27	商業施設で被災、土砂災害に巻き込まれる	52
外出先(屋外)		
揺れの被害(怪我・出欠・閉じ込め等)		
28	飛散物で出血	53
29	ブロック塀の下敷き	54
火災		
30	延焼する火災で逃げ惑う	55
帰宅困難		
31	交通機関の停止により、繁華街で帰宅困難に	56
ライフライン停止(停電・断水等)		
32	街灯が消え暗闇の中、帰宅	57
その他の被害		
33	避難場所の確認ができない	58
津波		
34	繁華街で被災、津波が迫る	59
35	海水浴中に被災し、津波が迫る家族	60
36	津波からの避難途中で知人が安否不明に	61
37	津波から徒歩で避難中に踏切封鎖に遭遇し、迂回を迫られる	62
38	津波が迫る中、避難した津波避難ビルが避難者で満杯で困惑する避難者	63
土砂災害		
39	登山中に被災し、土砂災害の危険が迫る登山客	64
移動中		
揺れの被害(怪我・出欠・閉じ込め等)		
40	緊急停止した列車に閉じ込め、要救助者発生	65
41	バスで移動中、渋滞に遭遇し、車内に閉じ込め	66
42	緊急停止した地下鉄に閉じ込め	67
43	車で移動中、地震が発生し帰宅困難に	68
帰宅困難		
44	列車が緊急停止し、帰宅困難に	69
ライフライン停止(停電・断水等)		
45	緊急停止した列車内で停電が発生	70
その他の被害		
46	車で移動中、信号が消えた交差点で交通事故に遭遇	71
47	車で移動中、SNS で出回る真偽がわからない情報に戸惑う	72
48	車で移動中、通信障害によりナビが使用不可能に	73
津波		
49	車で移動中に津波が迫る	74
50	列車で移動中に津波が迫る	75

No	場面名	ページ
51	津波が迫る中、車で避難中に踏切封鎖に遭遇	76
52	津波が迫る中、車で避難中に渋滞に遭遇	77
土砂災害		
53	線路上で発生した土砂災害により、緊急停止した列車に閉じ込め	78
54	車で移動中、トンネル内で土砂災害が発生し、立ち往生	79
55	車で移動中、土砂災害に遭遇	80
避難生活		
在宅避難		
ライフライン停止(停電・断水等)		
56	ライフラインが停止している中、在宅避難を継続	81
57	ライフラインが停止している高層マンション	82
通信・孤立		
58	道路寸断により、地域が孤立状態	83
59	家族の安否確認が長期化	84
60	通信障害により支援情報の入手ができない	85
医療・衛生		
61	生活環境悪化により体調不良に	86
62	インフルエンザ療養中のため避難に迷う	87
避難所不足等		
63	避難所が満杯で在宅避難を継続	88
64	保育園の再開見通しが立たず、仕事が再開できない	89
65	避難所が被災し、在宅避難を継続	90
避難所環境		
66	避難所でペットの受入れができず、在宅避難を継続	91
67	燃料不足により、車での移動が不可能に	92
68	トイレが使用できず困惑	93
69	不在時の防犯が心配	94
70	飲食料が不足	95
その他の被害		
71	度重なる余震で自宅の被害が心配	96
72	ボランティア不足により、自宅の片付けが進まない	97
73	液状化により自宅が傾き生活に支障	98
指定避難所避難		
ライフライン停止(停電・断水等)		
74	ライフラインが停止している避難所	99
通信・孤立		
75	道路寸断により、孤立状態となった避難所	100
医療・衛生		
76	避難所のトイレが使用不可になり、衛生環境が悪化	101
77	トイレを我慢し、体調不良に	102

No	場面名	ページ
避難所不足等		
78	一時滞在施設で3日目、徒歩帰宅を決心	103
79	避難者が殺到し、混乱している避難所	104
80	避難所での避難が長期化し、今後のことが心配になる避難者	105
避難所環境		
81	避難所でのプライバシーに不安を感じる	106
82	避難所での防犯に不安を感じる	107
83	物資の配布で混乱	108
84	ペット連れで避難	109
指定外避難所避難		
避難所環境		
85	十分な物資支援が得られない	110
車中泊・テント泊		
ライフライン停止(停電・断水等)		
86	トイレの利用に困る車中泊避難者	111
避難所不足等		
87	避難所が満杯、自宅にも住めなくなり、車中泊避難を決意	112
避難所環境		
88	ペット連れでの車中泊避難	113
89	プライバシーが気になる車中泊	114
90	十分な物資支援が得られるか不安	115
縁故避難		
避難所環境		
91	母子で他県に避難	116
その他の被害		
92	津波で自宅を流されA県に縁故避難	117
広域避難		
ライフライン停止(停電・断水等)		
93	ライフライン停止の長期化により、広域避難を迫られる	118
復旧・復興		
避難所避難継続		
住宅不足		
94	建設型応急住宅に入居ができない	119
その他の被害		
95	津波で自宅が流出し、避難が長期化、応急仮設住宅入居	120
賃貸型応急住宅		
経済停滞		
96	地元への帰還か避難先への定住か迷う	121
建設型応急住宅		
経済停滞		

No	場面名	ページ
97	津波で流出した自宅の再建が困難	122

(2) 要配慮者

No	場面名	ページ
発災直後		
自 宅		
揺れの被害(怪我・出欠・閉じ込め等)		
98	家具の下敷きで家族が負傷した視覚障がい者	123
99	高層マンションのエレベーターに閉じ込められた視覚障がい者	124
100	緊急地震速報の警報に気付かず、安全確保行動が遅れ、怪我をした聴覚障がい者	125
101	家具の下敷きに巻き込まれた車いす利用者	126
火災		
102	留守番中の小学生に迫る火災の延焼	127
103	自宅に迫る火災の延焼に気付かない聴覚障がい者	128
ライフライン停止(停電・断水等)		
104	ライフライン停止に直面する医療的ケア児がいる家族	129
その他の被害		
105	余震が続く中、自宅で家族の帰宅を待つ小学生	130
106	エレベーター停止により、孤立したマンション高層階の車いす利用者	131
107	エレベーター停止により、孤立したマンション高層階の肢体不自由者(車いす利用なし)	132
津波		
108	自宅に津波が迫る高齢者	133
109	迫る津波の中、高齢者の避難支援	134
110	保護者が外出中、自宅にいる小学生に迫る津波	135
111	津波が迫る中、支援者を待つ視覚障がい者	136
112	津波が迫る中、津波警報に気付かない聴覚障がい者	137
113	自宅に津波が迫る医療的ケア児がいる家族	138
114	津波警報に戸惑う外国籍県民	139
土砂災害		
115	土砂災害の兆候に気付かない聴覚障がい者	140
116	土砂災害に巻き込まれる車いす利用者	141
外出先(屋内)		
帰宅困難		
117	交通機関の停止により、駅で帰宅困難になった知的障がい者	142
118	空港の停止により、帰国できなくなった外国人観光客	143
119	交通機関の停止により、駅で帰宅困難になった高齢者	144
その他の被害		
120	知的障がい者の友人と繁華街で被災	145
121	周囲の状況が分からず、パニックになり、雑踏に巻き込まれる精神障がい者	146
津波		

No	場面名	ページ
122	津波が迫る中、避難ができない視覚障がい者	147
123	津波が迫る中、避難誘導の音声に気付かない聴覚障がい者	148
124	津波が迫る中、避難に時間がかかる車いす利用者	149
外出先(屋外)		
その他の被害		
125	信号が消えていることに気付かず、交差点を通過する視覚障がい者	150
126	帰宅中に被災し、周囲の状況に混乱する精神障がい者	151
津波		
127	津波から逃げる方向が分からない知的障がい者	152
128	大津波警報に戸惑う外国人観光客	153
移動中		
揺れの被害(怪我・出欠・閉じ込め等)		
129	緊急停止した列車に閉じ込められた車いす利用者	154
130	緊急停止した列車に閉じ込められた肢体不自由者(車いす利用なし)	155
131	緊急停止した列車に閉じ込められ、音声アナウンスに気付かない聴覚障がい者	156
132	緊急停止した列車に閉じ込められ、パニックになる精神障がい者	157
帰宅困難		
133	列車が緊急停止し、帰宅困難になった小学生	158
134	車で移動中、渋滞に遭遇し、帰宅困難になった車いす利用者	159
ライフライン停止(停電・断水等)		
135	緊急停止した列車内で停電が発生し、体温調整に苦慮する車いす利用者	160
避難生活		
在宅避難		
ライフライン停止(停電・断水等)		
136	ライフラインが停止している中、乳幼児のミルクが作れない女性	161
通信・孤立		
137	高層マンションの上層階で孤立する高齢者を抱えた世帯	162
138	道路寸断により、孤立状態となった高齢者	163
医療・衛生		
139	病院の受入れを懸念する妊婦	164
140	生活環境悪化により体調不良になる高齢者	165
141	人工透析が受けれない透析患者	166
避難所環境		
142	避難所の環境を懸念し、在宅避難を継続する車いす利用者	167
143	避難所の環境を懸念し、在宅避難を継続する知的障がい者	168
144	避難所の環境を懸念し、在宅避難を継続する精神障がい者	169
指定避難所避難		
医療・衛生		
145	アレルギー対応の食材不足により苦慮するアレルギー患者	170
146	衛生環境の悪化によりアトピー性皮膚炎が悪化するアトピー患者	171

No	場面名	ページ
147	一時滞在施設で3日目、持病の薬が切れる高齢者	172
148	トイレを我慢し、体調不良になる視覚障がい者	173
避難所不足		
149	バリアフリー対応の応急仮設住宅の確保に苦慮する身体障がい者	174
避難所環境		
150	認知症の高齢者を連れて避難	175
151	避難所に避難した女性	176
152	盲導犬とともに避難した視覚障がい者	177
153	避難所での生活に困惑する知的障がい者	178
154	乳幼児連れで避難	179
155	避難所での生活に困惑する視覚障がい者	180
156	避難所での生活に困惑する聴覚障がい者	181
157	避難所での生活に困惑する精神障がい者	182
158	避難所での生活に困惑する車いす利用者	183
159	グループホームの軽度の知的障がい者が避難所に避難	184
160	海外から観光で来ていた外国人	185
161	罹災証明の取得に苦慮する外国籍県民	186

(3) その他(事業者等)

No	場面名	ページ
発災直後		
外出先(屋内)		
帰宅困難		
162	展示フロアがある自社ビルが被災した会社	187
163	交通機関の停止により、生徒が帰宅困難になった高校	188
164	交通機関の停止により、社員が帰宅困難になった会社	189
ライフライン停止(停電・断水等)		
165	ライフラインが停止した医療機関	190
その他の被害		
166	園児の引き渡しに時間がかかっている保育園	191
津波		
167	津波が迫る会社	192
168	津波が迫る小学校	193
169	津波が迫る医療機関	194
土砂災害		
170	土砂災害のおそれがある福祉施設	195
外出先(屋外)		
揺れの被害(怪我・出欠・閉じ込め等)		
171	救助活動に取り組む自治会	196
火災		

No	場面名	ページ
172	消火栓が破損し消火が困難になる消防団員	197
その他の被害		
173	踏切封鎖解除の対応に苦慮する鉄道会社	198
避難生活		
指定避難所避難		
避難所環境		
174	路上生活者を受け入れる避難所の運営スタッフ	199
その他		
175	避難所の開設に手間取る自治会担当者	200
176	車中泊の対応に苦慮する避難所の運営スタッフ	201
福祉避難所避難		
医療・衛生		
177	福祉避難所に転用した公民館で、入所者の急変に苦慮するスタッフ	202
その他		
178	一般避難者が押し寄せ福祉避難所として開設ができない通所施設	203
179	人員不足で福祉避難所の運営に苦しむ入所施設	204
指定外避難所避難		
180	社内待機3日目で、対応に苦慮する会社	205
その他		
181	生活環境の悪化等により広域避難の判断に迷う高齢者施設	206

1 被害の概要(大正型関東地震の被害量(冬の18時発災の場合))

※各被害数は1の位を四捨五入しているため、合計値と合わない場合がある

(1) 建物被害

(棟)	揺れ・液状化	急傾斜地崩壊	津波	合計
全壊	299,140	830	3,330	303,300
半壊	371,600	1,950	10,860	384,410

(2) 火災

出火件数(件)	焼失棟数(棟)
1,590	55,270

(3) 死傷者数

*:0以上10未満

(人)	揺れ	急傾斜地崩壊	屋外落下物	ブロック塀等	屋内収容物	火災	津波	合計
死者数	12,260	30	*	90	980	350	6,070	19,780
重症者数	3,610	*	*	250	920	-	180	4,960
中等症者数	30,390	20	160	1,490	8,080	-	1,110	41,250
軽症者数	41,990	10	350	1,350	11,590	-	1,050	56,340

(4) 避難者数

避難場所	1日目～3日目(人)	4日目～1週間後(人)	1ヶ月後(人)
避難所	1,423,610	1,159,510	401,770
車中泊	310,200	368,650	309,360
自宅	281,970	337,770	281,840
親戚・知人宅	179,000	208,100	177,430
宿泊施設	67,770	78,440	67,090
その他勤務先等	103,300	117,320	101,740
合計	2,365,850	2,269,790	1,339,230

(5) 帰宅困難者数(通勤・通学者)

直後(人)	1日後(人)	2日後(人)
610,790	414,880	395,350

(6) ライフライン

上水道		下水道		都市ガス	LPガス	
断水人口	復旧日数	機能支障人口	復旧日数	供給停止件数	供給支障数	復旧日数
5,183,690	50	1,077,640	90	1,916,940	15,890	2
電力		エレベーター				
停電軒数	停止台数	閉じ込め者数				
1,952,210	5,660	7,640				

公助の限界

	被害数 (A)		車両数 (B)		対応倍率 (A/B)
火災対応	出火件数	1, 593	消防ポンプ車	361	約 4. 4 倍
救出・救助	自力脱出困難者数	56, 180	救助工作車	63	約 892 倍
負傷者搬送	負傷者数 (重症者+中等症者)	19, 896	救急車	330	約 60 倍

地震の被害の多くは発災初期に発生し、その発生件数は、公助の対応力の約4倍から約 900 倍にも上るため、初動時の公助の対応には限界がある。

2 過去の災害状況

	阪神・淡路大震災	東日本大震災	熊本地震
発生年月日	平成 7 年 1 月 17 日	平成 23 年 3 月 11 日	平成 28 年 4 月 16 日
地震規模	マグニチュード 7. 3	モーメントマグニチュード 9. 0	マグニチュード 7. 3
最大震度	震度 7	震度 7	震度 7
死者	6, 434 名	19, 765 名	273 名
行方不明者	3 名	2, 553 名	0 名
負傷者	43, 792 名	6, 242 名	2, 809 名
住家被害	639, 686 棟	1, 167, 032 棟	206, 886 棟
非住家被害	42, 496 棟	108, 394 棟	13, 385 棟
火災発生件数	285 件	330 件	15 件

1 発災と被害の拡大(大正型関東地震の場合)

(1) 被害の様相

(地震の発生－揺れによる建物の倒壊)

- 地震発生と同時に、県内全域で震度6から7の強い「揺れ」が発生した。この揺れで、耐震性が低い住宅の倒壊や損壊が続出する。
- 沿岸部や埋め立て地の住宅地等で随所に液状化が発生し、住宅や道路の被害も広がっている。

(二次被害－土砂、津波、火災)

- 中山間地域では大規模な山津波(土石流)が住宅地を襲い、多くの住宅が流される。都市部でも随所でがけ崩れが発生し、住宅が巻き込まれている。
- 沿岸部では、相模湾、東京湾に大津波警報が発表され、相模湾沿岸の早いところでは、5分後から大津波が到達、長時間にわたり沿岸の住宅街や繁華街が飲み込まれる。
- 発災直後には数か所だった火災は、都市部の住宅街も含め、木造住宅が多い地域を中心に火件数が増えはじめ、折からの強風もあり、火災の延焼が広がっていく。
- 小さい余震が継続的に発生する中、数時間毎に激しい余震が続く。当初の揺れでは難を逃れた住宅の損傷が広がるほか、土砂災害の箇所も拡大する。

(通信障害)

- 有線ケーブルや基地局設備の損傷が頻発し、県内の広い範囲で通信障害が発生する。基地局等の非常用電源の停止が広がるにつれ、障害の範囲も広がり、道路の被災でアクセスが困難な地域では、復旧も遅れ障害が長期化する。

(高層ビル)

- 都市部の高層ビルでは、長周期地震動による強い揺れも発生する。エレベーターの停止が続発し、閉じ込めが多数発生すると同時に、上層階は孤立状態となる。

(交通機関の停止)

- 広範囲で橋の落下や路面の崩壊のほか、崩落した土砂や倒壊した建物などが道路を塞ぎ、主要道路の多くが通行不可能となる。
- アクセス道路が限られる中山間地域では多くの孤立地域が発生する。
- 鉄道の軌道の被災や、土砂崩れなどが多数発生し、県内全域の全ての鉄道が運行を停止する。
- 運行中の列車が強い揺れを感知し、その場で停止する。列車が接近している踏切は、遮断機が下りた状態が継続する。鉄道会社の復旧作業は追いつかず、長時間閉鎖となっている踏切が応急車両の通行も阻んでいる。

(ライフライン被害)

- 発災直後から県内の広範囲で停電が発生する。停電の影響に加え、水道管等の水道施設の被災も甚大で断水が発生し、そのエリアも広がっていく。下水道施設の被災も判明し、トイレが使用不能となるエリアが発生する。道路の被災が甚大なため、アクセスができないエリアも多く、ライフラインの復旧を遅らせる。

(2) 住民の対応**(住宅被害)**

- 激しい揺れにより、住宅の倒壊や家具の転倒などで下敷きになる者、落下物や転倒物による負傷者も多数発生する。住宅の損傷が激しく、屋内に閉じ込められる者も多数発生する。
- 消防や警察には、発災直後から救助要請が殺到し、対応しきれない状況が継続する。
- 負傷者に対する応急措置に戸惑う者や、家族が倒れた家具等の下敷きになり、救助要請を試みるも消防等に連絡がつかず、途方に暮れる者も多数発生する。

(二次災害一津波、土砂崩れ、火災からの避難)

- 自治体は、強い揺れと大津波警報の発表を受け、津波浸水想定区域の住民に避難指示を発令し、避難を呼びかける。また、強い揺れに伴って土砂災害警戒区域及びその他がけ地付近の住民に避難指示を発令し避難を呼びかける。
- 沿岸地域では、順次、襲ってくる津波からの避難が切迫している。
- 土砂災害警戒区域及びその他がけ地付近では、すでに土砂崩れが発生している箇所以外も、余震による更なる崩落のリスクの懸念が高まる。
- 徐々に広がる延焼火災に対して自治体は避難指示を呼びかける。
- 電話もインターネットも繋がらないため、リスク情報や避難情報の収集ができないことが、避難の判断を難しくしている。家族との連絡もつかず不安が高まる。
- 速やかに避難行動がとれる者がいる一方で、地域の災害リスクや避難場所等を把握しておらず、避難が遅れる者も多い。負傷し避難できない者や家族が損壊建物に封じ込められ、避難か救出かの判断に迷う者もいる。
- 沿岸地域では、海水浴客や観光客が不慣れな場所での津波からの避難に戸惑う。避難途中に家族や仲間が安否不明になり、避難先に留まるか、引き返すか、対応に戸惑う者もいる。また、車で避難中に渋滞に巻き込まれる者も少なくない。一部の津波避難ビルでは避難者が殺到し、別の避難場所への避難を強いられるケースも発生する。
- 土砂災害警戒区域では、地域の災害リスクを把握しておらず、避難指示の切迫度が理解出来ない者や通信障害で避難指示に気づかず、避難が遅れる者もいる。土砂災害の予兆が発生していても、そのリスクに気付かない者もいる。
- 自宅内で発生した火災への初期消火と避難に悩む者や、自宅周辺での火災に対する避難方法や避難場所が分からず、混乱し逃げ惑う者が多数発生する。
- 屋外では、ブロック塀や落下物で負傷する者も多く発生する。また、散乱物や道路の損傷が避難行動を妨げ、余震による二次災害の拡大が、不安を高める。
- 要配慮者はその特性によって、自宅の損傷や落下物の散乱など、通常と異なる環境の中、避難行動がとれなくなる者や、通信障害で情報源が絶たれ、避難や危険が迫っていることに気づかず、避難の判断が遅れる者も発生する。避難が切迫する中、家族や支援者の負傷や支援者等と連絡がつかず、避難行動がとれない者もいる。

(流言・飛語)

- 発災直後から、危機感をあおり、誤った行動を煽動するデマ情報が SNS で出回りはじめ、それを信じて拡散する動きが発生する。
- SNS のデマにより判断に迷う者や被災現場で混乱した群衆からデマ情報が発信され、混乱が生じるケースも発生する。

(高層マンション)

- エレベーターの封じ込めが多数発生する。エレベーターの停止が長期化し、脱水状態や体調悪化により、搬送が必要になる者もいる。
- 非常階段による移動が困難な要配慮者世帯などは、エレベーター停止により事実上孤立状態となる。また、周囲の避難所も満杯となり、多くの居住者は行き場がなくなることから、ライフラインが停止する中、在宅避難を選択する。
- 下層階での出火で避難に迷う者や、初期消火に手間取る者も発生する。

(自主防災活動)

- 県内全域で消火や救出・救助を求める 119 番や 110 番の通報が殺到する。消防や警察は部隊をフル稼働するが、被害が深刻な箇所に重点化せざるを得ず、その他の地域には手が回らない。自衛隊への災害派遣要請も行われるが、派遣までに時間がかかる。
- 揺れから難を逃れた消防団や自主防災組織の住民による消火や救助活動が始まる。活動している住民の中心は高齢者であり、被災した者も多く、消火栓や資機材の破損も重なる中、厳しい活動を強いられる。

(市街地・オフィス街)

- 強い揺れは、就業時間中のオフィス街や、観光客や買い物客などで賑わう繁華街なども襲う。不慣れな土地での対応に苦慮する買い物客や観光客もいる。
- 事業所や商業施設では、従業員や来客の安全確保、避難誘導などに追われる。また、負傷者の搬送、津波や火災、土砂災害などからの避難の判断や従業員の帰宅の判断に迷うケースも発生する。
- 地下街などでは、多くの来客が出口等に殺到し、憶測によるデマ情報も重なり、混乱を生じるケースもある。

(交通機関停止・帰宅困難・踏切閉鎖)

- 列車内に多数の乗客が長時間閉じ込められ、要救助者の発生や線路上を移動できない要配慮者への対応などが課題になる。
- 道路も随所で通行止めになり、車での移動が困難になる。
- 駅周辺は大混雑となり、学校や事業所は生徒や従業員の帰宅の判断に迫られる。また、交通事業者や自治体は一時滞在施設の対応に追われる。
- 津波が切迫する中で、徒歩や車で避難している一部の避難者が踏切閉鎖に遭遇し、対応に苦慮する。

(ライフライン停止)

- 水洗トイレが使えず、携帯トイレの備蓄がない世帯では、対応に苦慮する。
- 停電が命に直結する要配慮者がいる世帯では、電源の確保が切迫する。

2 避難生活

(1) 被害の様相

(避難所)

- 発災から1時間が経過する頃から、行き場をなくした住民などが避難所に向かい始める。
- 避難所の運営の役割を担う避難所運営委員のうち、深刻な被害を免れた住民が順次、避難所に到着するが、施設の損傷が酷く、開設ができない避難所も多い。
- 被害を免れた避難所においても、避難所運営委員の被災や自治体職員の不在による、人手不足のため、有志の避難者が加わるも、開設準備がなかなか進まない。
- 準備が整った避難所から順次、受付が始まるが、すでに避難者の入所が進んでしまい、後に再配置が難しくなることもある。
- 多くの避難所では停電や断水に見舞われ、水洗トイレも使えず、トイレ対策が深刻になる。
- 時間の経過とともに物資が不足し始め、道路の復旧の遅れなどから救援物資が届かない避難所では、物資の不足が大きな課題となる。
- ライフラインの停止した厳しい避難生活により、体調を悪化させる避難者が増加する。
- 時間の経過とともに、応援職員の配置が進むことで、避難所運営体制は安定し、医療や福祉の巡回支援も軌道に乗ってくる。その一方で、ペットの受け入れや要配慮者の生活環境など、避難所ごとの体制の違いも生じてくる。

(福祉避難所)

- 要配慮者を受け入れる福祉避難所は、施設や職員の被災により、施設の多くが開設できない。
- 要配慮者の入所施設では、ライフラインの停止により生活環境が悪化し、健康管理が大きな課題となる。
- 要配慮者の受け入れ環境の確保が深刻な課題となり、自治体は広域的な二次避難を進める。

(帰宅困難者一時滞在施設)

- 自治体による一時滞在施設の開設が進み、交通事業者と自治体による誘導が行われ入所が進むが、徒歩で帰宅を始める者も少なくない。
- 滞在時間が長くなるにつれ、要配慮者の健康管理などの課題が増えてくる。自治体や交通事業者による要配慮者の広域搬送の検討が進められる。

(在宅避難・車中泊避難・広域避難)

- 自宅の安全が確保できる者は、ライフラインの支障はあっても、混雑する避難所を避けて、在宅での避難生活を継続するケースが少なくない。
- 自宅の安全性に不安がある場合も、避難所の不足や避難所の生活環境への懸念から、自宅避難を選択するケースもある。
- 高層マンションでは、高層階での移動が困難になり、在宅避難をせざるを得ない状

況となる。また、周囲の避難所も満杯となり、多くの居住者は行き場がなくなることから、ライフラインが停止する中、在宅避難を選択する。

- ライフラインの停止が長期化する中、物資の確保や避難者の健康管理などの課題が顕在化してくる。
- 余震の揺れへの警戒やプライバシーの確保などの事情から、車中泊避難を選択する者や被災地を避けて、県外に広域避難する者も少なくない。
- 避難所以外に避難する避難所外避難者の数が膨大となり、自治体は避難者の把握と支援の提供が大きな課題となってくる。自治体は、避難所内外の避難者を把握し、管理するシステムの確立を急ぐ。
- 自治体は避難所外の避難者の把握ができず、支援が行き届かない。
- 自治体は被災地の厳しい生活環境から、県外を含む広域での二次避難場所や応急仮設住宅の提供について、県外の自治体との調整を進める。

(孤立地域)

- アクセス道路が絶たれ孤立した地域では、被災状況や被災者の状況やニーズの把握も難しく、被災者の生活支援と救出が大きな課題となる。

(2) 住民の対応

(避難所への入所)

- 開設された避難所は程なく満杯となり、入所をあきらめる避難者も多い。
- 自宅の安全性に不安を抱え、避難を検討する要配慮者が、個別スペースがなく、トイレも構造上、使用できないなどの理由で、入所を断念する者もいる。

(避難所の生活環境)

- ライフラインの停止で、避難所の生活が厳しさを増す。仮設トイレの開設が進まず、自治体への支援も遅れていることから、トイレは断水のため使用禁止となり、携帯トイレも備蓄が底をつき、1つの携帯トイレを複数人で使用する事態も発生する。
- 厳しい生活環境が継続することで、体調の悪化を招く者が増え、車中泊避難や被災地外への広域避難を検討する者も少なくない。

(女性や子ども、要配慮者への対応)

- 女性の避難者からは、物資の配布や物干し場、プライバシー空間の確保、トイレの防犯、乳幼児の対応などに不満が募るが、男性スタッフ中心で配慮が行き届かない。
- 車いす利用者や視覚障がい者等が、動線やトイレの補助などの課題を理由にトイレを我慢し、体調を悪化させる者もいる。また、物資の配布などの支援情報が届かない聴覚障がい者もいる。
- 体調が悪化する要配慮者が増加し、医療の提供が切迫するケースが発生する。福祉避難所への入所を求める声が高まるが、設置が進んでおらず調整がつかない。生活環境が整った被災地外等の施設への二次避難が課題となる。
- 盲導犬を伴う視覚障がいがある避難者への理解不足が顕在化する。

(帰宅困難)

- 一時滞在施設への入所者は、交通機関の復旧が見通せない中、徒歩での帰宅を始め

る者が増える。徒歩帰宅が困難な要配慮者は、自治体や交通事業者の搬送に期待しつつ、生活環境が整った場所への避難を求める者が増える。

(在宅避難・車中泊避難・広域避難)

- 自宅の被災のほか、避難所が満杯で入れない、ペットがいるなどの様々な理由から多くの被災者が避難所を避け、在宅避難や車中泊避難を継続する。自宅の安全性が確認できない被災者は、余震での倒壊などに不安を抱えながら在宅避難を継続する。液化化で傾いた住宅では、体調への影響を懸念しながら避難生活を継続する。
- 避難生活が長引くに従い、物資や医薬品が不足する。
- 避難所への移動の負担が大きい要配慮者も、自宅が無事な場合は、在宅避難を選択する者が多い。
- 体調に不安を抱える要配慮者は、避難生活が長引いたことによる体調悪化をにより、医療支援が緊急を要してくる。また、設備が整った福祉避難所への入所を調整するもなかなか実現しない。
- 医療的ケア児・者を抱える世帯など、電気が必須の避難者は、バックアップ電源が乏しくなり、電源の確保の緊急度が増す。

(孤立地域)

- 孤立地域では、物資や医療の支援が届かず通信も断絶しているため、避難生活は厳しさを増し、体調が悪化した避難者への医療の提供のほか、地域外への避難を求める声が高まる。

3 復旧・復興

(1) 被害の様相

- 避難生活が1か月を超え、ライフラインや交通機関の復旧が進んでくるが、住宅の全壊や大規模損壊などの被害を受けた被災者は、住宅を含めた生活再建の目途が立たず、避難生活が長期化する。
- 特に、津波で壊滅的な被害を受けた地域では、自治体の復興計画に基づく土地区画整理等に合わせた自宅の再建となり、避難生活がさらに長期化する。
- 避難所は半年程度で順次解消が進み、建設型応急住宅、民間賃貸住宅を借上げ提供する賃貸型応急住宅、公営住宅などへの入居が進む。
- また、被災が甚大で都市機能が制約される県内を避けて、知人や親戚などを頼った県外への避難も多くなり、自治体は県外自治体に災害救助法に基づく応急仮設住宅の提供依頼を継続する。
- 避難者は、住宅の再建のほか、教育や就労、医療や福祉の提供など、様々な生活再建の課題に直面する。特に生活環境の変化などによるメンタルも含めた健康への影響やコミュニティの喪失による生活意欲の減退など、生活再建に向けた課題が多様化し、個別化していく。
- 県外への避難者は、避難先での生活基盤が確立されつつある中、被災地への帰還

が問題になってくる。

- 被災地の復旧・復興が進む中で、災害救助法の適用の終了地域も拡大し、生活再建が進まない避難者にとって、応急仮設住宅からの退出が深刻な課題になる。

(2) 住民の対応

- 地元の建設型応急住宅への入居を待つ被災者は、避難所や二次避難所からの転居が進まない。
- 県外の親戚宅等への避難者は、自治体も把握が難しく、被災地の復旧状況や生活支援、帰還支援に関する情報が行き届かない。
- 被災地と広域避難先との二重生活を選択する世帯もあり、避難先で生活基盤ができる中、帰還か定住かの判断に迷う。
- 住宅を失った高齢世帯などは、住宅や生活の再建が困難になる。

【参考】主な被害の様相

	発災～1時間後	1～6時間後	6～24時間後	24～72時間後
被害の概要	【津波】 ・大津波警報発表 ・津波による避難者が発生 ・5～10分で第一波が到達 ・津波からの逃げ遅れ等による被害が発生 【火災】 ・各地で出火し、延焼が始まる 【揺れ】 ・余震が断続的に発生 ・家具の下敷きや自宅の倒壊による自力脱出困難者が多数発生 ・食器やガラスの飛散による負傷者が多数発生 ・家族や地域住民等により救出活動が始まる ・エレベーターの閉じ込めが多数発生	【津波】 ・津波が繰り返し襲来する ・各地で延焼火災が発生 【火災】 ・延焼火災からの避難者が増加 ・火災等で二次避難が必要な避難所が発生 【揺れ】 ・救助要請が相次ぐが、消防・警察では対応しきれない	【津波】 ・大津波警報が津波警報、注意報に順次切り替わる ・ビルや高台等で過ごす避難者が多数発生 【火災】 ・延焼がさらに拡大 【揺れ】 ・救助要請が断続的に続くが、消防・警察では対応しきれない	【津波】 ・津波注意報解除 【火災】 ・延焼は鎮火に向かう 【揺れ】 ・救出活動が進む
避難	・山間部で土砂災害等による孤立地域が発生 ・被災者が緊急避難場所、避難所へ向かう	・避難所に住民が集まり始める ・一部では開設できない避難所や避難者が集中し、受入れを停止する避難所が発生	・一部では食料や物資が不足する避難所が発生 ・在宅避難や避難所以外への避難者が増える	・火災からの避難者が増える ・広域避難や避難所間の移動が始まる ・避難所から自宅等に戻る避難者が増える
ライフライン	・断水、停電、ガス供給停止、通信障害が発生		・県内の広い範囲でライフライン停止が続く	・一部孤立地域で、基地局の非常電源が停止し、携帯電話やテレビ・ラジオの停波が発生
交通機関	【鉄道】 ・県内全ての鉄道が停止 ・鉄道の車内に多くの利用者が閉じ込め 【道路】 ・県内全域の道路で通行支障が発生 【帰宅困難】 ・駅周辺では、多数発生した帰宅困難者の滞留が激しくなる	【鉄道】 ・鉄道の車内に取り残された乗客の避難が順次進められる 【道路】 ・主要道路等で交通規制が実施される 【帰宅困難】 ・膨大な帰宅困難者が発生し、歩道の混雑や、一時滞在施設や避難所への移動が始まる	【道路】 ・主要道路等の交通規制が続く 【帰宅困難】 ・帰宅困難者の一部が避難所や一時滞在場所に集まり始める	・港湾の被災等で海上からのアクセスも困難な孤立地域が発生

	72 時間～1 週間後	1 週間～1 か月後	1 か月～6 か月	6 か月～
被害の概要	【火災】 ・延焼鎮火 【揺れ】 ・救出活動から搜索活動に移る	・搜索活動が続く		
避難		・罹災証明の発行が進み、公営住宅や民間住宅等の賃貸型応急仮設住宅へ入居する避難者が増えてくる ・災害関連死の防止を含め、心のケアや健康管理が課題となる	・建設型応急仮設住宅へ入居する避難者が増えてくる ・避難生活で健康を害し、災害関連死につながるケースが増加する ・避難所の集約が進む	・避難者の生活再建に向けて、支援ニーズときめ細かな支援が課題となる ・メンタル面で問題を抱える避難者が顕在化してくる
ライフライン	・臨時基地局や衛星通信設備の設置等により、徐々に復旧が進む ・新たな地域で、基地局の非常電源が停止し、通信の断絶が発生		・断水、停電が解消	
交通機関		【鉄道】 ・一部鉄道運行再開 【道路】 ・一部の道路では車線規制等が続く		

【参考】発災直後の主な場面における取るべき行動と事前の備え

自宅	
取るべき行動	
発災直後	身の安全確保 リビング・ダイニング ・食器棚やテレビの転倒、割れた窓ガラスの破片に注意する キッチン ・刃物や調理中の鍋や熱い油、冷蔵庫の転倒、飛散する電子レンジ等の家電に注意する 寝室 ・就寝時は瞬時の身の安全確保が困難なため、揺れを感じたら、布団や枕で頭部を守る 浴室 ・無防備の裸でいるため、揺れを感じたら、洗面器等をかぶりガラス破片から頭部を守る トイレ ・閉じ込められることがあるため、揺れを感じたら、ドアを開けて出口を確保する 高層マンション ・地上に比べ揺れも大きく、揺れ幅も激しくなる可能性がある
	事前の備え ☐ 自宅の耐震化 ☐ 家具や家電等の固定や落下防止 ☐ 窓ガラスなどの飛散防止対策
	周囲の状況確認・必要に応じて避難 自身が怪我をしている場合 ・周囲に助けを求める 津波浸水・土砂災害の危険がない場合 ・スリッパや靴により足元を保護 ・家族の安否を確認 ・火の元の確認 ・出口の確保 ・室内の状況確認 ・テレビやラジオ等から地震の情報を入手 津波浸水・土砂災害の危険がある場合 ・直ぐに近くの高台や津波避難ビル・タワー等に避難する ※避難をする場合は、可能な限りブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉める 自宅や周囲で火災が発生している場合 ・消火を試み、消火が不可能であれば、周囲に火災の発生を周知しながら、火災の延焼危険がない広域避難場所等に避難する ※天井に炎が達している場合は、消火が困難なため、避難をしましょう
揺れが収まった後	事前の備え ☐ 感震ブレーカー、住宅用火災警報器、消火器の設置 ☐ 出入口や寝室等にライト、靴、持ち出し用品の用意
	避難 自宅で避難が可能な場合 ・在宅避難を検討する 津波浸水・土砂災害の危険がある場合 ・津波や土砂災害の危険がなくなるまで避難し、その後は、指定避難所等への避難を検討する 自宅や周囲で火災が発生している場合 ・火災の危険がなくなるまで避難し、その後は、指定避難所等への避難を検討する 指定避難所が満員の場合 ・車中泊、テント泊、縁故避難、広域避難、指定外避難所避難等を検討する ※避難生活に配慮が必要な場合は、福祉避難所等への避難も検討する
事前の備え ☐ 最低3日間分の備蓄(水、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、モバイルバッテリー等) ☐ 車を保有している場合は、ガソリンや充電を満タンにしておく ☐ 避難場所、避難方法の把握	

県民アンケートにおいて回答が多い行動

【日中】

真っ先にする	自宅の被害状況の確認
次にする	家族の帰りを待つ
余裕が出たらする	必要な物を買いに行く 近所の様子を見に行く

【深夜】

真っ先にする	自宅や家族の被害確認
次にする	出口の確保
余裕が出たらする	部屋の後片付け

県民アンケートにおいて回答が多い避難先

一般地域	避難所が満員の場合
・指定避難所・場所	・広場等で野営・車中泊
・何とか自宅で避難	・何とか自宅で避難
・広場等で野営・車中泊	・親戚・知人宅

津波浸水地域	避難所が満員の場合
・指定避難所・場所	・広場等で野営・車中泊
・親戚・知人宅	・民間施設・ビル
・勤務先施設	・親戚・知人宅

外出先	
取るべき行動	
発災直後	身の安全確保 オフィス ・コピー機や机が移動、窓ガラスや照明が落下に注意する 高層ビル ・高層階ほど大きく長く揺れるため、エレベーターホール等で姿勢を低くする ショッピングモール ・商品の散乱やショーケースの転倒、看板の落下等に注意する エレベーター内 ・すべての行き先ボタンを押し、止まった階で降りる ・万が一、閉じ込められた場合は、インターホンで連絡をし、救助を待つ 駅 ・電光掲示板や看板等の落下、ホームからの転落に注意する ・地下鉄の場合は、地上出口への殺到によるパニックや群衆雪崩等に注意する 地下街 ・停電によるパニックや非常口への殺到による群衆雪崩等に注意する 繁華街 ・周辺ビルの窓ガラスや看板の落下、古いビルの倒壊に注意する 住宅街 ・ブロック塀や電柱、住宅の倒壊に注意する ・土砂災害に注意するため、速やかにがけ地から離れる ・津波に注意するため、速やかに高台や津波避難ビル・タワー等に向かう 山間部 ・土砂災害に注意するため、速やかにがけ地から離れる 沿岸部 ・津波に注意するため、速やかに高台や津波避難ビル・タワー等に向かう
	事前の備え ☐ 避難口や誘導灯等の避難経路の標識の確認 ☐ 外出時は両手があくリュックや歩きやすい靴を履く
	周囲の状況確認・必要に応じて避難 自身が怪我をしている場合 ・周囲に助けを求める 津波浸水・土砂災害の危険や火災がない場合 ・むやみな帰宅や移動は控え、近隣施設や一時滞在施設等に留まり、公共の情報を確認する ・施設管理者がいる場合は、施設管理者の指示に従い、冷静に行動する 津波浸水・土砂災害の危険がある場合 ・直ぐに近くの高台や津波避難ビル・タワー等に避難する 周囲で火災が発生している場合 ・周囲に火災が発生を周知しながら、火災の延焼危険がない指定緊急避難場所等に避難する
	事前の備え ☐ 必要最小限のグッズを入れた防災ポーチの携行
	帰宅が可能な場合 ・帰宅後、自宅の被害状況により、避難方法を検討する 帰宅が不可能な場合 ・帰宅が可能になるまで待機し、帰宅後、自宅の被害状況により、避難方法を検討する
	事前の備え ☐ 最低3日間分の備蓄(水、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、モバイルバッテリー等) ☐ 車を保有している場合は、ガソリンや充電を満タンにしておく ☐ 避難場所、避難方法の把握
避難	

移動中	
取るべき行動	
発災直後	身の安全確保 列車 ・緊急停止をするため、他の乗客への衝突や転倒に注意し、乗務員の指示に従う バス ・緊急停止をするため、他の乗客への衝突や転倒に注意し、乗務員の指示に従う 車 ・強い揺れを感じたら、ハザードランプを点灯させ、減速をしながら道路左側に停車する
	事前の備え ☐ 避難口や誘導灯等の避難経路の標識の確認 ☐ 外出時は両手があくリュックや歩きやすい靴を履く
	周囲の状況確認・必要に応じて避難 自身が怪我をしている場合 ・周囲に助けを求める 津波浸水・土砂災害の危険や火災がない場合 ・むやみな帰宅や移動は控え、近隣施設や一時滞在施設等に留まり、公共の情報を確認する ・乗務員がいる場合は、乗務員の指示に従い、冷静に行動する 津波浸水・土砂災害の危険がある場合 ・直ぐに近くの高台や津波避難ビル・タワー等に避難する 周囲で火災が発生している場合 ・周囲に火災が発生を周知しながら、火災の延焼危険がない指定緊急避難場所等に避難する ※車を離れる場合は、ドアをロックせず、キーを付けたまま離れる
揺れが収まった後	事前の備え ☐ 必要最小限のグッズを入れた防災ポーチの携行
	帰宅が可能な場合 ・帰宅後、自宅の被害状況により、避難方法を検討する 帰宅が不可能な場合 ・帰宅が可能になるまで待機し、帰宅後、自宅の被害状況により、避難方法を検討する
	事前の備え ☐ 最低3日間分の備蓄(水、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、モバイルバッテリー等) ☐ 車を保有している場合は、ガソリンや充電を満タンにしておく ☐ 避難場所、避難方法の把握
避難	

県民シナリオ 個別場面

場面 1 家具の下敷き

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被 害	揺れによる被害
------	------	-------	------	-----	---------

- ・突然の激しい揺れに動揺していると、家具が倒れてきた。
- ・とっさの出来事で、身を守る行動ができず、そのまま家具の下敷きになってしまった。
- ・下敷きになった瞬間、全身に激痛が走った。
- ・家具に両足が挟まれており、感覚が麻痺している。
- ・脱出を試みるが、腕の力だけでは抜け出せない。

■考慮事項

時刻	夜：就寝時間の場合は、身を守る安全確保行動が取れない可能性が高いため、揺れによる被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・周辺の家具や物を叩き、周囲に助けを求める。
- ・携帯電話などの通信手段が手元にある場合は、携帯電話を使用して助けを求めることも試みる。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。
- ・津波や土砂災害、火災等の二次災害の危険がある場合は、危険がない場所に立ち退き避難を検討する。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・家具や家電の固定、照明等の落下防止対策、ガラス等の飛散防止対策を行う。
- ・自宅の耐震対策を行う。

場面 2 倒壊した家具に家族が挟まれ、救出が困難

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被 害	揺れによる被害
・リビングで朝食中に突然の揺れ、椅子に座ってられない。食器棚が倒れ、割れた食器が散乱する。とっさに、飛び跳ねるテーブルに潜り、脚にしがみつき身を守る。 ・揺れが収まり、寝室にいる家族を見に行くと、地震の影響でドアが半開きで動かない。何とか中に入ると、家族が倒れた重いタンスの下敷きになっていた。声を掛けると応じてはくれたが、身動きがとれないようだ。 ・救助を求めるため、屋外に出ると、周囲の家屋のほとんどが倒壊していた。 ・周囲では自力で脱出した人が、倒壊家屋に取り残された家族の救出を試みているが、手が出せない様子で、私と同様に周囲に救助を求めている。携帯電話で消防に通報をしている者もいるが全く繋がらないと言っている。 ・停電の影響でエアコンが停止しているため、寝室の室温が上昇している。炎天下が予想されるため、家族の熱中症や体力消耗が懸念される。					

■考慮事項

時刻	夜：就寝時間の場合は、身を守る安全確保行動が取れない可能性が高いため、揺れによる被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・できる限り負傷者の応急手当を行い、119番通報をした上で、救助を試みる。
- ・人手が必要な場合は近所に支援を求める。
- ・津波や土砂災害、火災等の二次災害の危険がある場合は、危険がない場所に立ち退き避難を検討する。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・家具や家電の固定、照明等の落下防止対策、ガラス等の飛散防止対策を行う。
- ・自宅の耐震対策を行う。

場面3 高層マンションのエレベーターに閉じ込め

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被 害	揺れによる被害
------	------	-------	------	-----	---------

- ・自宅マンションのエレベーターに乗っている最中、突如、エレベーターが停止し、エレベーター内が激しく揺れた。
- ・揺れが収まると、エレベーター内は非常灯に切り替わり、薄暗くなった。
- ・突然の状況に、エレベーター内の他の乗客も、状況が飲み込めていない様子だった。
- ・慌てて、非常ボタンを押し、ビルの防災センターに救出を要請した。
- ・防災センターからは、激しい地震が原因で、これから業者を手配するが、しばらく時間がかかりそうだと返答があった。
- ・携帯電話が通じないため、周囲の状況が全く分からない。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が閉じ込められるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	－

☞取るべき行動

- ・全ての階の行き先ボタンを押し、止まった階で降りる。
- ・閉じ込められた場合は、非常ボタンやインターホンから連絡を取り、慌てず救助を待つ。

☞被害軽減のための事前対策

- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・ビルの管理者と話し合い、エレベーター内に備蓄ボックスなどを備えておく。

場面 4 飛散物で出血

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被 害	揺れによる被害
------	------	-------	------	-----	---------

- ・突然、自宅が激しく揺れ、咄嗟に身を守った。
- ・身を守りながら周囲を見ると、家が左右に激しく揺れ、家具や食器棚が今にも倒れそうなほど揺れているのが見えた。
- ・そのうち、食器棚が転倒したのだろうか、大きなガラスが割れる音がした。
- ・揺れが収まった後、周囲を確認すると、転倒した食器棚のガラスの破片が自分の腕に突き刺さっており、腕から出血していた。
- ・多量の出血に動揺し、どうしていいか分からない。

■考慮事項

時刻	夜：就寝時間の場合は、身を守る安全確保行動が取れない可能性が高いため、揺れによる被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・落下や転倒する物がない安全な場所に移動し、患部より心臓に近い部分を手などで圧迫することで止血を行う。
- ・止血方法が分からない場合は、周囲に助けを求める。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・家具や家電の固定、照明等の落下防止対策、ガラス等の飛散防止対策を行う。
- ・比較的安全な玄関やそこまでの経路をふさがないように、転倒や落下の可能性のある物の配置を工夫する。
- ・応急処置の方法を学んでおく。

場面 5 強い揺れによる落下物や玄関に損傷で封じ込め

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被 害	揺れによる被害
------	------	-------	------	-----	---------

- ・突然の激しい揺れに動揺し、逃げようと急いで玄関に向かった。
- ・激しい揺れで上手く走れずにいると、途中で家具が倒れてきた。
- ・咄嗟に左手で身をかばったが、激しい痛みが腕全体に走った。
- ・ようやく家具を押しのかけて、玄関に着くと、揺れの影響で家が傾いたのか、ドアがなかなか開かない。
- ・両手で開けようと試みたが、ドアが動かない。

■考慮事項

時刻	夜：就寝時間の場合は、身を守る安全確保行動が取れない可能性が高いため、揺れによる被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・封じ込められないよう、揺れを感じた場合、なるべく早くドアを開けておく。
- ・玄関が開かない場合、他の出入り口や窓などの脱出できる場所を探す。
- ・閉じ込められたら、開口部から声を上げる、壁を叩くなど、外部にその旨を伝える。
- ・携帯電話などの通信手段が手元にある場合は、携帯電話を使用して助けを求めることも試みる。
- ・落下や転倒する物がない安全な場所に移動し、応急手当を行う。
- ・応急手当が分からない場合は、周囲に助けを求める。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・家具や家電の固定、照明等の落下防止対策、ガラス等の飛散防止対策を行う。
- ・比較的安全な玄関やそこまでの経路をふさがないように、転倒や落下の可能性のある物の配置を工夫する。
- ・応急処置の方法を学んでおく。
- ・自宅の耐震対策を行う。

場面 6 入浴時に被災

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被 害	揺れによる被害
------	------	-------	------	-----	---------

- ・シャワーを浴びている時に、突然、自宅が激しく揺れた。
- ・床が濡れて滑るため、立っていることができず、しゃがみ込みながら、必死で身を守った。
- ・そのうち、外から食器棚が転倒したのだろうか、大きなガラスが割れる音がした。
- ・揺れが収まった後、ドアを開けて周囲を確認すると、様々な物が散乱していた。
- ・どのように対応していいのか、分からない。

■考慮事項

時刻	夜：入浴している可能性が高いため、風呂場で揺れによる被害にあうリスクが高い。
季節	冬：低体温症のリスクがある。
天候	雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・脱出ができるよう浴室のドアを開放する。
- ・浴室のガラスやカミソリ等の鋭利な物で負傷しないように気を付ける。
- ・脱衣所でバスタオルや衣服を身に付け、躊躇なく安全な場所に移動する。
- ・浴槽にお湯を貯めている場合は、今後の避難生活における非常用水として、栓を抜かずに貯めておく。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・脱衣所にスリッパやバスローブなどを置いておく。
- ・家具や家電の固定、照明等の落下防止対策、ガラス等の飛散防止対策を行う。
- ・比較的安全な玄関やそこまでの経路をふさがないように、転倒や落下の可能性のある物の配置を工夫する。

場面 7 自宅で火災発生

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被 害	火災
------	------	-------	------	-----	----

- ・調理中に激しい揺れが襲い、調理中のでんぷら油が激しく波打ち、周囲に飛び散った。
- ・すぐさまコンロから離れ、身を守った。
- ・激しい揺れが収まるまで数分かかった。
- ・揺れが収まった後に、ようやく周囲を確認すると、鍋から火が出ていた。
- ・咄嗟にコンロのスイッチは切ったが、火は収まらない。
- ・周囲には煙も充満し始め、動揺して何をしたいか分からない。

■考慮事項

時刻	昼・夜：調理時間中の場合は、揺れによる火災が発生する可能性が高い。
季節	秋・冬：乾燥しているため、延焼する可能性がある。
天候	晴（強風）：延焼する可能性がある。

🏠取るべき行動

- ・まずはコンロから離れ、身を守る行動をとる。
- ・消火器などによる初期消火に努める。
- ・炎が天井まで達している場合は、消火を諦め、避難を開始する。
- ・避難をする場合は、鼻をハンカチなどで覆い、煙が充満する前に、速やかに低い姿勢で周囲に火災発生を知らせながら避難をする。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・消火器を設置し、操作方法を把握しておく。
- ・住宅用火災警報器を設置する。
- ・出火が想定される付近に燃えやすい物を置かないようにし、周辺の落下防止対策を行う。

場面 8 高層マンション内で火災発生

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被 害	火災
------	------	-------	------	-----	----

- ・突然、自宅の高層マンションがゆっくりと揺れ始め、静観していると徐々に長い激しい揺れに変わった。
- ・気が動転し、その場でしゃがみ込むだけで精一杯だった。
- ・テーブルやイスが大きく動き、照明も揺れており、揺れが完全に収まるまで長時間かった。
- ・家の中には様々な物が散乱しており、片づけを始めてしばらくすると、火災を知らせる全館放送があった。
- ・ふと窓を見ると、黒煙が下から上がってきているのが見えた。
- ・恐らく下の階からの出火と思われるが、煙が凄いため、具体的な場所は分からない。
- ・慌てて玄関に出ると、近所の人も慌てた様子で出てきた。
- ・非常階段に向かうが、無事に地上に出れるか心配である。

■考慮事項

時刻	昼・夜：調理時間中の場合は、揺れによる火災が発生する可能性が高い。
季節	秋・冬：乾燥しているため、延焼する可能性がある。
天候	晴(強風)：延焼する可能性がある。

🏠取るべき行動

- ・窓やドア類は閉め、煙の進入を防ぐ。
- ・火災の影響がない非常階段がある場合は避難をする。
- ・避難が困難な場合は、その状況と救助が必要である旨を外部や消防等に伝える努力をする。
- ・消火活動が可能な状況であれば、協力に努める。
- ・避難する場合は、鼻をハンカチなどで覆い、煙が充満する前に、速やかに低い姿勢で周囲に火災発生を知らせながら避難する。その際、要配慮者がいる場合は避難支援を行う。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・消火器を設置し、操作方法を把握しておく。
- ・消火設備の有無や使用方法を把握しておく。
- ・住宅用火災警報器を設置する。
- ・出火が想定される付近に燃えやすい物を置かないようにし、周辺の落下防止対策を行う。
- ・非常階段や避難はしご等の避難方法を把握しておく。
- ・日頃から避難経路を確認しておき、自治会等で安否確認や避難訓練、消火訓練を実施しておく。
- ・管理組合等で階段を使って患者を搬出できる担架やストレッチャー等の資機材を整備しておく。

場面 9 自宅に火災が迫る

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被 害	火災
------	------	-------	------	-----	----

- ・突然、激しい揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れに困惑し、その場でうずくまると、照明が激しく揺れるのが見えた。
- ・揺れの後、周囲を確認すると、机の上の荷物が転倒しただけで、他に大きな被害はなかった。
- ・しばらくテレビや携帯電話で地震の情報収集をしていると、窓の外から隣家が炎上しているのが見えた。
- ・早く避難しないといけないため、焦りが募る。

■考慮事項

時刻	昼・夜：調理時間中の場合は、揺れによる火災が発生する可能性が高い。
季節	秋・冬：乾燥しているため、延焼する可能性がある。
天候	晴（強風）：延焼する可能性がある。

📍取るべき行動

- ・避難をする場合は、鼻をハンカチなどで覆い、煙が充満する前に、速やかに低い姿勢で周囲に火災発生を知らせながら避難する。
- ・消火活動が可能な状況であれば、協力に努める。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。
- ・自治体の避難指示がある場合は、指定された避難場所を目指して避難する。自治体からの情報が確認できない場合は、風上に向かい、自治体が指定する広域避難場所など、広い場所を目指して避難する。

📍被害軽減のための事前対策

- ・火災からの避難先となる広域避難場所などの標識及び避難方法を把握しておく。

場面 10 ライフラインが停止した自宅

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被 害	ライフライン停止
------	------	-------	------	-----	----------

- ・突然、自宅が激しく揺れ、咄嗟に身を守った。
- ・身を守りながら周囲を見ると家が左右に激しく揺れ、家具や食器棚が今にも倒れそうなくらい揺れているのが見えた。
- ・そのうち、食器棚が転倒したのだろう、大きなガラスが割れる音がした。
- ・揺れの後、自宅を確認すると、電気、上下水道、ガス、通信全てのライフラインが停止していた。
- ・このまま自宅にいるか避難所に行くか判断に迷う。

■考慮事項

時刻	夜：停電による暗闇のため、行動が制限される可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・携帯電話のライト、ヘッドライト、懐中電灯等を用いて、周囲の安全を確認しながら行動する。
- ・津波や土砂災害、火災等の二次災害の危険がある場合は、危険がない場所に立ち退き避難を行う。
- ・自宅の倒壊等の危険がなく、自宅での避難生活が可能である場合は、在宅避難を検討する。
- ・備蓄物資が不足する場合は、避難所に支援を求める。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・ライフラインの停止を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・車を保有している場合は、ガソリンや充電を常に満タンにしておく。
- ・停電を想定し、モバイルバッテリーやポータブルバッテリーなどを備え、バッテリーを満充電の状態にしておく。
- ・在宅避難に備え、住宅の耐震化、家具の転倒防止などの耐震対策を行っておく。

場面 11 マンションのトイレが使用不可

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被 害	ライフライン停止
------	------	-------	------	-----	----------

- ・地震で大きく揺れたものの、自宅に被害はなかった。
 - ・自宅のトイレの水も無事に流れたため、断水は発生していないと思われた。
 - ・しばらくすると、全館放送で「トイレを使用しないでください」との放送があった。
 - ・汚水配管が破損している影響で、1階の住民の部屋では汚水が溢れているとのこと。
 - ・断水はしていないのに、トイレが使用不可能になったため、どうしていいか分からない。
- ※自宅の配管などに異常がなくても、建物内外の下水設備の損傷や停電の影響で使えなくなる場合がある。

■考慮事項

時刻	夜：停電による暗闇のため、行動が制限される可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・トイレの使用は中止し、携帯トイレや簡易トイレを使用する。備蓄がない場合は、身の回りの物で代用する。
- ・避難所等のトイレの利用も検討する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ライフラインの停止を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・トイレの利用可否について、自主点検方法を確認し、マンション全体で共有しておく。
- ・排泄物の置場について、マンション内でルール化しておく。
- ・避難所などのトイレ環境を確認しておく。
- ・携帯トイレの利用方法等を学んでおく。

場面 12 エレベーター停止により、孤立したマンション高層階

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被 害	その他被害
------	------	-------	------	-----	-------

- ・突然、自宅の高層マンションがゆっくりと揺れ始め、静観していると、徐々に長い激しい揺れに変わった。
- ・テーブルやイスが大きく動き、照明も揺れており、揺れが完全に収まるまで長時間かかった。
- ・室内を見てみると、物が散乱しており、足の踏み場もなかった。
- ・このまま室内に留まることに不安を感じたため、地上に出ることにした。
- ・廊下に出てみると、エレベーターが停止しており、非常階段のドアも損傷して、開かないため、フロア全体が孤立状態になってしまった。
- ・周囲の部屋から人も出てきて、同じように地上に行けない事を心配している。

■考慮事項

時刻	夜：停電による暗闇のため、行動が制限される可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・火災などの危険が迫る場合は、避難はしごなど、他の避難方法を検討し、立ち退き避難に努める。
- ・津波の場合は、浸水深以上の上層階に避難する。
- ・要配慮者等の避難行動に支障がある場合は、周囲に協力を求める。
- ・建物の倒壊等の危険がなく、自宅での避難生活が可能である場合は、在宅避難を検討する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ライフラインの停止を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・マンションの自主防災組織や自治会の訓練などに参加し、災害時に助け合う、顔の見える関係づくりに努める。
- ・非常階段や避難はしご等の避難方法を把握しておく。

場面 13 家族と連絡が取れない

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被 害	その他被害
------	------	-------	------	-----	-------

- ・地震で大きく揺れたものの、自宅に被害はなかったことから、テレビを点けて被害の情報収集をしていた。
- ・しばらくすると、速報で〇〇地域の上空を飛ぶヘリの映像が映し出された。
- ・至る所で火災が発生し、多くの建物が倒壊してるように見えた。
- ・〇〇地域は家族が仕事をしている地域である。
- ・慌てて携帯電話で連絡を試みたが、一向に繋がらない。
- ・電波はつながっているが、電話が輻輳しているようである。
- ・家族の安否確認が出来ず、不安が募る。

■考慮事項

時刻	夜：停電による暗闇のため、行動が制限される可能性がある。
季節	－
天候	－

🏠取るべき行動

- ・まずは自身の安全確保を第一に、津波や土砂災害、火災等の二次災害の危険がある場合は、危険がない場所に立ち退き避難を行う。
- ・電話が輻輳している場合は、メールやSNS等で連絡を試みる。
- ・災害用伝言ダイヤル(171)や災害用伝言板(Web171)を利用して安否確認を試みる。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・災害時の安否確認方法や避難先、待ち合わせ場所等を話し合っておく。
- ・災害用伝言ダイヤル(171)や災害用伝言板(Web171)の利用方法を習得しておく。
- ・付近の公衆電話の位置を確認しておく。
- ・家族の勤務先の連絡先を確認しておく。

場面 14 SNS で出回る真偽がわからない情報に戸惑う

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被 害	その他被害
------	------	-------	------	-----	-------

- ・地震で大きく揺れたものの、自宅に被害はなかったことため、テレビを点けて被害の情報収集をしていた。
- ・しばらくすると、知人からインターネット上に〇〇ダムが決壊するとの緊急情報が掲載されているから、早急に避難をした方が良いとのメッセージが送信されてきた。
- ・〇〇ダムは自宅の近くを流れる河川の上流にあるため、もし決壊すれば自宅も被害を受けるはずである。
- ・心配になり、携帯電話で SNS を検索すると、〇〇ダムの擁壁に亀裂が入り、次の余震で決壊する見込みという情報が写真付きで投稿されていた。
- ・危険を呼び掛ける投稿が SNS でされていたが、SNS の情報を信用していいか分からない。

■ 考慮事項

時刻	夜：停電による暗闇のため、行動が制限される可能性がある。
季節	－
天候	－

🏠 取るべき行動

- ・テレビ、ラジオ、防災行政無線、自治体等のホームページなどの公共の情報から、真偽を判断し、むやみに拡散させない。

🏠 被害軽減のための事前対策

- ・テレビ、ラジオ、防災行政無線、自治体等のホームページ、防災アプリ、避難所などの公共の情報を確認する方法を習得しておく。

場面 15 津波が迫る中、幼児 2 人を連れての避難

主体区分	一般県民	場所の特徴	津波浸水危険地域	被 害	津波
------	------	-------	----------	-----	----

- ・ 3 歳と 1 歳の子供と自宅にいる時に激しい揺れが発生し、夢中で子供を抱え、自宅のテーブルに潜って安全を確保した。
- ・ 携帯電話からは緊急速報メールのアラートが鳴り響き、大津波警報発表による緊急避難を呼びかけていた。自宅は沿岸部のため焦りが募る。
- ・ 避難先は車で 3 分位の小学校のため、急いで、子供の必要な物だけまとめて、車に乗り込んだ。
- ・ 改めて周囲を確認すると、倒壊している家や折れている電柱があるため、車が通行できるか心配だ。子供を連れての徒歩移動か、車移動か、判断に迷う。

■考慮事項

時刻	夜：就寝時間の場合は、避難行動まで時間がかかるため、津波による被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

☞取るべき行動

- ・ 津波の切迫が予想される場合は、何も持たずに直ちに避難する。
- ・ 支援が必要な場合は、周囲に声を掛けて支援を求める。
- ・ 車で避難せざるを得ない場合、移動途中に高い建物があり、入れる場合は躊躇せず逃げ込み、浸水深以上の高さに避難する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ ハザードマップ等で浸水区域、浸水の程度、津波の到達時間などを確認しておく。
- ・ 津波避難場所や津波避難ビルの位置を把握しておくとともに、避難経路や津波標識、津波フラッグを確認しておく。
- ・ 車での避難が避けられない場合、複数の迂回路を想定しておく。

場面 16 マンションに津波が迫る

主体区分	一般県民	場所の特徴	津波浸水危険地域	被 害	津波
------	------	-------	----------	-----	----

- ・突然、自宅が激しく揺れ、咄嗟に身を守った。
- ・身を守りながら周囲を見ると、マンションが左右に激しく揺れ、家具や食器棚が今にも倒れそうなくらい揺れているのが見えた。
- ・そのうち、食器棚が転倒したのだろうか、大きなガラスが割れる音がした。
- ・揺れが収まった後、周囲を確認すると、食器棚や様々な物が床に散乱していた。
- ・周囲の状況に茫然としていると、携帯電話からアラートが鳴り響いた。
- ・携帯電話を確認すると、大津波警報の発表を知らせる緊急速報メールであり、屋外でもスピーカーから避難を呼びかける音声聞こえた。
- ・持ち出し品を探しながら避難の準備をしていると、窓の外から遠くに見える海岸付近の住宅から土埃が上がっているのが見えた。
- ・津波がもう迫っている状況に気が動転した。

■考慮事項

時刻	夜：就寝時間の場合は、避難行動まで時間がかかるため、津波による被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

🏠取るべき行動

- ・津波の切迫が予想される場合は、何も持たずに直ちに避難する。
- ・危険が切迫している場合は、可能な限り上層階に垂直避難する。
- ・垂直避難が困難で避難時間が確保できる場合は、近くの高台や津波避難タワー、津波避難ビル、高層ビル等の高い建物に避難する。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・ハザードマップ等で浸水区域、浸水の程度、津波の到達時間などを確認しておく。
- ・津波避難場所や津波避難ビルの位置を把握しておくとともに、避難経路や津波標識、津波フラッグを確認しておく。

場面 17 家族の居場所が分からない中、自宅に津波が迫る

主体区分	一般県民	場所の特徴	津波浸水危険地域	被 害	津波
------	------	-------	----------	-----	----

- ・突然、自宅が激しく揺れ、咄嗟に身を守った。
- ・身を守りながら周囲を見ると、家が左右に激しく揺れ、家具や食器棚が今にも倒れそうなくらい揺れているのが見えた。
- ・揺れが収まった後、周囲を確認すると、食器棚や様々な物が床に散乱していた。
- ・周囲の状況に茫然としていると、携帯電話からアラートが鳴り響いた。
- ・携帯電話を確認すると、大津波警報の発表を知らせる緊急速報メールであり、屋外でもスピーカーから避難を呼びかける音声聞こえた。
- ・庭先にいたはずの家族が見当たらない。
- ・一人で避難していいか判断に迷う。

■考慮事項

時刻	夜：就寝時間の場合は、避難行動まで時間がかかるため、津波による被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

🏠取るべき行動

- ・直ちに家族の安否確認を行い、確認できない場合でも、津波が切迫する場合は躊躇せず避難行動をとる。
- ・周囲に津波発生を知らせながら、すぐに近くの高台や津波避難タワー、津波避難ビル、高層ビル等の高い建物に避難する。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・津波避難場所や津波避難ビルの位置を把握しておくとともに、避難経路や津波標識、津波フラッグを確認しておく。
- ・ハザードマップ等で浸水区域、浸水の程度、津波の到達時間などを確認しておく。
- ・津波発生時は、自らの判断で直ちに避難する意識を共有しておく。

場面 18 余震で土砂災害が迫る

主体区分	一般県民	場所の特徴	土砂災害危険地域	被 害	土砂
------	------	-------	----------	-----	----

- ・突然、激しい揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れに困惑し、その場でうずくまると、照明が激しく揺れるのが見えた。
- ・揺れの後、周囲を確認すると机の上の荷物が転倒したのみで、他に大きな被害はなかった。
- ・しばらくテレビや携帯電話で地震の情報収集をしていると、時折、余震により自宅が揺れた。
- ・窓の外を見ると、裏山から少量の土砂が自宅の庭に流出しているのが確認できた。
- ・山肌を見ると、水が湧き出していた。
- ・なるべく自宅で過ごしていただきたいが、避難をするか判断に迷う。

■考慮事項

時刻	夜：就寝時間の場合は、身を守る安全確保行動が取れない可能性が高いため、土砂災害による被害にあうリスクが高い。 土砂災害の兆候に気付きにくい可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 土砂災害のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・土砂災害警戒区域や、がけ地、急傾斜地などにいる場合、またはその確認ができない場合でも、小さな落石など、土砂災害の前兆と感じたら、直ちに、安全な場所に立ち退き避難する。
- ・立ち退き避難の余裕がない場合は、なるべく上階のがけ地の反対側の部屋に移動する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ハザードマップで、自宅周辺の危険度、避難場所や避難経路などを確認しておく。
- ・土砂災害警戒区域等を事前に確認しておくとともに、がけ崩れや地すべり、土石流などの土砂災害の前兆を確認しておく。
 - がけ崩れ：ひび割れ、小石が落ちてくる、水が湧き出る、湧き水が止まる・濁る、地鳴りが聞こえる等
 - 地すべり：ひび割れ・陥没、亀裂や段差の発生、水が噴き出す、井戸や沢の水が濁る、地鳴り・山鳴りがする、樹木が傾く等
 - 土石流：山鳴りがする、急に川の水が濁る、腐った土の臭いがする、降雨が続くのに川の水位が下がる、立木が裂ける音や石がぶつかり合う音が聞こえる等

場面 19 商業施設で被災

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	揺れによる被害
------	------	-------	------	----	---------

- ・大型商業施設にいる時に、突然、激しい揺れに襲われた。
- ・あまりの激しい揺れに、その場でしゃがみ込み、必死で身を守った。
- ・周囲では、緊急地震速報のアラートが鳴り響き、店員が身を守るよう叫んでいる。
- ・身を守っていると、棚やガラスが割れる音が聞こえた。
- ・揺れが収まった後、周囲を確認すると、商品やガラスが散乱しており、天井からは水も漏れていた。

■考慮事項

時刻	昼：利用者が多い可能性があることから、多くの人が被災し、避難時の雑踏事故にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・余震時の落下物などに注意し、上着やカバンなどで頭部を守りながら、施設の誘導に従い、冷静に避難する。

📌被害軽減のための事前対策

- ・避難口や誘導灯などの避難経路の標識を確認しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・訓練でドロップ(まず低く)、カバー(頭を守り)、ホールドオン(動かない)の基本動作を身に付けておく。また、屋内、屋外、商業施設等、その場の状況に合わせた安全確保行動を把握しておく。

場面 20 会社のオフィスビルで被災

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	揺れによる被害
------	------	-------	------	----	---------

- ・執務中に突然の周期の長い、強い揺れ。オフィスの机や棚、OA 機器が大きく左右に移動する。社員の多くは机の下に潜るなどして安全は確保できたが、机や棚、OA 機器にぶつかった社員数名が負傷した。
- ・フロアの状態を確認すると、エレベーターは停止しているが、非常階段は使用可能であった。しかし、25 階であるため、地上に降りるためには非常に時間がかかる。
- ・ビルの防災センターから「安全が確認できるまで待機をしてください」とアナウンスがされた。
- ・長時間の待機となる場合は、事務所内に飲料水や食料がないことから、一時滞在施設や避難所に避難したいが、外の状況が不明なため、指示に従い、オフィス内に待機する。一部の社員は、家族の安否が気になるため、早く帰宅したいと上司に申し出ている。

■考慮事項

時刻	昼：利用者が多い可能性があることから、多くの人が被災し、避難時の雑踏事故にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・むやみに帰宅や移動することは控え、事業所が安全であれば、安全に帰宅できる見通しが立つまで社内に待機する。
- ・火災の発生など、危険が迫る場合は、消防計画等に基づき、従業員や来所者の避難誘導に努める。
- ・入居している他の事業者、住民とともに、ビル内で災害対応に協力する。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・避難口や誘導灯などの避難経路の標識を確認しておく。
- ・消防計画や業務継続計画で、従業員や来所者の安全確保、避難対策を定めておく。
- ・オフィスの耐震対策、従業員の事業所内待機のための備蓄等を整備しておく。
- ・ハザードマップ等で付近のリスクを把握しておくとともに、避難する指定緊急避難場所や避難所の場所及び避難方法を把握しておく。

場面 21 交通機関の停止により、会社で帰宅困難に

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	帰宅困難
------	------	-------	------	----	------

- ・突然、周囲の携帯電話から緊急地震速報のアラートが鳴り響き、会社のオフィスのビルが激しく揺れた。
- ・あまりの揺れに、夢中で机の下にしがみつくなのが精一杯であった。
- ・揺れの後、室内を見てみると書類や物が散乱しているが、大きな被害はなさそうである。
- ・しばらくテレビや携帯電話で地震の情報収集をしていると、列車は全線ストップし、再開の見通しが立っていないとの情報を見つけた。
- ・自宅までは徒歩で5時間以上はかかると思うが、自宅までの帰宅途中の道も通行可能なのか、分らない。
- ・会社からは、帰宅は個人の判断との指示があった。
- ・当分の間、列車の再開は見込めなさそうであるため、会社で待機するか、自宅へ徒歩で帰宅するか判断に迷う。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 帰宅に時間がかかる可能性がある。

☞取るべき行動

- ・むやみに帰宅や移動することは控え、事業所が安全であれば、安全に帰宅できる見通しが立つまで社内に待機する。
- ・テレビ、ラジオ、防災行政無線、自治体等のホームページなどの公共の情報を確認する。
- ・会社の指示も踏まえ、地域の防災活動等に協力する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。
- ・オフィスの耐震対策、従業員の事業所内待機のための備蓄等を整備しておく。
- ・ハザードマップ等で付近のリスクを把握しておくとともに、避難する指定緊急避難場所や避難所の場所及び避難方法を把握しておく。
- ・離れている家族の安否確認の方法を決めておく。

場面 22 交通機関の停止により、駅で帰宅困難に

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	帰宅困難
------	------	-------	------	----	------

- ・自宅から遠方の駅のホームで列車を待っている最中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・周囲の携帯電話から緊急地震速報のアラートが鳴り響き、頭上の電光掲示板が大きく揺れている。
- ・あまりの揺れに、その場でしゃがみ込むのが、精一杯であった。
- ・揺れの後、周囲をみると、利用客のほとんどがしゃがみ込み、茫然としている。
- ・駅員が慌ただしく走り回り、利用客の安否を確認している。
- ・しばらく、テレビや携帯電話で地震の情報収集をしていると、列車は全線ストップし、再開の見通しが立っていないとの駅のアナウンスがあった。
- ・自宅までの帰り道が通行可能なのかも、分からない。
- ・当分の間、列車の再開は見込めなさそうであるため、どうするか判断に迷う。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 帰宅に時間がかかる可能性がある。

📍取るべき行動

- ・駅員の誘導に従い行動し、移動する場合は、ホームからの転落、頭上の案内板の落下、群衆雪崩への巻き込まれ等に気を付けて移動する。
- ・むやみに帰宅や移動することは控え、帰宅困難者を受け入れている一時滞在施設などに留まり、テレビ、ラジオ、防災行政無線、自治体等のホームページなどの公共の情報を確認する。

📍被害軽減のための事前対策

- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 23 地下街の非常階段に通行者が殺到

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	その他被害
------	------	-------	------	----	-------

- ・地下街を歩いている最中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・周囲の携帯電話から緊急地震速報のアラートが鳴り響き、あまりの揺れに、その場でしゃがみ込むのが精一杯であった。
- ・揺れの後、周囲をみると周囲の店舗の商品が散乱していた。
- ・このまま地下にすることが不安になり、地上に出ようと非常階段に向かおうと、避難者で溢れかえっていて危険な状態であり、押されて転倒している者もいる。
- ・施設管理者からは、複数の出口の案内と冷静な行動を呼びかけるアナウンスが流れている。

■考慮事項

時刻	昼：利用者が多い可能性があることから、多くの人が被災し、避難時の雑踏事故にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📍取るべき行動

- ・火災や津波の浸水など、二次被害の可能性がないか確認に努める。
- ・地下街に残るか、地上へ出るかを冷静に判断する。
- ・地上に出る場合は、アナウンスと案内標識を頼りに、比較的空いている出口を見つけて冷静に脱出する。
- ・負傷者がいる場合、管理者に伝えとともに、周囲と協力して応急手当てに努め、消防への連絡を試みる。
- ・要配慮者がいる場合は、避難の支援に努める。

📍被害軽減のための事前対策

- ・避難口や誘導灯などの避難経路の標識を確認しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。

場面 24 外出先で買い物中に被災し、家族と連絡が取れない

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	その他被害
------	------	-------	------	----	-------

- ・外出先で一人で買い物中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・周囲の携帯電話から緊急地震速報のアラートが鳴り響き、あまりの揺れに、その場でしゃがみ込むのが精一杯であった。
- ・揺れの後、周囲をみると周囲の店舗の商品が散乱していた。
- ・店員の指示で屋外に出るも、この状況では列車はストップし、道は渋滞していることが予想されるため、徒歩で帰るしかない。
- ・徒歩では数時間かかるため、家族の安否が気になり、携帯電話で安否を確認しようとしたが、電話もメールも繋がらない。
- ・時間をおいて掛け直してみるが、全く繋がらない。
- ・特に、電話を持っていない小学生の息子は無事か気がかりである。

■考慮事項

時刻	昼：多くの人が一斉に電話をすると輻輳する可能性があることから、電話が繋がらないリスクがある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 帰宅に時間がかかる可能性がある。

📞取るべき行動

- ・電話が輻輳している場合は、メールやSNS等で連絡を試みる。
- ・災害用伝言ダイヤル(171)や災害用伝言板(Web171)を利用して安否確認を試みる。
- ・事前に家族で決めてある避難場所や待ち合わせ場所がある場合は、そこに避難し、連絡を待つ。

📞被害軽減のための事前対策

- ・災害時の安否確認方法や避難先、待ち合わせ場所等を話し合っておく。
- ・災害用伝言ダイヤル(171)や災害用伝言板(Web171)の利用方法を習得しておく。

場面 25 デマでパニックに

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	その他被害
------	------	-------	------	----	-------

- ・ショッピングモールで買い物中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・周囲の携帯電話から緊急地震速報のアラートが鳴り響き、あまりの揺れに、その場でしゃがみ込むのが精一杯であった。
- ・揺れの後、周囲をみると周囲の店舗の商品が散乱していたものの、大きな被害はなさそうであった。
- ・しばらくすると、一部の利用客が出口に向かっていく様子が見えた。
- ・その様子を見て、周囲の利用客も動揺している。
- ・そのうち、逃げていく利用客から、ショッピングモールが倒壊するから早く避難したほうがいいとの叫び声が聞こえた。
- ・叫び声に反応した周囲の利用客が一斉に出口に向かっていった。
- ・出口は混乱し、従業員が倒壊の危険はないため、冷静に行動するよう呼びかけている。

■考慮事項

時刻	昼：利用者が多い可能性があることから、多くの人が被災し、避難時の雑踏事故にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・施設管理者の案内等の正しい情報の把握に努め、施設管理者に従い冷静に行動する。
- ・余震時の落下物などに注意し、上着やカバンなどで頭部を守りながら、施設の誘導に従い、冷静に避難する。
- ・デマの判断に迷う情報に触れた場合は、当該施設管理者に確認するとともに、テレビ、ラジオ、防災行政無線、自治体等のホームページなどの公共の情報から正しい情報を確認する。

📌被害軽減のための事前対策

- ・テレビ、ラジオ、防災行政無線、自治体等のホームページなどの公共の情報を確認する方法を習得しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 26 観光施設で被災、津波が迫る

主体区分	一般県民	場所の特徴	津波浸水危険地域	被害	津波
------	------	-------	----------	----	----

- ・海岸に近い水族館に家族で訪問中に、激しい揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れに、その場でしゃがみ込むのが精一杯であった。
- ・家族にはケガはなかったが、周りを見ると一部の展示物が倒れている。
- ・館外に出ようとしたが、館内放送で津波の危険があるため、外には出ず屋上に避難するように呼びかけられた。
- ・職員の誘導により屋上に出ると、既に数十名の避難者がおり、心配するように海の方を見ている。
- ・職員からは津波の浸水が予想されることから、警報が解除されるまでは、屋上に留まることになる旨の説明があった。
- ・しばらくすると、津波が来襲していることが見え、瞬く間に水族館周辺も浸水してしまった。津波の漂流物により水族館が揺れ、窓ガラスが割れる音が響いている。
- ・津波が屋上まで迫ってこないか、家は大丈夫だろうか、いつ帰宅できるのか、様々な不安が頭をよぎる。

■考慮事項

時刻	昼：利用者が多い可能性があることから、多くの人が被災し、津波による被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・津波注意報が解除されるまで、施設の誘導に従い、屋上への避難を継続する。
- ・浸水が引き避難所等に案内された場合は、躊躇なく入所するとともに、交通機関の状況等の情報収集に努め、安全が確認できるまでむやみに移動しない。

📌被害軽減のための事前対策

- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。
- ・観光施設のハザード情報を確認しておき、いざという時の行動を想定しておく。

場面 27 商業施設で被災、土砂災害に巻き込まれる

主体区分	一般県民	場所の特徴	土砂災害危険地域	被害	土砂
------	------	-------	----------	----	----

- ・大型商業施設にいる時に、突然、激しい揺れに襲われた。
- ・あまりの激しい揺れに、その場でしゃがみ込み、必死で身を守った。
- ・揺れが収まった後、周囲を確認すると商品が一部散乱しているのみで、あまり被害はなさそうに見えた。
- ・外の様子は分からないが、この揺れであれば被害は少なそうに思える。
- ・念のために屋外に出ようと、1階の出口に向かって歩いていると、突然、施設が揺れ、目の前が土砂でふさがれてしまった。

■考慮事項

時刻	夜：土砂災害の兆候に気付きにくい可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 土砂災害のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・施設の誘導に従い、冷静に避難する。
- ・救助されるまで商業施設にある物で対応する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・土砂災害警戒区域等を事前に確認しておくとともに、がけ崩れや地すべり、土石流などの土砂災害の前兆を確認しておく。
 - がけ崩れ：ひび割れ、小石が落ちてくる、水が湧き出る、湧き水が止まる・濁る、地鳴りが聞こえる等
 - 地すべり：ひび割れ・陥没、亀裂や段差の発生、水が噴き出す、井戸や沢の水が濁る、地鳴り・山鳴りがする、樹木が傾く等
 - 土石流：山鳴りがする、急に川の水が濁る、腐った土の臭いがする、降雨が続くのに川の水位が下がる、立木が裂ける音や石がぶつかり合う音が聞こえる等
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 28 飛散物で出血

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	揺れによる被害
------	------	-------	------	----	---------

- ・ 繁華街を歩いている最中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・ あまりの揺れにその場でうずくまるのが精一杯であった。
- ・ 身を守りながら周囲を見ると、ビルが左右に激しく揺れ、看板が今にも落ちそうなくらい揺れているのが見えた。
- ・ そのうち、看板かガラスが落下したのだろうか、大きな割れる音がした。
- ・ 揺れが収まった後、周囲を確認すると、ビルから落下したガラスの破片が自分の腕に突き刺さっており、腕から出血をしていた。
- ・ 多量の出血に動揺し、慌てて腕をつまみ止血を試みるが、どうしていいか分からない。

■考慮事項

時刻	夜：頭上からの落下物に気付きにくい可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・ 二次災害がない堅牢な建物などの場所に移動し、患部より心臓に近い部分を手などで圧迫することで止血を行う。
- ・ 止血などの応急手当が分からない場合は、周囲に助けを求める。
- ・ 移動をする場合は、カバンなどで頭を守り、なるべく広い道路を移動するとともに、電信柱や門柱、ブロック塀、看板、自動販売機などの倒壊・落下の可能性があるもの、地面の亀裂、浮き上がり又は陥没したマンホール、切れている電線など危険な場所、物から離れて移動する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ 日頃から頭上や近くの倒壊物などの危険物を意識しておく。
- ・ 止血などの応急手当方法を確認しておく。
- ・ 万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・ 外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 29 ブロック塀の下敷き

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	揺れによる被害
------	------	-------	------	----	---------

- ・家族と住宅街を歩いている最中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れにその場で立ち尽くしていると、住宅のブロック塀が倒れてきた。
- ・ブロック塀が倒れた衝撃で、足に衝撃と激痛が走り、何とか抜け出したが、家族は足を挟まれ、動かせない。
- ・一人では、ブロックを起こせず、どう対応してよいかわからない。

■考慮事項

時刻	夜：頭上からの落下物に気付きにくい可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・二次災害に注意し、移動して周囲に助けを求める。
- ・周囲に人がいない場合は、携帯電話を使用しての救助要請も試みる。
- ・可能な限り応急手当を行い、負傷程度によって、搬送方法を検討する。
- ・応急手当がわからない場合は、周囲に助けを求める。
- ・移動をする場合は、カバンなどで頭を守り、なるべく広い道路を移動するとともに、電信柱や門柱、ブロック塀、看板、自動販売機などの倒壊・落下の可能性のあるもの、地面の亀裂、浮き上がり又は陥没したマンホール、切れている電線など危険な場所、物から離れて移動する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・応急手当方法を確認しておく。
- ・日頃から頭上や近くの倒壊物などの危険物を意識しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 30 延焼する火災で逃げ惑う

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	火災
------	------	-------	------	----	----

- ・住宅街を歩いている最中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れに、その場でうずくまるのが精一杯であった。
- ・初めて訪れる場所であったため、揺れの後、安全な場所へ避難しようとするが、土地勘がなく周辺を右往左往してしまう。
- ・ふと気づくと、焦げ臭いが周囲に漂っており、近くに煙も見える。
- ・広い開けた場所を探しているうちに、強風で周囲が煙に包まれてしまった。
- ・慌てて逃げるものの、方向感覚を失い、気づいた時には目の前に火の手が迫っていた。
- ・不慣れな場所で、避難場所の検討もつかず、混乱してくる。

■考慮事項

時刻	夜：迅速な避難行動が困難となる可能性がある。
季節	秋・冬：乾燥しているため、延焼する可能性がある。
天候	晴(強風)：延焼する可能性がある。

🏠取るべき行動

- ・火災の方向から離れ、周囲に声を掛け、避難場所などを確認する。
- ・延焼箇所を避け、避難誘導看板などに留意しながら、風上の広い場所に避難する。
- ・移動をする場合は、カバンなどで頭を守り、なるべく広い道路を移動するとともに、電信柱や門柱、ブロック塀、看板、自動販売機などの倒壊・落下の可能性があるもの、地面の亀裂、浮き上がり又は陥没したマンホール、切れている電線など危険な場所、物から離れて移動する。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・火災からの避難先となる広域避難場所などの標識及び避難方法を把握しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 31 交通機関の停止により、繁華街で帰宅困難に

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	帰宅困難
------	------	-------	------	----	------

- ・ 繁華街を歩いている最中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・ あまりの揺れに、その場でうずくまるのが精一杯であった。
- ・ 揺れが収まった後、周囲を確認すると、ビルから落下したガラスや外壁、看板が散乱していた。
- ・ 自宅に帰宅するため、余震に怯えながら、最寄り駅を目指して歩き始めた。
- ・ 駅に到着すると、駅員が慌ただしく走り回り、列車は全線ストップし、再開の見通しが立っていないとのアナウンスをしていた。
- ・ 駅周辺は帰宅困難者で溢れており、一部の利用者は苛立ち始めていた。
- ・ 自宅までの帰り道が通行可能なのかも、分からない。
- ・ 当分の間、列車の再開は見込めなさそうであるため、どうするか判断に迷う。

■考慮事項

時刻	昼：利用者が多い可能性があることから、多くの人々が被災し、帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 帰宅に時間がかかる可能性がある。

📍取るべき行動

- ・ むやみに帰宅や移動することは控える。駅員などの案内や、テレビ、ラジオ、防災行政無線、自治体のホームページや SNS などから、帰宅困難者を受け入れている一時滞在施設等を確認し、そこに泊まる。
- ・ やむを得ず、徒歩で帰宅する場合は、災害時帰宅支援ステーションなどで休憩や情報収集しながら、カバンなどで頭を守り、なるべく広い道路を移動するとともに、電信柱や門柱、ブロック塀、看板、自動販売機などの倒壊・落下の可能性のあるもの、地面の亀裂、浮き上がり又は陥没したマンホール、切れている電線など危険な場所、物から離れて移動する。

📍被害軽減のための事前対策

- ・ 万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・ 外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 32 街灯が消え暗闇の中、帰宅

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	ライフライン停止
------	------	-------	------	----	----------

- ・会社から帰宅するため、最寄り駅に向かって歩いている最中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れにその場でうずくまるのが精一杯であった。
- ・揺れが収まった後、周囲を確認すると、ビルから落下したガラスや外壁、看板が散乱していた。
- ・自宅に帰宅するため、余震に怯えながら、最寄り駅を目指して歩き始めた。
- ・駅に到着すると、列車は全線ストップしていたため、列車での帰宅は諦め、徒歩で数時間かかる自宅を目指して歩き始めた。
- ・歩き始めて1時間経つと、徐々に都心から離れ、周囲の街灯も少なくなってきたため、路上の散乱物に注意しながら歩かざるを得ない。
- ・遠くを見ると停電しているのだろうか、暗闇が広がっている。
- ・さらに歩き始めていくと、住宅街に入ったが、停電のためか、どの家も明かりがついておらず、暗闇となっていた。
- ・携帯電話の明かりを頼りに、歩き進めるが、路上には倒壊したブロック塀などの散乱物もあり、注意が必要である。
- ・この先はさらに人家が減るため、このまま暗闇の中、帰宅を目指すか、判断に迷う。

■考慮事項

時刻	昼：利用者が多い可能性があることから、多くの人が被災し、帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 帰宅に時間がかかる可能性がある。

📍取るべき行動

- ・やむを得ず徒歩で帰宅する場合でも、危険を感じたら移動をやめ、帰宅困難者を受け入れている一時滞在施設や避難所などが確認できた場合は、そこにとどまり、明るくなってから移動を開始する。
- ・移動をする場合は、カバンなどで頭を守り、なるべく広い道路を移動するとともに、電信柱や門柱、ブロック塀、看板、自動販売機などの倒壊・落下の可能性のあるもの、地面の亀裂、浮き上がり又は陥没したマンホール、切れている電線など危険な場所、物から離れて移動する。

📍被害軽減のための事前対策

- ・平時から、自宅と職場間の徒歩帰宅ルート及びルート沿いの避難施設を確認しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 33 避難場所の確認ができない

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	その他被害
------	------	-------	------	----	-------

- ・ 繁華街を歩いている最中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・ あまりの揺れにその場でうずくまるのが精一杯であった。
- ・ 揺れが収まった後、周囲を確認すると、ビルから落下したガラスや外壁、看板が散乱していた。
- ・ 自宅に帰宅するため、余震に怯えながら最寄り駅を目指して歩き始めた。
- ・ 駅に到着すると、列車は全線ストップしており、帰宅困難者で溢れていた。
- ・ 自宅まで距離があるため、安全な場所へ、ひと先ず避難したい。
- ・ 土地勘がないため、近くの避難場所を探そうとするが、携帯電話がインターネットに繋がらないため、地図の検索ができない。

■考慮事項

時刻	昼：多くの人が一斉に携帯電話でインターネットに接続すると輻輳する可能性があることから、インターネットに繋がらないリスクがある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 帰宅に時間がかかる可能性がある。

☞取るべき行動

- ・ やむを得ず徒歩で帰宅する場合でも、危険を感じたら移動をやめ、帰宅困難者を受け入れている一時滞在施設や避難所などが確認できた場合は、そこにとどまり、明るくなってから移動を開始する。
- ・ 移動をする場合は、カバンなどで頭を守り、なるべく広い道路を移動するとともに、電信柱や門柱、ブロック塀、看板、自動販売機などの倒壊・落下の可能性のあるもの、地面の亀裂、浮き上がり又は陥没したマンホール、切れている電線など危険な場所、物から離れて移動する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ 平時から、自宅と職場間の徒歩帰宅ルート及びルート沿いの避難施設を確認しておく。
- ・ 万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・ 外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 34 繁華街で被災、津波が迫る

主体区分	一般県民	場所の特徴	津波浸水危険地域	被害	津波
------	------	-------	----------	----	----

- ・繁華街を歩いている最中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・身を守りながら周囲を見ると、ビルが左右に激しく揺れ、看板が今にも落ちそうなくらい揺れているのが見えた。
- ・揺れが収まった後、周囲を確認すると、ビルから落下したガラスや外壁、看板が散乱していた。
- ・しばらく様子を見ていると、携帯電話から緊急速報メールのアラートが鳴り響き、津波警報発表による避難を呼びかけていた。
- ・海が近いと思うが、土地勘がないため、携帯電話から調べるもインターネットに繋がりにくい。
- ・津波の到達が気になる中、焦りが募る。

■考慮事項

時刻	昼：利用者が多い可能性があることから、多くの人が被災し、津波による被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

📍取るべき行動

- ・周囲に助けを求めながら、避難誘導看板なども頼りに、近くの高台や津波避難タワー、津波避難ビル、高層ビル等の高い建物に避難を行う。

📍被害軽減のための事前対策

- ・ピクトグラムや津波の標識などの意味を確認しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 35 海水浴中に被災し、津波が迫る家族

主体区分	一般県民	場所の特徴	津波浸水危険地域	被害	津波
------	------	-------	----------	----	----

- ・家族で海水浴場での遊泳をしていると、何かサイレンのような音が聞こえた。
- ・砂浜では誰かが旗を振っており、避難を呼びかけているように見えた。
- ・慌てて砂浜に戻ると、大津波警報が発表されたため、海岸にいる人はすぐから離れるよう、防災無線からの呼びかけが聞こえた。
- ・見渡した限り、近くに高台は無さそう。
- ・津波がいつ来るか分からず、焦りが募る。

■考慮事項

時刻	昼：利用者が多い可能性があることから、多くの人々が被災し、津波による被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・周囲に助けを求めながら、避難誘導看板なども頼りに、近くの高台や津波避難タワー、津波避難ビル、高層ビル等の高い建物に避難を行う。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・ピクトグラムや津波の標識などの意味を確認しておく。
- ・海水浴場への到着時に、周囲の避難施設を確認しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 36 津波からの避難途中で知人が安否不明に

主体区分	一般県民	場所の特徴	津波浸水危険地域	被害	津波
------	------	-------	----------	----	----

- ・海辺を友人と歩いている最中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れに、その場でうずくまるのが精一杯であった。
- ・揺れの後、地域の住民と思われる人達が避難していく様子が見えた。
- ・初めて訪れる場所で土地勘がなく、この地域が津波の浸水の危険があるか分からないため、避難する人達の流れについて行くことにした。
- ・避難途中に携帯電話から緊急速報メールのアラートが鳴り響き、津波警報の発表による避難を呼びかけていた。
- ・屋外のスピーカーからも避難を呼びかけている。
- ・津波警報の発表に焦りが募るが、前に見える高台まではまだ距離がありそうである。
- ・すると、「誰かが津波が迫っている」と叫ぶ声が聞こえたため、無我夢中で高台を目指して走った。
- ・高台に到着し、周囲を見渡すと、一緒に避難していた友人の姿がないことに気付いた。
- ・友人を探すため、高台を下ろうとするが、既に津波が押し寄せていた。

■考慮事項

時刻	昼：利用者が多い可能性があることから、多くの人が被災し、津波による被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

📌取るべき行動

- ・津波が切迫する場合は、避難施設の指定の有無に関わらず、高さのある建物に避難する。
- ・津波は第1波の後、第2波、第3波と続き、後続の波の方が大きいことも多いため、津波注意報が解除されるまでは、絶対に戻らない。

📌被害軽減のための事前対策

- ・ピクトグラムや津波の標識などの意味を確認しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 37 津波から徒歩で避難中に踏切封鎖に遭遇し、迂回を迫られる

主体区分	一般県民	場所の特徴	津波浸水危険地域	被害	その他被害
------	------	-------	----------	----	-------

- ・帰宅するため、自宅近くの海辺を歩いている最中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れに、その場でうずくまるのが精一杯であった。
- ・揺れの後、この地域は津波浸水の危険があることを思い出した。
- ・念のために高台に向かうことを決意し、歩いて向かっていると、携帯電話から緊急速報メールのアラートが鳴り響き、津波警報の発表による避難を呼びかけていた。
- ・屋外のスピーカーからも避難を呼びかけているのが聞こえる。
- ・さらに避難を進めると、高台手前の踏切に差し掛かった。
- ・踏切は遮断機が下りていたため、しばらく待っていたが列車は通過せず、遮断機も上がらない。
- ・踏切を渡らないと高台まで時間がかかるため、津波が迫っている中、焦りが募る。

■考慮事項

時刻	昼：利用者が多い可能性があることから、多くの人が被災し、津波による被害にあうリスクが高い。 夜：迅速な避難行動が困難となる可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

📍取るべき行動

- ・津波が切迫する場合は、避難施設の指定の有無に関わらず、高さのある建物に避難する。
- ・避難場所が踏切の先にしかなく、津波が迫っている場合は、踏切の警報器付近にある非常ボタンを押し、列車の通行を十分確認の上、踏切を通過することも検討する。

📍被害軽減のための事前対策

- ・ハザードマップ等で浸水区域、浸水の程度、津波の到達時間などを確認しておく。
- ・津波避難場所や津波避難ビルの位置を把握しておくとともに、避難経路や津波標識、津波フラッグを確認しておく。
- ・複数の迂回路を想定しておく。

場面 38 津波が迫る中、避難した津波避難ビルが避難者で満杯で困惑する避難者

主体区分	一般県民	場所の特徴	津波浸水危険地域	被害	その他被害
------	------	-------	----------	----	-------

- ・海水浴のため、浜辺を散策中に突然、大きな揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れに茫然とし、その場で立ち尽くしていた。
- ・揺れの後、周囲を見ると一部の海水浴客は避難を始めていた。
- ・津波を心配して避難していると思うが、周囲には高台はなく、ビルが多数ある。
- ・避難している海水浴客は次々と近くのビルに入っていく。
- ・慌てて、海水浴客が避難するビルに入ろうとするが、既に多数の避難者が押し寄せており、入ることができなかった。
- ・その時、携帯電話から緊急速報メールのアラートが鳴り響き、津波警報発表による避難を呼びかけていた。
- ・屋外のスピーカーからも避難を呼びかけているのが聞こえる。
- ・津波が迫る中、他のビルに入っているかわからず、判断に迷う。

■考慮事項

時刻	昼：利用者が多い可能性があることから、多くの人が被災し、津波による被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・津波が切迫する場合は、避難施設の指定の有無に関わらず、高さのある建物に避難する。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・ピクトグラムや津波の標識などの意味を確認しておく。
- ・海水浴場への到着時に、周囲の避難施設を確認しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 39 登山中に被災し、土砂災害の危険が迫る登山客

主体区分	一般県民	場所の特徴	土砂災害危険地域	被害	土砂
------	------	-------	----------	----	----

- ・登山中に突然、大きな揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れに困惑し、その場でうずくまると、周囲の崖から落石しているのが見えた。
- ・揺れの後、周囲を確認すると至る所に落石があり、崖の一部が崩れていた。
- ・山肌を見ると、水が湧き出している。
- ・余震の事を考え、この場所に留まるか、下山するか判断に迷う。

■考慮事項

時刻	夜：土砂災害の兆候に気付きにくい可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 土砂災害のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 雪崩のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・土砂災害警戒区域やがけ地、急傾斜地などにいる場合は、落石や滑落などに注意しながら、区域外や斜面から離れた近くの平地まで移動し、安全の確認が取れるまで待機する。
- ・移動をする場合は、カバンなどで頭を守り、なるべく広い道路を移動するとともに、電信柱や門柱、ブロック塀、看板、自動販売機などの倒壊・落下の可能性のあるもの、地面の亀裂、浮き上がり又は陥没したマンホール、切れている電線など危険な場所、物から離れて移動する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・土砂災害警戒区域等を事前に確認しておくとともに、がけ崩れや地すべり、土石流などの土砂災害の前兆を確認しておく。
 - がけ崩れ：ひび割れ、小石が落ちてくる、水が湧き出る、湧き水が止まる・濁る、地鳴りが聞こえる等
 - 地すべり：ひび割れ・陥没、亀裂や段差の発生、水が噴き出す、井戸や沢の水が濁る、地鳴り・山鳴りがする、樹木が傾く等
 - 土石流：山鳴りがする、急に川の水が濁る、腐った土の臭いがする、降雨が続くのに川の水位が下がる、立木が裂ける音や石がぶつかり合う音が聞こえる等
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 40 緊急停止した列車に閉じ込め、要救助者発生

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	揺れによる被害
------	------	-------	------	----	---------

- ・列車で通勤中、車内に緊急地震速報のアラートが鳴り響いた瞬間、列車が急停止した。
- ・急停止に伴い、満員状態の車内では身動きが取れず、押しつぶされそうになっている乗客の悲鳴が上がっている。
- ・停止して間もなく、車内が大きく揺れ、再び車内に悲鳴が響いた。
- ・吊革につかまり、なんとか体制を維持していると、窓からは周囲の建物の壁やガラスが落ちてくる様子が見えた。
- ・揺れの後、車内放送があり、地震の影響で列車は全線でストップし、復旧の見込みは不明とのアナウンスがあった。
- ・車内は停電しており、空調がストップしているため、熱気が充満している。
- ・トイレにも行きたいが、駅から離れた場所に停車しているため、ドアが開いても駅まで時間がかかりそうである。
- ・停止から1時間経ってもドアが開かず、長時間にわたる閉じ込めで具合が悪くなった乗客が出始めたため、乗客の一人が、非常通報ボタンを押し、乗務員に状況を訴えている。
- ・いらだった乗客が非常用ドアロックでドアを開けると言い出している。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📍取るべき行動

- ・非常通報ボタンを押して、乗務員に状況を伝え、乗務員の誘導に従い冷静に避難する。
- ・要救助者への対応は医療関係者がいれば協力を要請し、搬送が必要な場合は、常務員や消防などに連絡し、対応を依頼する。

📍被害軽減のための事前対策

- ・平時から、自宅と職場間の徒歩帰宅ルート及びルート沿いの避難施設を確認しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 41 バスで移動中、渋滞に遭遇し、車内に閉じ込め

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	揺れによる被害
------	------	-------	------	----	---------

- ・バスで帰宅中、車内に緊急地震速報のアラートが鳴り響いた瞬間、バスが急停止した。
- ・急停止に伴い、満員状態の車内では身動きが取れず、押しつぶされそうになっている乗客の悲鳴が上がっている。
- ・停止して間もなく、車内が大きく揺れ、再び車内に悲鳴が響いた。
- ・吊革につかまり、なんとか体制を維持していると、窓からは周囲の建物の壁やガラスが落ちてくる様子が見えた。
- ・揺れの後、車内放送があり、余震を警戒してしばらく車内にいるようにとアナウンスがあった。
- ・しばらく車内で待機していると、運転士からアナウンスがあり、道路にはがれきが散乱しており、これ以上の通行ができないと知らされた。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 帰宅に時間がかかる可能性がある。

📍取るべき行動

- ・津波や土砂災害、火災等の二次災害の危険がある場合は、危険がない場所に立ち退き避難を行う。
- ・自宅等への動線となる道路の安全や利用できる公共交通機関などが確認できるまでは、むやみに帰宅や移動することは控え、帰宅困難者を受け入れている一時滞在施設などに留まり、家族等の安否確認や、テレビ、ラジオ、防災行政無線、自治体等のホームページなどの公共の情報を確認する。
- ・やむを得ず、徒歩で帰宅する場合は、災害時帰宅支援ステーションなどで休憩や情報収集しながら、カバンなどで頭を守り、なるべく広い道路を移動するとともに、電信柱や門柱、ブロック塀、看板、自動販売機などの倒壊・落下の可能性のあるもの、地面の亀裂、浮き上がり又は陥没したマンホール、切れている電線など危険な場所、物から離れて移動する。

📍被害軽減のための事前対策

- ・平時から、自宅と職場間の徒歩帰宅ルート及びルート沿いの避難施設を確認しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 42 緊急停止した地下鉄に閉じ込め

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	揺れによる被害
------	------	-------	------	----	---------

- ・地下鉄で通勤中、車内に緊急地震速報のアラートが鳴り響いた瞬間、列車が急停止した。
- ・急停止に伴い、満員状態の車内では身動きが取れず、押しつぶされそうになっている乗客の悲鳴が上がっている。
- ・停止して間もなく、車内が大きく揺れ、再び車内に悲鳴が響いた。
- ・揺れの後、車内放送があり、地震により列車は全線でストップし、復旧の見込みは不明とのアナウンスがあった。
- ・車内は停電しており、空調がストップしているため、熱気が充満している。
- ・トンネル内は暗く、周囲の状況を確認することが出来ないが、トンネルの壁が近くドアからの避難は難しそうである。
- ・停止から1時間経ってもドアが開かず、長時間にわたる閉じ込めで具合が悪くなった乗客が出始めたため、乗客の一人が、非常通報ボタンを押し、乗務員に状況を訴えている。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📍取るべき行動

- ・運行会社の安全確認が完了するまで待機し、乗務員や運行会社からの情報や誘導に従い、冷静に移動する。

📍被害軽減のための事前対策

- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 43 車で移動中、地震が発生し帰宅困難に

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	揺れによる被害
------	------	-------	------	----	---------

- ・車で一般道を移動中、携帯電話から緊急速報メールのアラートが鳴り響いた。
- ・突然の事態に動揺しつつも、減速しながら路肩に停車すると、車内が激しく揺れた。
- ・身を守りながら周囲を見ると、交通標識が左右に激しく揺れ、信号機が今にも落ちそうなくらい揺れているのが見えた。
- ・揺れの後、周囲を確認すると、道路上に一部飛散物が散乱しているものの、通行自体は問題ないように見えた。
- ・しばらくすると、一部の車が徐行しながら飛散物を避け、運転を再開するのが見えた。
- ・他の車と同じように運転を再開してよいのか、歩いて避難した方がよいのか、判断に迷う。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。 夜：停電の場合は暗闇のため、見通しが悪くなることから交通事故等のリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 帰宅に時間がかかる可能性がある。

📍取るべき行動

- ・急ブレーキを避け、安全に道路の左側に停止させる。停止後は、カーラジオ等により地震情報や交通情報を確認する。
- ・引き続き車を運転する場合は、道路の損壊、信号機の作動停止、道路上の障害物などに十分注意する。
- ・土砂や津波の二次災害の恐れがある場合は車を置いて避難し、できる限り道路外の場所に移動しておき、やむを得ず道路上に置いて避難するときは、道路の左側に寄せて駐車し、エンジンを止め、キーは付けたまま、ドアはロックせずに車を離れる。
- ・自宅等への動線となる道路の安全や利用できる公共交通機関などが確認できるまでは、むやみに帰宅や移動することは控え、帰宅困難者を受け入れている一時滞在施設などに留まり、家族等の安否確認や、テレビ、ラジオ、防災行政無線、自治体等のホームページなどの公共の情報を確認する。
- ・やむを得ず、徒歩で帰宅する場合は、災害時帰宅支援ステーションなどで休憩や情報収集しながら、カバンなどで頭を守り、なるべく広い道路を移動するとともに、電信柱や門柱、ブロック塀、看板、自動販売機などの倒壊・落下の可能性のあるもの、地面の亀裂、浮き上がり又は陥没したマンホール、切れている電線など危険な場所、物から離れて移動する。

📍被害軽減のための事前対策

- ・平時から、自宅と職場間の徒歩帰宅ルート及びルート沿いの避難施設を確認しておく。
- ・避難誘導看板やピクトグラムなどの意味を理解しておく。
- ・自治体や道路管理者の防災情報を確認する方法を習得しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。
- ・緊急交通路に指定された場合、通航制限が生じるため、平時から、自宅と職場間の道路が緊急交通路想定路線に指定されているかをホームページなどで事前に確認しておく。

場面 44 列車が緊急停止し、帰宅困難に

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	帰宅困難
------	------	-------	------	----	------

- ・列車で帰宅中、車内に緊急地震速報のアラートが鳴り響いた瞬間、列車が急停止した。
- ・急停止に伴い、満員状態の車内では身動きが取れず、押しつぶされそうになっている乗客の悲鳴が上がっている。
- ・停止して間もなく、車内が大きく揺れ、再び車内に悲鳴が響いた。
- ・揺れの後、車内放送があり、地震の影響で列車は全線でストップし、復旧の見込みは不明とのアナウンスがあった。
- ・車内は停電しており、空調がストップしているため、熱気が充満している。
- ・停止から3時間後、ようやく乗務員によりドアが解放された。
- ・乗客が次々と、ドアに腰を下ろし、お尻を前方にずらしながら、線路に降りていった。
- ・乗務員の案内によると、最寄り駅までは線路上を歩いて、10分かかるとのこと。
- ・最寄り駅まで移動しても、交通機関は全てストップしているため、今後どうするか判断に迷う。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 帰宅に時間がかかる可能性がある。

☞取るべき行動

- ・津波や土砂災害、火災等の二次災害の危険がある場合は、危険がない場所に立ち退き避難を行う。
- ・運行会社の安全確認が完了するまで待機し、乗務員や運行会社からの情報や誘導に従い、冷静に移動する。
- ・自宅等への動線となる道路の安全や利用できる公共交通機関などが確認できるまでは、むやみに帰宅や移動することは控え、帰宅困難者を受け入れている一時滞在施設などに留まり、家族等の安否確認や、テレビ、ラジオ、防災行政無線、自治体等のホームページなどの公共の情報を確認する。
- ・やむを得ず、徒歩で帰宅する場合は、災害時帰宅支援ステーションなどで休憩や情報収集しながら、カバンなどで頭を守り、なるべく広い道路を移動するとともに、電信柱や門柱、ブロック塀、看板、自動販売機などの倒壊・落下の可能性のあるもの、地面の亀裂、浮き上がり又は陥没したマンホール、切れている電線など危険な場所、物から離れて移動する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・平時から、自宅と職場間の徒歩帰宅ルート及びルート沿いの避難施設を確認しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 45 緊急停止した列車内で停電が発生

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	ライフライン停止
------	------	-------	------	----	----------

- ・列車で帰宅中、車内に緊急地震速報のアラートが鳴り響いた瞬間、列車が急停止した。
- ・急停止に伴い、満員状態の車内では身動きが取れず、押しつぶされそうになっている乗客の悲鳴が上がっている。
- ・停止して間もなく、車内が大きく揺れ、再び悲鳴が響いた。
- ・吊革につかまり、なんとか体制を維持していると、車内が急に薄暗くなり、一部の照明のみが点灯していた。
- ・揺れの後、車内放送があり、地震の影響で列車は全線でストップし、復旧の見込みは不明とのアナウンスがあった。
- ・車内は停電しており、空調がストップしているため、熱気が充満している。
- ・停止から 30 分後、車内の照明が消え、真っ暗となってしまった。
- ・乗客は真っ暗な車内に閉じ込められている状況に不安を訴えている。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📍取るべき行動

- ・津波や土砂災害、火災等の二次災害の危険がある場合は、危険がない場所に立ち退き避難を行う。
- ・運行会社の安全確認が完了するまで待機し、乗務員や運行会社からの情報や誘導に従い、冷静に移動する。
- ・自宅等への動線となる道路の安全や利用できる公共交通機関などが確認できるまでは、むやみに帰宅や移動することは控え、帰宅困難者を受け入れている一時滞在施設などに留まり、家族等の安否確認や、テレビ、ラジオ、防災行政無線、自治体等のホームページなどの公共の情報を確認する。
- ・やむを得ず、徒歩で帰宅する場合は、災害時帰宅支援ステーションなどで休憩や情報収集しながら、カバンなどで頭を守り、なるべく広い道路を移動するとともに、電信柱や門柱、ブロック塀、看板、自動販売機などの倒壊・落下の可能性のあるもの、地面の亀裂、浮き上がり又は陥没したマンホール、切れている電線など危険な場所、物から離れて移動する。

📍被害軽減のための事前対策

- ・平時から、自宅と職場間の徒歩帰宅ルート及びルート沿いの避難施設を確認しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 46 車で移動中、信号が消えた交差点で交通事故に遭遇

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	その他被害
------	------	-------	------	----	-------

- ・車で一般道を移動中、携帯電話から緊急速報メールのアラートが鳴り響いた。
- ・突然の事態に動揺しつつも、減速しながら路肩に停車した瞬間、車内が激しく揺れた。
- ・揺れが収まった後、しばらくして運転を再開すると、信号機が停電している交差点で車同士の事故が発生していた。
- ・負傷者がいる模様で、周囲の人が救護活動をしている。
- ・交通事故の影響で周囲の道路では渋滞も発生していた。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。 夜：停電の場合は暗闇のため、見通しが悪くなることから交通事故等のリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 交通事故のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・救護や応急手当が可能な場合は、手伝いを申し出る。
- ・急ブレーキを避け、安全に道路の左側に停止させる。停止後は、カーラジオ等により地震情報や交通情報を確認する。
- ・引き続き車を運転する場合は、道路の損壊、信号機の作動停止、道路上の障害物などに十分注意する。
- ・土砂や津波の二次災害の恐れがある場合は車を置いて避難し、できる限り道路外の場所に移動しておき、やむを得ず道路上に置いて避難するときは、道路の左側に寄せて駐車し、エンジンを止め、キーは付けたまま、ドアはロックせずに車を離れる。
- ・自宅等への動線となる道路の安全や利用できる公共交通機関などが確認できるまでは、むやみに帰宅や移動することは控え、帰宅困難者を受け入れている一時滞在施設などに留まり、家族等の安否確認や、テレビ、ラジオ、防災行政無線、自治体等のホームページなどの公共の情報を確認する。
- ・やむを得ず、徒歩で帰宅する場合は、災害時帰宅支援ステーションなどで休憩や情報収集しながら、カバンなどで頭を守り、なるべく広い道路を移動するとともに、電信柱や門柱、ブロック塀、看板、自動販売機などの倒壊・落下の可能性のあるもの、地面の亀裂、浮き上がり又は陥没したマンホール、切れている電線など危険な場所、物から離れて移動する。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・平時から、自宅と職場間の徒歩帰宅ルート及びルート沿いの避難施設を確認しておく。
- ・避難誘導看板やピクトグラムなどの意味を理解しておく。
- ・自治体や道路管理者の防災情報を確認する方法を習得しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。
- ・緊急交通路に指定された場合、通航制限が生じるため、平時から、自宅と職場間の道路が緊急交通路想定路線に指定されているかをホームページなどで事前に確認しておく。

場面 47 車で移動中、SNS で出回る真偽がわからない情報に戸惑う

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	その他被害
------	------	-------	------	----	-------

- ・車で帰宅するため、一般道を移動中、携帯電話から緊急速報メールのアラートが鳴り響いた。
- ・突然の事態に動揺しつつも、減速しながら路肩に停車した瞬間、車内が激しく揺れた。
- ・揺れが収まった後、しばらく車内で待機しながら、携帯電話で情報収集していると、SNS 上にこの先の道路で土砂崩れが発生しているとの投稿を見つけた。
- ・他に土砂崩れの投稿はなく、土砂崩れの箇所を迂回するためには、沿岸部を通行する必要があるが、津波の心配がある。
- ・どのように帰宅するか判断に迷う。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。 夜：停電の場合は暗闇のため、見通しが悪くなることから交通事故等のリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 帰宅に時間がかかる可能性がある。

📍取るべき行動

- ・急ブレーキを避け、安全に道路の左側に停止させる。停止後は、カーラジオ等により地震情報や交通情報を確認する。
- ・引き続き車を運転する場合は、道路の損壊、信号機の作動停止、道路上の障害物などに十分注意する。
- ・土砂や津波の二次災害の恐れがある場合は車を置いて避難し、できる限り道路外の場所に移動しておき、やむを得ず道路上に置いて避難するときは、道路の左側に寄せて駐車し、エンジンを止め、キーは付けたまま、ドアはロックせずに車を離れる。
- ・自宅等への動線となる道路の安全や利用できる公共交通機関などが確認できるまでは、むやみに帰宅や移動することは控え、帰宅困難者を受け入れている一時滞在施設などに留まり、家族等の安否確認や、テレビ、ラジオ、防災行政無線、自治体等のホームページなどの公共の情報を確認する。
- ・やむを得ず、徒歩で帰宅する場合は、災害時帰宅支援ステーションなどで休憩や情報収集しながら、カバンなどで頭を守り、なるべく広い道路を移動するとともに、電信柱や門柱、ブロック塀、看板、自動販売機などの倒壊・落下の可能性のあるもの、地面の亀裂、浮き上がり又は陥没したマンホール、切れている電線など危険な場所、物から離れて移動する。

📍被害軽減のための事前対策

- ・平時から、自宅と職場間の徒歩帰宅ルート及びルート沿いの避難施設を確認しておく。
- ・避難誘導看板やピクトグラムなどの意味を理解しておく。
- ・自治体や道路管理者の防災情報を確認する方法を習得しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。
- ・緊急交通路に指定された場合、通航制限が生じるため、平時から、自宅と職場間の道路が緊急交通路想定路線に指定されているかをホームページなどで事前に確認しておく。

場面 48 車で移動中、通信障害によりナビが使用不可能に

主体区分	一般県民	場所の特徴	一般地域	被害	その他被害
------	------	-------	------	----	-------

- ・ 遠方から車で帰宅するため、一般道を移動中、携帯電話から緊急速報メールのアラートが鳴り響いた。
- ・ 突然の事態に動揺しつつも、減速しながら路肩に停車した瞬間、車内が激しく揺れた。
- ・ 揺れが収まった後、周囲を確認すると、道路上に一部飛散物が散乱しているものの、通行自体は問題ないように見えた。
- ・ 自宅へのルートを再検索するため、ナビとして使用していた携帯電話でルートを再検索するが、インターネットに繋がらないため、地図を表示することができない。
- ・ 土地勘がない場所であり、帰宅ルートが分からないため、途方に暮れる。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。 夜：停電の場合は暗闇のため、見通しが悪くなることから交通事故等のリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 帰宅に時間がかかる可能性がある。

☞取るべき行動

- ・ 急ブレーキを避け、安全に道路の左側に停止させる。停止後は、カーラジオ等により地震情報や交通情報を確認する。
- ・ 引き続き車を運転する場合は、道路の損壊、信号機の作動停止、道路上の障害物などに十分注意する。
- ・ 土砂や津波の二次災害の恐れがある場合は車を置いて避難し、できる限り道路外の場所に移動しておき、やむを得ず道路上に置いて避難するときは、道路の左側に寄せて駐車し、エンジンを止め、キーは付けたまま、ドアはロックせずに車を離れる。
- ・ 自宅等への動線となる道路の安全や利用できる公共交通機関などが確認できるまでは、むやみに帰宅や移動することは控え、帰宅困難者を受け入れている一時滞在施設などに留まり、家族等の安否確認や、テレビ、ラジオ、防災行政無線、自治体等のホームページなどの公共の情報を確認する。
- ・ やむを得ず、徒歩で帰宅する場合は、災害時帰宅支援ステーションなどで休憩や情報収集しながら、カバンなどで頭を守り、なるべく広い道路を移動するとともに、電信柱や門柱、ブロック塀、看板、自動販売機などの倒壊・落下の可能性のあるもの、地面の亀裂、浮き上がり又は陥没したマンホール、切れている電線など危険な場所、物から離れて移動する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ 避難誘導看板やピクトグラムなどの意味を理解しておく。
- ・ 自治体や道路管理者の防災情報を確認する方法を習得しておく。
- ・ 万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・ 外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 49 車で移動中に津波が迫る

主体区分	一般県民	場所の特徴	津波浸水危険地域	被害	津波
------	------	-------	----------	----	----

- ・車で一般道を移動中、携帯電話から緊急速報メールのアラートが鳴り響いた。
- ・突然の事態に動揺しつつも、減速しながら路肩に停車した。
- ・停車した瞬間、車内が激しく揺れた。
- ・身を守りながら周囲を見ると、交通標識が左右に激しく揺れ、信号機が今にも落ちそうなくらい揺れているのが見えた。
- ・揺れが収まった後、周囲を確認すると、一部の家や電柱が大きく傾き、信号機は停電をしていた。
- ・しばらく様子を見てみると、携帯電話から緊急速報メールのアラートが鳴り響き、津波警報の発表による避難を呼びかけていた。
- ・海が近いと思うが、土地勘がないため、携帯電話から調べるもインターネットに繋がりにくい。
- ・津波の到達が気になる中、焦りが募る。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が被害にあうリスクが高い。 夜：迅速な避難行動が困難となる可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

📍取るべき行動

- ・周囲に助けを求めながら、避難誘導看板なども頼りに、近くの高台や津波避難タワー、津波避難ビル、高層ビル等の高い建物に避難を行う。
- ・車を離れる際は、ドアをロックせず、キーをつけたまま離れる。

📍被害軽減のための事前対策

- ・ピクトグラムや津波の標識などの意味を確認しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 50 列車で移動中に津波が迫る

主体区分	一般県民	場所の特徴	津波浸水危険地域	被害	津波
------	------	-------	----------	----	----

- ・列車で通勤中、車内に緊急地震速報のアラートが鳴り響いた瞬間、列車が急停止した。
- ・急停止に伴い、満員状態の車内では身動きが取れず、押しつぶされそうになっている乗客の悲鳴が上がっている。
- ・停止して間もなく、車内が大きく揺れ、再び車内に悲鳴が響いた。
- ・吊革につかまり、なんとか体制を維持していると、車内が急に薄暗くなり、一部の照明のみが点灯していた。
- ・揺れの後、しばらくすると、携帯電話から緊急速報メールのアラートが鳴り響き、津波警報の発表による避難を呼びかけていた。
- ・すぐに車内放送があり、高台へ避難するようにアナウンスがあった。
- ・車内は大混乱しており、ドアが解放されると、乗客がなだれ込むように、次々と線路に降りていった。
- ・高台を目指して走っているが、津波が迫る中、焦りが募る。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人被害にあうリスクが高い。 夜：迅速な避難行動が困難となる可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

📍取るべき行動

- ・乗務員の誘導に従い列車を脱出し、乗務員が避難場所を把握している場合は案内に従う。
- ・地理に詳しい者がいる場合は、助言を得ながら避難誘導看板なども頼りに、近くの高台や津波避難タワー、津波避難ビル、高層ビル等の高い建物に避難を行う。

📍被害軽減のための事前対策

- ・ピクトグラムや津波の標識などの意味を確認しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 51 津波が迫る中、車で避難中に踏切封鎖に遭遇

主体区分	一般県民	場所の特徴	津波浸水危険地域	被害	その他被害
------	------	-------	----------	----	-------

- ・車で一般道を移動中、携帯電話から緊急速報メールのアラートが鳴り響いた。
- ・突然の事態に動揺しつつも、減速しながら路肩に停車した。
- ・しばらく様子を見てみると、携帯電話から緊急速報メールのアラートが鳴り響き、津波警報の発表による避難を呼びかけていた。
- ・土地勘がないため、前方に見えている高台へ向かうしかない。
- ・高台へは歩くとかなり時間がかかりそうであるため、車で避難することを決意した。
- ・運転を開始してしばらくすると、高台手前の踏切に差し掛かった。
- ・踏切は遮断機が下りていたことから、しばらく待っていたが、列車は通過せず、遮断機も上がらない。
- ・普段、このような状況に遭遇したことがない。
- ・踏切を通過できないと、迂回して高台に向かう必要があるが、迂回路が分からない。
- ・津波の到達が気になる中、焦りが募る。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が被害にあうリスクが高い。 夜：迅速な避難行動が困難となる可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

📍取るべき行動

- ・標識や目視で、すぐに近くに逃げ込める高い建物や場所があれば、車を置いて躊躇せず避難する。
- ・避難場所が踏切の先にしかなく、津波が迫っている場合は、踏切の警報器付近にある非常ボタンを押し、列車の通行を十分確認の上、踏切を通過することも検討する。
- ・車を離れる際は、ドアをロックせず、キーをつけたまま離れる。

📍被害軽減のための事前対策

- ・ピクトグラムや津波の標識などの意味を確認しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 52 津波が迫る中、車で避難中に渋滞に遭遇

主体区分	一般県民	場所の特徴	津波浸水危険地域	被害	その他被害
------	------	-------	----------	----	-------

- ・車で一般道を移動中、携帯電話から緊急速報メールのアラートが鳴り響いた。
- ・突然の事態に動揺しつつも、減速しながら路肩に停車した。
- ・停車した瞬間、車内が激しく揺れた。
- ・身を守りながら周囲を見ると、交通標識が左右に激しく揺れ、信号機が今にも落ちそうなくらい揺れているのが見えた。
- ・揺れが収まった後、周囲を確認すると、一部の家や電柱が大きく傾き、信号機は停電していた。
- ・しばらく様子を見てみると、携帯電話から緊急速報メールのアラートが鳴り響き、津波警報発表による避難を呼びかけていた。
- ・前方に見える高台を目指し、車で移動していると、渋滞にはまってしまい、後続車も多く、転回もできない。
- ・津波の到達が気になる中、焦りが募る。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が被害にあうリスクが高い。 夜：迅速な避難行動が困難となる可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

📍取るべき行動

- ・直ちに車を置いて、徒歩で避難する。
- ・標識や目視で、すぐに近くに逃げ込める高い建物や場所があれば、避難施設の指定の有無に関わらず、高さのある建物に避難する。
- ・車を離れる際は、ドアをロックせず、キーをつけたまま離れる。

📍被害軽減のための事前対策

- ・ピクトグラムや津波の標識などの意味を確認しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 53 線路上で発生した土砂災害により、緊急停止した列車に閉じ込め

主体区分	一般県民	場所の特徴	土砂災害危険地域	被害	土砂
------	------	-------	----------	----	----

- ・列車で帰宅中、車内に緊急地震速報のアラートが鳴り響いた瞬間、列車が急停止した。
- ・急停止に伴い、満員状態の車内では身動きが取れず、押しつぶされそうになっている乗客の悲鳴が上がっている。
- ・停止して間もなく、車内が大きく揺れ、再び車内に悲鳴が響いた。
- ・吊革につかまり、なんとか体制を維持していると、車内が急に薄暗くなり、一部の照明のみが点灯していた。
- ・揺れの後、車内放送があり、地震により列車は全線でストップし、復旧の見込みは不明とのアナウンスがあった。
- ・車内は停電しており、空調がストップしているため、熱気が充満している。
- ・列車の再開を待っていると、突然、車外から轟音が鳴り響き、車内が揺れた。
- ・しばらくすると、車内放送により先頭車両付近でがけ崩れが発生し、運転再開ができないとのアナウンスがあった。

■考慮事項

時刻	夜：土砂災害の兆候に気付きにくい可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 土砂災害のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・崖地や急傾斜地に停車し、土砂崩れの前兆が確認された場合や、さらに拡大が懸念される場合は、乗務員の誘導に従い、直ちに脱出し、安全と思われる場所まで冷静に移動する。
- ・移動をする場合は、カバンなどで頭を守り、なるべく広い道路を移動するとともに、電信柱や門柱、ブロック塀、看板、自動販売機などの倒壊・落下の可能性のあるもの、地面の亀裂、浮き上がり又は陥没したマンホール、切れている電線など危険な場所、物から離れて移動する。

📌被害軽減のための事前対策

- ・土砂災害警戒区域等を事前に確認しておくとともに、がけ崩れや地すべり、土石流などの土砂災害の前兆を確認しておく。
 - がけ崩れ：ひび割れ、小石が落ちてくる、水が湧き出る、湧き水が止まる・濁る、地鳴りが聞こえる等
 - 地すべり：ひび割れ・陥没、亀裂や段差の発生、水が噴き出す、井戸や沢の水が濁る、地鳴り・山鳴りがする、樹木が傾く等
 - 土石流：山鳴りがする、急に川の水が濁る、腐った土の臭いがする、降雨が続くのに川の水位が下がる、立木が裂ける音や石がぶつかり合う音が聞こえる等
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 54 車で移動中、トンネル内で土砂災害が発生し、立ち往生

主体区分	一般県民	場所の特徴	土砂災害危険地域	被害	土砂
------	------	-------	----------	----	----

- ・車で一般道を移動中、携帯電話から緊急速報メールのアラートが鳴り響いた。
- ・突然の事態に動揺しつつも、減速しながら路肩に停車した。
- ・停車した瞬間、車内が激しく揺れた。
- ・身を守りながら周囲を見ると、一部の照明が消えるのが見えた。
- ・揺れが収まった後、トンネル内は薄暗くなっていた。
- ・突然、車外から轟音が鳴り響き、車内が揺れた。
- ・しばらくすると、一部の車が徐行しながら、飛散物を避け、運転を再開するのが見えた。
- ・他の車と同じように運転を再開すると、前方で立ち往生が発生していた。
- ・前方をよく見ると、トンネルの出口が土砂でふさがれている。
- ・引き返そうとしたが、既に後続車もいたため、引き返すことができない。

■考慮事項

時刻	夜：土砂災害の兆候に気付きにくい可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 土砂災害のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📍取るべき行動

- ・土砂崩れの拡大が懸念される場合は、車を置いて、直ちに逆の出口や非常口から徒歩で安全な場所に避難する。
- ・車を離れる際は、ドアをロックせず、キーをつけたまま離れる。
- ・非常電話があれば、道路管理者に状況を説明する。
- ・移動をする場合は、カバンなどで頭を守り、なるべく広い道路を移動するとともに、電信柱や門柱、ブロック塀、看板、自動販売機などの倒壊・落下の可能性のあるもの、地面の亀裂、浮き上がり又は陥没したマンホール、切れている電線など危険な場所、物から離れて移動する。

📍被害軽減のための事前対策

- ・土砂災害警戒区域等を事前に確認しておくとともに、がけ崩れや地すべり、土石流などの土砂災害の前兆を確認しておく。
 - がけ崩れ：ひび割れ、小石が落ちてくる、水が湧き出る、湧き水が止まる・濁る、地鳴りが聞こえる等
 - 地すべり：ひび割れ・陥没、亀裂や段差の発生、水が噴き出す、井戸や沢の水が濁る、地鳴り・山鳴りがする、樹木が傾く等
 - 土石流：山鳴りがする、急に川の水が濁る、腐った土の臭いがする、降雨が続くのに川の水位が下がる、立木が裂ける音や石がぶつかり合う音が聞こえる等
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 55 車で移動中、土砂災害に遭遇

主体区分	一般県民	場所の特徴	土砂災害危険地域	被害	土砂
------	------	-------	----------	----	----

- ・車で一般道を移動中、携帯電話から緊急速報メールのアラートが鳴り響いた。
- ・突然の事態に動揺しつつも、減速しながら路肩に停車した。
- ・停車した瞬間、車内が激しく揺れた。
- ・身を守りながら周囲を見ると、交通標識が左右に激しく揺れ、信号機が今にも落ちそうなくらい揺れているのが見えた。
- ・揺れの後、しばらく様子を見てみると、突然、車外から轟音が鳴り響き、車内が揺れた。
- ・気づくと、目の前の道が土砂でふさがれていた。

■考慮事項

時刻	夜：土砂災害の兆候に気付きにくい可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 土砂災害のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・土砂崩れの拡大が懸念される場合では、直ちにその場から離れる。
- ・車が転回できない場合は、車を置いて、徒歩で安全な場所まで避難する。
- ・土砂災害警戒区域やがけ地、急傾斜地などにいる場合は、落石や滑落などに注意しながら、区域外や斜面から離れた近くの平地まで移動し、安全の確認が取れるまで待機する。
- ・移動をする場合は、カバンなどで頭を守り、なるべく広い道路を移動するとともに、電信柱や門柱、ブロック塀、看板、自動販売機などの倒壊・落下の可能性のあるもの、地面の亀裂、浮き上がり又は陥没したマンホール、切れている電線など危険な場所、物から離れて移動する。
- ・車を離れる際は、ドアをロックせず、キーをつけたまま離れる。

☞被害軽減のための事前対策

- ・土砂災害警戒区域等を事前に確認しておくとともに、がけ崩れや地すべり、土石流などの土砂災害の前兆を確認しておく。
 - がけ崩れ：ひび割れ、小石が落ちてくる、水が湧き出る、湧き水が止まる・濁る、地鳴りが聞こえる等
 - 地すべり：ひび割れ・陥没、亀裂や段差の発生、水が噴き出す、井戸や沢の水が濁る、地鳴り・山鳴りがする、樹木が傾く等
 - 土石流：山鳴りがする、急に川の水が濁る、腐った土の臭いがする、降雨が続くのに川の水位が下がる、立木が裂ける音や石がぶつかり合う音が聞こえる等
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 56 ライフラインが停止している中、在宅避難を継続

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	ライフライン停止
------	------	-------	---	----	----------

- ・地震の後、断水と停電が発生した。避難所も同様に満杯の様子であり、自宅に大きな被害がなかったことから、在宅避難を決意した。
- ・電気、上下水道、ガス、通信全てのライフラインが停止しており、避難生活を送れるか不安である。
- ・食料や水は、冷蔵庫の食材と備蓄食料を合わせると 5 日程度は持ちそうである。
- ・ライフラインが停止し、携帯電話も通じない中、トイレや調理器具が使用できないため、ライフライン停止時のトイレや調理に関する対応方法を調べたいが、インターネットに繋がらない。

■考慮事項

時刻	夜：停電による暗闇のため、行動が制限される可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・近所や知り合い、行政などにあらゆる手段で連絡を試み、支援を求める。
- ・避難所は避難所以外で避難生活を送る被災者も支援する拠点であるため、避難生活に必要な物資や情報の提供を求める。
- ・余震により、基礎に亀裂が入るなどの危険を察した場合は、立ち退き避難を検討する。また、二次災害防止のため建物の立入の可否を判定する、応急危険度判定の結果の注記も参考とする。
- ・親戚や知人宅等への縁故避難なども検討する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ライフラインの停止を想定し、最低 3 日分(推奨 7 日分)の飲料水(1 人 1 日 3 リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資のなどの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・自治会や自主防災組織において、自治体と連携した被災者の安否確認や支援ニーズを把握し、支援に繋げる体制を検討、整備しておく。

場面 57 ライフラインが停止している高層マンション

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	ライフライン停止
------	------	-------	---	----	----------

- ・地震の後、幸い自宅に大きな被害はなかった。電気、上下水道、ガス、通信全てのライフラインが停止しており、エレベーターも動いていない。移動も困難なため、在宅避難を決意した。
- ・食料や水は、冷蔵庫の食材と備蓄食料を合わせると5日程度は持ちそうである。
- ・ライフラインが停止し、携帯電話も通じない中、3日間過ごしたが、携帯トイレの備蓄が持たなくなってきたことに加え、親の持病の薬も1日分しかない。
- ・防災センターを通じて、この状況は外部に伝わっているはずだが、支援の動きはない。

■考慮事項

時刻	夜：停電による暗闇のため、行動が制限される可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・物資の不足が見込まれる場合は、自主防災組織で話し合い、非常階段で移動が可能な者が避難所まで物資を取りに行く。また、要配慮者の情報を伝え、支援につなげる。
- ・在宅避難の環境が厳しい場合は、消防や自治体に、救出と避難支援を要請する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ライフラインの停止を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める
- ・マンションの備蓄や設備を確認しておく。
- ・自治会や自主防災組織において、避難生活を支え合う体制を整備し、共有しておく。

場面 58 道路寸断により、地域が孤立状態

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	通信障害・孤立
------	------	-------	---	----	---------

- ・地震の後、自宅に大きな被害がなかったが、自宅から市街地へと続く唯一の道路が土砂崩れでふさがれており、この一帯は孤立状態と分かった。
- ・断水と停電が続いているが、自宅が無事なので在宅避難を決意した。
- ・携帯電話やインターネットも通じない中、自宅で3日間過ごしたが、自宅にある水や食料、携帯トイレが尽きそうだ。
- ・近くの避難所でも物資が不足し始め、健康を害する者も出てきているようだ。救助を求めたいが、携帯電話が繋がらないことから、どのように助けを求めているのか分からない。

■考慮事項

時刻	夜：停電による暗闇のため、行動が制限される可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・地域住民で話し合い、あらゆる手段で外部との接触を試みる。
- ・ヘリの臨時離発着場所が決まっていれば、障害物の除去など、環境整備に努める。
- ・近所や知り合い、自治体などあらゆる手段で連絡を試み、支援を求める。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ライフラインの停止を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・自治会や自主防災組織において、地域として水、食料、医薬品や資機材の備蓄などを行う。自治体と連携して、衛星携帯電話や充電器、ヘリの臨時離発着場所などを確保しておく。

場面 59 家族の安否確認が長期化

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	通信障害・孤立
------	------	-------	---	----	---------

- ・地震の後、沿岸部に勤めている家族に連絡しようと試みたが、携帯電話が繋がらない。
- ・テレビでは、津波がその地域を襲っていると報道されている。
- ・その後も時間をおいて、一晩中、連絡をしたが、繋がらない。
- ・翌日、長時間歩いて家族の職場に向かったが、津波によりすべてが流されていた。
- ・職場周辺の避難所を回ったが、家族には出会えなかった。
- ・自宅に向かっていると期待して、その後も自宅で待っていたが、3 日経っても出会うことができなかった。
- ・家族の安否が不明の中、不安が募る。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・自治体に家族の安否不明を伝え、氏名の公表に協力する。

📌被害軽減のための事前対策

- ・災害時の連絡手段や避難場所、集合場所を決めて共有しておく。
- ・自宅だけでなく、職場の周辺の災害の危険度、避難環境も確認しておく。

場面 60 通信障害により支援情報の入手ができない

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	通信障害・孤立
------	------	-------	---	----	---------

- ・地震の後、自宅に大きな被害がなかったことから、在宅避難を決意した。
- ・ライフラインが停止し、携帯電話も通じない中、自宅で3日間過ごした。
- ・そろそろ自宅にある水や食料が尽きそうだ。
- ・風呂にも入れていない。
- ・食料や水が尽きた場合、どこで食料が貰えるのか、入浴サービスは開始されているかなどを調べたいが、インターネットに繋がらないため、支援情報を検索することができない。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📍取るべき行動

- ・近所や知り合い、行政などにあらゆる手段で連絡を試み、支援を求める。
- ・避難所は避難所以外で避難生活を送る被災者も支援する拠点であるため、避難生活に必要な物資や情報の提供を求める。

📍被害軽減のための事前対策

- ・ライフラインの停止を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・自治会や自主防災組織において、自治体と連携した被災者の安否確認や支援ニーズを把握し、支援に繋げる体制を検討、整備しておく。

場面 61 生活環境悪化により体調不良に

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	医療・衛生
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅に大きな被害がなかったことから、在宅避難を決意した。
- ・断水が続いており、水や食料の備蓄もあまりない。十分な栄養や水が摂取できない中、なんとか3日間過ごした。
- ・体全体がむくんできたような気がする。
- ・常に息苦しく、体調が良くない。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・近所や知り合い、行政などにあらゆる手段で連絡を試み、支援を求める。
- ・避難所は避難所以外で避難生活を送る被災者も支援する拠点であるため、避難生活に必要な物資や情報の提供を求める。
- ・避難所等に相談し、保健や福祉、医療等の支援を要請する。
- ・親戚や知人宅等への縁故避難なども検討する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・ライフラインの停止を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・自治会や自主防災組織において、地域住民の安否確認と支援に繋げる仕組みや体制を整えておく。

場面 62 インフルエンザ療養中のため避難に迷う

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	医療・衛生
------	------	-------	---	----	-------

- ・医療機関でインフルエンザと診断され、自宅療養を始めた直後に地震が発生した。
- ・熱も高く、移動が困難のため在宅で過ごしていたが、大きな余震が続き、古い自宅が大丈夫か不安になってくる。
- ・避難所に避難したいが、高熱が続いており、他の方への感染も気になる。
- ・どう対応してよいか分からない。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・携帯電話等による連絡が可能であれば、医療機関や自治体に連絡し、対応を相談する。
- ・自宅倒壊のリスク回避を最優先に、マスクなど可能な感染拡大防止を図り、躊躇せず避難所に避難し、受付で状況を説明する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。

場面 63 避難所が満杯で在宅避難を継続

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所・施設
------	------	-------	---	----	--------

- ・地震の後、自宅に大きな被害がなかったが、古い住宅であるため、万が一の倒壊を考え、避難所に向かった。
- ・避難所に到着すると既に避難者が押し寄せており、満杯状態となっていた。
- ・とても就寝場所を確保できる状況ではなかったため、在宅避難をするしかない。
- ・度重なる余震で、自宅が倒壊しないか、不安が募る。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・入所可能な避難所の情報を自治体のホームページなどで確認する。または、避難所で情報提供を依頼する。
- ・近所や知り合い、行政などにあらゆる手段で連絡を試み、支援を求める。
- ・倒壊の危険がある自宅は避け、親戚や知人宅などへの避難や、他に手段がない場合は、車中泊避難、自治体と相談し、広域避難などを検討する。
- ・避難所以外に避難する場合、自治体が避難者の登録システムなどを整備している場合は避難先を登録する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。

場面 64 保育園の再開見通しが立たず、仕事が再開できない

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所・施設
------	------	-------	---	----	--------

- ・地震の後、自宅に大きな被害がなかったことから、在宅避難を決意した。
- ・在宅避難から4日目、ようやく停止していたライフラインと携帯電話が復旧した。
- ・被災した会社からは、来週から業務立て直しに向けて、出勤してほしいと連絡があった。
- ・出勤はしたいが、保育園の再開の目途が立たないことから、子供を預けることができない限り、出勤はまだ厳しい。

■考慮事項

時刻	-
季節	-
天候	-

🏠取るべき行動

- ・近所や知り合い、自治体や勤め先などと子供の保育支援等について相談する。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・災害時でも子供を預けられる可能性がある施設や親戚、知人宅などを想定し、可能であれば話し合っておく。

場面 65 避難所が被災し、在宅避難を継続

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所・施設
------	------	-------	---	----	--------

- ・地震の後、自宅に大きな被害がなかったが、古い住宅であるため、万が一の倒壊を考え、避難所に向かった。
- ・避難所に到着すると、避難所の体育館の屋根が崩落しており、とても避難所として使用できる状況ではなかった。
- ・周囲の避難者も途方に暮れており、この状況では、在宅避難をするしかないが、度重なる余震で、自宅が倒壊しないか、不安が募る。

■考慮事項

時刻	-
季節	-
天候	雪：積雪による家屋倒壊のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・入所可能な避難所の情報を自治体のホームページなどで確認する。または、避難所で情報提供を依頼する。
- ・近所や知り合い、行政などにあらゆる手段で連絡を試み、支援を求める。
- ・倒壊の危険がある自宅は避け、親戚や知人宅などへの避難や、他に手段がない場合は、車中泊避難、自治体と相談し、広域避難などを検討する。
- ・避難所以外に避難する場合、自治体が避難者の登録システムなどを整備している場合は避難先を登録する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

📌被害軽減のための事前対策

- ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。

場面 66 避難所でペットの受入れができず、在宅避難を継続

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅に大きな被害がなかったが、古い住宅であるため、万が一の倒壊を考え、ペットを連れて避難所に向かった。
- ・避難所に到着すると、避難所に空きスペースはあったが、ペットの受入れはできないと言われてしまった。
- ・ペットと離れ離れに避難することは難しいため、在宅避難を決意した。
- ・度重なる余震で、自宅が倒壊しないか、不安が募る。

■考慮事項

時刻	-
季節	-
天候	雪：積雪による家屋倒壊のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・ペットの同行避難や同伴避難が可能な避難所やペットを預けられる施設の情報を自治体のホームページなどで確認する。または、避難所で情報提供を依頼する。
- ・倒壊の危険がある自宅は避け、親戚や知人宅などへの避難や、他に手段がない場合は、車中泊避難、自治体と相談し、広域避難などを検討する。
- ・避難所以外に避難する場合で、自治体が避難者の登録システムなどを整備している場合は避難先を登録する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

📌被害軽減のための事前対策

- ・ペットの同行避難や同伴避難に関する自治体の対策を調べておく。
- ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・ケージやフードなどのペット用品を用意しておく。

場面 67 燃料不足により、車での移動が不可能に

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅に大きな被害がなかったが、古い住宅であるため、万が一の倒壊を考え、避難所に向かうことを決意した。
- ・避難所は自宅からかなり離れており、歩行が困難な高齢者もいるので、車で向かう必要がある。
- ・車のエンジンをかけると、しばらく車を使用しておらず、ガソリンの給油を忘れていたため、エンブレッドランプが点灯していた。
- ・ガソリンスタンドも近くにないため、在宅避難をするしかない。
- ・度重なる余震で、自宅が倒壊しないか、不安が募る。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・近所や知り合いなどに、給油や避難所への移送の支援の協力を依頼する。
- ・避難所への避難が困難な場合でも、倒壊の危険がある自宅は避け、給油や移送手段の確保も含め、親戚や知人宅などへの避難や、他に手段がない場合は、車中泊避難、自治体と相談し、広域避難などを検討する。
- ・避難所以外に避難する場合で、自治体が避難者の登録システムなどを整備している場合は避難先を登録する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

📌被害軽減のための事前対策

- ・避難所や給油場所のある市街地まで距離がある場合は、ガソリンは常に一定量以下にならないようにしておく。
 - ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資のなどの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。

場面 68 トイレが使用できず困惑

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅に大きな被害がなかったことから、在宅避難を決意した。
- ・断水でトイレが使用できず、携帯トイレの備蓄も少ないことから、トイレの使用回数を減らすため、水や食料の摂取をなるべく控えながら、3日間過ごした。
- ・体全体がむくんできたような気がする。
- ・常に息苦しく、体調が良くない。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・近くの避難所のトイレが使用可能であれば利用する。
- ・避難所は避難所以外で避難生活を送る被災者も支援する拠点であるため、携帯トイレの支援を要請する。
- ・避難所等に相談し、保健や福祉、医療等の支援を要請する。
- ・被災地外の親戚や知人宅等への縁故避難なども検討する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・災害時の在宅避難を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資のなどの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・自治会や自主防災組織において、地域住民のニーズの確認と支援に繋げる仕組みや体制を整えておく。

場面 69 不在時の防犯が心配

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅に大きな被害がなかったことから、在宅避難を決意した。
- ・在宅避難から4日目、ようやく停止していたライフラインと携帯電話が復旧した。
- ・被災した会社からは、来週から業務立て直しに向けて、出勤してほしいと連絡があった。
- ・近所では、最近空き巣の被害が発生しており、公的機関を装った被害や性被害の噂も出ている。地域住民ではない人もよく見かける。
- ・仕事中は、妻と娘だけになる時間帯があるため、防犯が気がかりである。

■考慮事項

時刻	-
季節	-
天候	-

📌取るべき行動

- ・地域の防犯に係わる情報収集に努める。
- ・施錠やカーテンなどで外部から室内の様子が分からないようにする。故障や破損した窓や開口部があればできる限り補修に努める。
- ・防犯ベル等の携行、見知らぬ者の来訪時の身分確認、単独の行動は避けるなど、防犯対策を講じる。

📌被害軽減のための事前対策

- ・自治会や自主防災組織において、自治体と連携した防犯パトロールなどの仕組みを検討しておく。

場面 70 飲食料が不足

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅に大きな被害がなかったことから、在宅避難を決意した。
- ・ライフラインが停止し、携帯電話も通じない中、自宅で3日間過ごした。
- ・そろそろ自宅にある水や食料が尽きそうだ。
- ・近くのスーパーやコンビニを巡ったが、物流が止まっていることから商品はない。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・避難所は避難所以外で避難生活を送る被災者も支援する拠点であるため、避難生活に必要な物資や情報の提供を求める。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・ライフラインの停止を想定し、最低3日分の水、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライトなどの備蓄をしておく。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

場面 71 度重なる余震で自宅の被害が心配

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	その他
------	------	-------	---	----	-----

- ・地震の後、自宅に大きな被害がなかったことから、在宅避難を決意した。
- ・在宅避難から4日目、余震の影響か、自宅の壁に亀裂を発見した。
- ・余震の度に部屋には不気味なきしみ音が響き、若干、自宅も傾いている気もする。
- ・余震は数時間おきに発生しており、今後のことを考えると心配である。

■考慮事項

時刻	-
季節	-
天候	雪：積雪による家屋倒壊のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・倒壊の危険がある自宅は避け、避難所に避難する。
- ・避難所への避難が難しい場合は、親戚や知人宅などへの避難や、他に手段がない場合は、車中泊避難、自治体と相談し、広域避難などを検討する。
- ・避難所以外に避難する場合、自治体が避難者の登録システムなどを整備している場合は避難先を登録する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資のなどの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。

場面 72 ボランティア不足により、自宅の片付けが進まない

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	その他
------	------	-------	---	----	-----

- ・地震の後、自宅を確認すると、1階は津波の浸水により、瓦礫と泥に覆われていた。
- ・2階の被害は少なく、家自体も倒壊は免れたため、2階での在宅避難を決意した。
- ・翌日から自宅の片付けを始めたが、瓦礫は重く、人手がないと片付けが進まない。
- ・在宅避難から7日目、連日の片付けにより、疲労がたまり、動けなくなってしまった。
- ・他の地域には、ボランティアが入っているようであるが、被害が広範囲であるため、ボランティアの数が不足している。
- ・ボランティアの手伝いがないと、片付けが進まない。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・ボランティアについては、自治体の被災者支援の窓口やボランティア支援センターに依頼する。
- ・自宅が被災した場合や自宅に大きな障害物があるような場合は、被害認定調査を自治体に依頼する。また、泥や瓦礫の除去について、災害救助法の適用の可能性もあるため自治体に相談する。

📌被害軽減のための事前対策

- ・災害救助法に基づく支援制度や被災者生活再建支援制度、災害時の廃棄物処理事業など、公的な支援制度の基本的な事項を学んでおく。

場面 73 液状化により自宅が傾き生活に支障

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	その他
- 地震の後、自宅自体に大きな被害がなかったが、液状化が発生し、自宅が大きく傾いてしまった。 - 数日間、在宅避難を続けていたが、傾いた自宅での生活で平衡感覚が狂い、気分が悪くなってしまった。 - 避難所の衛生環境や不在時の防犯のことを考えると、在宅避難を続けたいが、どうしていいか分からない。					

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 積雪による家屋倒壊のリスクがある。

🏠取るべき行動

- 健康に影響がある傾いた自宅での避難は避け、避難所に避難する。何らかの理由で避難所への避難が難しい場合は、親戚や知人宅などへの避難や、他に手段がない場合は、車中泊避難、自治体と相談し、広域避難などを検討する。
- 被災者生活再建支援等の支援の可能性があるため、被害認定調査を自治体に要請する。
- 自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

🏠被害軽減のための事前対策

- 自治体が公表する地震被害想定で、液状化の可能性など、自宅の安全度を確認しておく。
- 災害救助法に基づく支援制度や被災者生活再建支援制度、災害時の廃棄物処理事業など、公的な支援制度の基本的な事項を学んでおく。

場面 74 ライフラインが停止している避難所

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	ライフライン停止
------	------	-------	---	----	----------

- ・地震の後、自宅が倒壊したことから、避難所に避難してきた。
- ・当初は、避難所の電気、上下水道、ガス、通信全てのライフラインが停止していたが、電気については、地域の人が持ってきた発電機で一部の電源を賄うことができた。
- ・避難所では近くの防災倉庫に分散備蓄していたが、被災し近づくことができないことから、避難所の食料や発電機の燃料が尽きそうである。
- ・物流が止まっているのか、行政からの応援物資の配送はまだない。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・自治体を通じて、必要な物資の緊急支援を要請する。
- ・家庭の備蓄の持ち寄り、近所や知り合いなどへの協力要請などを検討する。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・自宅の耐震性の確認と、耐震性が不足している場合は耐震補強を実施する。
 - ・家具や家電の固定、照明等の落下防止対策、ガラス等の飛散防止対策を行う。
 - ・災害時の在宅避難を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資のなどの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。

場面 75 道路寸断により、孤立状態となった避難所

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	通信障害・孤立
------	------	-------	---	----	---------

- ・地震の後、自宅が倒壊したことから、避難所に避難してきた。
- ・当初は、避難所の電気、上下水道、ガス、通信全てのライフラインが停止していたが、電気については、地域の人を持ってきた発電機で一部の電源を賄うことができた。
- ・避難所から市街地へと続く、唯一の道路が土砂崩れでふさがっていたことから、地域全体が孤立状態となっている。市街地からの物資調達ができないため、避難所の物資で過ごすしかない。
- ・避難2日目になり、物資も不足してきており、健康状態が悪化する避難者も出てきているが、電話もインターネットもつながらない状態が継続しているため、自治体の本部との連絡もできず、外部の状況も確認できない。
- ・土砂崩れが大規模であり、解消には時間がかかる見込みであるため、行政による陸上からの応援物資の配送は期待できない。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 土砂災害のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📍取るべき行動

- ・地域住民で話し合い、あらゆる手段で外部との接触を試みる。
- ・ヘリの臨時離発着場所が決まっていれば、障害物の除去など、環境整備に努める。

📍被害軽減のための事前対策

- ・孤立が予想される地域の場合は、多めの備蓄に努める。
- ・自治会や自主防災組織において、地域として水、食料、医薬品や資機材の備蓄などを行う。
自治体と連携して、衛星携帯電話や充電器、ヘリの臨時離発着場所などを確保しておく。

場面 76 避難所のトイレが使用不可になり、衛生環境が悪化

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	医療・衛生
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅が倒壊したことから、避難所に避難してきた。
- ・避難所は電気、上下水道、ガス、通信全てのライフラインが停止していたため、トイレについては、プールの水を利用して流していた。
- ・地震から4日目、多数の避難者が利用したため、一部のトイレが詰まり、使用不能となってしまった。
- ・使用不能となったため、トイレは混雑し、周囲には悪臭が漂っている。
- ・掃除用品も不足していることから、トイレの床が汚れ始めている。
- ・避難所となっている体育館は土足でトイレにも出入りしているため、不衛生な乾いた土が砂ぼこりとなって舞っており、衛生環境が悪化している。
- ・マスクなどの衛生用品も整っていないことから、体調不良にならないか、不安が募る。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・避難所スタッフや自治体の職員に避難所使用のルールや環境改善、避難者の健康管理を含む避難所運営体制の強化等について、早期に取り組むよう強く申し入れる。
- ・親戚や知人宅などへの避難や、他に手段がない場合は、車中泊避難、自治体と相談し、広域避難などを検討する。
- ・避難所以外に避難する場合、自治体が避難者の登録システムなどを整備している場合は避難先を登録する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

📌被害軽減のための事前対策

- ・自宅の耐震性の確認と、耐震性が不足している場合は耐震補強を実施する。
 - ・災害時の在宅避難を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資のなどの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。

場面 77 トイレを我慢し、体調不良に

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	医療・衛生
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅が倒壊したことから、避難所に避難してきた。
- ・避難所は電気、上下水道、ガス、通信全てのライフラインが停止し、トイレも使用不能となった。
- ・程なく仮設トイレが設置されたが、数が少なく、利用ルールも徹底されておらず、男女は別になっているものの隣接している。
- ・掃除も行き届かず、悪臭も漂っていることから、出来る限り使用したくはない。
- ・トイレの利用を控えるため、水や食料の摂取をなるべく控えながら、3日間過ごした。
- ・体全体がむくんできたような気がする。
- ・常に息苦しく、体調が良くない。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・避難所スタッフや自治体の職員に避難所使用のルールやトイレの環境改善、避難者の健康管理を含む避難所運営体制の強化等について、早期に取り組むよう強く申し入れる。
- ・自身の健康を最優先に、水分の摂取を行うとともに、防犯が気になる場合は、声を掛け合いトイレに行く。

📌被害軽減のための事前対策

- ・自宅の耐震性の確認と、耐震性が不足している場合は耐震補強を実施する。
 - ・災害時の在宅避難を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資のなどの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。

場面 78 一時滞在施設で3日目、徒歩帰宅を決心

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所・施設
------	------	-------	---	----	--------

- ・会社から帰宅するため、最寄り駅に向かって歩いている最中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・駅に到着すると、列車は全線ストップしており、運転再開の目途が立っていなかったことから、運転再開まで近くに避難することにした。
- ・自治体の案内に従い、公的施設の一時滞在施設に到着すると、毛布と水、仮眠スペースの提供があった。
- ・翌朝になると、非常食の配布があったが、運転は再開されなかった。
- ・地震から3日間経っても列車の再開見通しが立っていないことから、徒歩で避難することを考え始める。
- ・距離的には10時間以上はかかるため、無事に自宅に到着できるか、不安が募る。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 帰宅に時間がかかる可能性がある。

📍取るべき行動

- ・自治体等から道路の被災状況を確認し、安全なルートが確認できれば、災害時帰宅支援ステーションなども活用しながら、徒歩で帰宅する。
- ・自治体等から帰宅困難者の輸送等の案内がある場合は、その活用を検討する。
- ・移動をする場合は、カバンなどで頭を守り、なるべく広い道路を移動するとともに、電信柱や門柱、ブロック塀、看板、自動販売機などの倒壊・落下の可能性のあるもの、地面の亀裂、浮き上がり又は陥没したマンホール、切れている電線など危険な場所、物から離れて移動する。

📍被害軽減のための事前対策

- ・平時から、自宅と職場間の徒歩帰宅ルート及びルート沿いの避難施設を確認しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 79 避難者が殺到し、混乱している避難所

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所・施設
------	------	-------	---	----	--------

- ・地震の後、自宅が被災したことから、避難所に避難してきた。
- ・避難所の周辺地域が大きな被害を受けたことから、避難所となっている体育館は避難者でごった返しており、ゆっくり休むスペースを確保することが出来ない。
- ・受付もあるが、避難者の把握には手が回っていないようである。
- ・地震から3日目、一部の人は混雑した避難所を諦め、被災した自宅で避難を決意した人もいる。
- ・ようやく、避難者の名簿作成が始まったが、日中は自宅の片付けや仕事に行く人がおり、完全な把握はまだ先になりそうである。
- ・避難所での支援内容やルールも日々、変わっており、覚えるので精一杯である。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・可能であれば、避難所運営に積極的に関わり、避難所スタッフや自治体の職員に避難所使用のルールや環境改善、避難者の健康管理を含む避難所運営体制の強化等について、早期に取り組むよう強く申し入れる。
- ・避難所の生活を回避する場合は、親戚や知人宅などへの避難や、他に手段がない場合は、車中泊避難、自治体と相談し、広域避難などを検討する。
- ・避難所以外に避難する場合、自治体が避難者の登録システムなどを整備している場合は避難先を登録する。

📌被害軽減のための事前対策

- ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・自治会や自主防災組織において、自治体と連携し、避難所の運営マニュアルを整備し、避難者自ら、避難所の開設や運営を行える体制を整備しておく。

場面 80 避難所での避難が長期化し、今後のことが心配になる避難者

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所・施設
------	------	-------	---	----	--------

- ・地震の後、自宅が倒壊したことから、避難所に避難してきた。
- ・地震から半月経っても、行政から今後の支援について情報がほとんどない。
- ・自宅の撤去費用や応急仮設住宅への入居など、知りたいことが沢山あるが、どこで聞けばいいのかわからない。
- ・慣れない避難所生活が長引くことに不安が募る。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・避難所のスタッフや自治体職員に、被災者支援情報や相談の窓口を確認し、問い合わせる。
インターネットが使用できる場合は、国や自治体のホームページで調べる。

📌被害軽減のための事前対策

- ・災害救助法に基づく支援制度や被災者生活再建支援制度、災害時の廃棄物処理事業など、公的な支援制度の基本的な事項を学んでおく。
- ・自治体の支援情報の収集方法も把握しておく。
- ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。

場面 81 避難所でのプライバシーに不安を感じる

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅が倒壊したことから、避難所に避難してきた。
- ・避難所の周辺地域が大きな被害を受けたことから、避難所となっている体育館は避難者でごった返しており、ゆっくり休むスペースを確保することができない。
- ・寝ようとしても隣の人の視線が気になり、仕切りもないことから、着替えをすることもできない。
- ・男女一緒であるため、生活する上でプライバシーが気になり、安心して過ごすことができない。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・可能であれば、避難所運営に積極的に関わり、避難所スタッフや自治体の職員に段ボールなどの間仕切りによる個別空間を確保できる体制の早期の導入、女性や要配慮者への配慮などを強く提案する。
- ・避難所の生活を回避する場合は、親戚や知人宅などへの避難や、他に手段がない場合は、車中泊避難、自治体と相談し、広域避難などを検討する。
- ・避難所以外に避難する場合、自治体が避難者の登録システムなどを整備している場合は避難先を登録する。

📌被害軽減のための事前対策

- ・自宅の耐震性の確認と、耐震性が不足している場合は耐震補強を実施する。
 - ・家具や家電の固定、照明等の落下防止対策、ガラス等の飛散防止対策を行う。
 - ・災害時の在宅避難を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資のなどの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。

場面 82 避難所での防犯に不安を感じる

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅が倒壊したことから、避難所に避難してきた。
- ・避難所の周辺地域が大きな被害を受けたことから、避難所となっている体育館は避難者でごった返しており、ゆっくり休むスペースを確保することができない。
- ・知らない地域の方も大勢、避難しているため、これからの共同生活が不安である。
- ・特にトイレは屋外にあり、停電のため夜は真っ暗になることから、一人でトイレに行くのには、不安がある。
- ・地震から4日目、日中は自宅の片付けに行っているが、住民の話では、他の避難所では不審者の出没などが噂になっているようだ。避難所に帰ると自分の荷物が勝手に移動されていた。
- ・避難所の防犯に不安が募る。

■考慮事項

時刻	夜：防犯のリスクがある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・夜間のトイレなどは声を掛け合い、複数で対応する。
- ・可能であれば、避難所運営に積極的に関わり、避難所のスタッフや自治体の職員にトイレの環境改善、プライベート空間の確保、夜間の巡回などの防犯対策の強化を強く提案する。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・自宅の耐震性の確認と、耐震性が不足している場合は耐震補強を実施する。
- ・家具や家電の固定、照明等の落下防止対策、ガラス等の飛散防止対策を行う。
- ・災害時の在宅避難を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資のなどの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・自治会や自主防災組織において、自治体と連携した避難所の運営マニュアルを整備し、トイレの適切な配置、防犯対策などを行う体制を整備しておく。

場面 83 物資の配布で混乱

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅が倒壊したことから、避難所に避難してきた。
- ・避難所の周辺地域が大きな被害を受けたことから、避難所となっている体育館は避難者でごった返しており、受付もあるが、避難者の対応に手が回っていないようである。
- ・しばらくして、毛布の配布が開始されたが、想定以上の避難者がいるため、高齢者や女性、子どもに優先配布するとのアナウンスがあった。
- ・翌朝、避難所スタッフから備蓄食料についても、高齢者や女性、子どもに優先配布するとアナウンスがあり、一部の避難者が異議を申し立てている。
- ・物流が止まっている影響もあり、全員への食料や物資の配布の目途が立っていない。
- ・避難所スタッフへ苛立っている避難者も増えてきた。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・避難所スタッフや自治体の職員に物資の緊急調達を依頼する。
- ・可能であれば、避難所運営に積極的に関わり、物資調達体制の早期の確立を避難所スタッフや自治体の職員に要請し、要配慮者も考慮した、全ての避難者に公平な物資の配分方法を話し合う。

📌被害軽減のための事前対策

- ・自宅の耐震性の確認と、耐震性が不足している場合は耐震補強を実施する。
- ・家具や家電の固定、照明等の落下防止対策、ガラス等の飛散防止対策を行う。
- ・災害時の在宅避難を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資のなどの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・自治会や自主防災組織において、自治体と連携した避難所の運営マニュアルを整備し、避難者の避難所運営への参画、要配慮者への対応、物資の公平な配分方法などを定めておく。

場面 84 ペット連れで避難

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅が倒壊したことから、ペットと共に避難所に避難してきた。
- ・避難所のスタッフから、ペットは避難所である体育館内に持ち込めないため、ケージに入れ、体育館の外で管理してほしいと言われた。
- ・ケージ内で管理していたが、ペットも慣れない環境で不安を感じているのか、いつも以上に鳴く回数が多く、鳴き声が体育館まで響いている。
- ・地震から3日経っても鳴き声の回数は減らず、一部の避難者から鳴き声が原因で睡眠に支障が出るとの苦情も出ている。
- ・今後の対応について、不安が募る。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・ペットの同行避難が可能な避難所やペットを預けられる施設の情報を自治体のホームページなどで確認する。または、避難所で情報提供を依頼する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・自治体のペット同行避難の対策の状況を確認しておく。
- ・ケージやフードなどのペット用品を用意しておく。

場面 85 十分な物資支援が得られない

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅が倒壊したことから、避難所に避難してきた。
- ・避難所の周辺地域が大きな被害を受けたことから、避難所となっている体育館は避難者でごった返しており、入所するスペースがなかった。
- ・避難所への入所は諦め、少し離れた地域の集会所に行くと、地域の人が自主的に避難をしており、避難スペースもあったことから、集会所で避難をすることを決意した。
- ・集会所は、避難所と同様に電気、上下水道、ガス、通信全てのライフラインが停止していたが、電気については、地域の人を持ってきた発電機で一部の電源を賄うことができた。
- ・食料も集会所の備蓄はなかったが、地域の人を持ち寄ってきており、3 日間は持ちそうである。
- ・集会所は行政から指定された避難所ではないため、避難所として認識されておらず、物資の配送もされるか心配である。
- ・どのように対応していいのか、分からない。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・避難所は避難所以外で避難生活を送る被災者も支援する拠点であるため、避難生活に必要な物資や情報の提供を求める。
- ・自主避難所の存在を自治体や公的機関に伝え、継続的な支援を要請する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・自宅の耐震性の確認と、耐震性が不足している場合は耐震補強を実施する。
- ・家具や家電の固定、照明等の落下防止対策、ガラス等の飛散防止対策を行う。
- ・災害時の在宅避難を想定し、最低 3 日分(推奨 7 日分)の飲料水(1 人 1 日 3 リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資のなどの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・自治会や自主防災組織において、自治体と連携した被災者の安否確認や支援ニーズを把握し、支援に繋げる体制を検討、整備しておく。

場面 86 トイレの利用に困る車中泊避難者

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	ライフライン停止
------	------	-------	---	----	----------

- ・地震の後、自宅が倒壊したことから、自宅にある車で車中泊避難をすることを決意した。
- ・トイレは避難所のトイレを利用しているが、避難所の駐車場は、他の車中泊避難者で混雑していることが多く、満車の場合は、少し離れた避難所まで移動している。
- ・トイレの利用は欠かせないことから、燃料の調達が難しい中、いつ燃料がなくなるか不安が残る。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・自治体の支援を受けるため、また健康維持の観点から、真にやむを得ない場合を除き、車中泊は避け避難所に入所する。
- ・親戚や知人宅などへの縁故避難や自治体に相談し、広域避難などを検討する。

📌被害軽減のための事前対策

- ・在宅避難が可能となるよう自宅の耐震性の確認と、耐震性が不足している場合は耐震補強を実施する。

場面 87 避難所が満杯、自宅にも住めなくなり、車中泊避難を決意

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所・施設
・地震の後、自宅が倒壊したことから、避難所に避難してきたが、避難所となっている体育館は避難者で満員であった。 ・少し離れた避難所も巡ってみたが、同様に満員であったため、自家用車での車中泊避難を決めた。 ・数日間、車内での避難を続けていたが、日中は職場近くに移動し、夜間は避難所である小学校のグラウンドに駐車しているため、空きスペースを見つけることが大変である。 ・駐車場が満車の場合は少し離れた避難所まで移動している。 ・いつまでこのような生活が続くのか不安が募る。					

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・自治体の支援を受けるため、また健康維持の観点から、真にやむを得ない場合を除き、車中泊避難は避け、避難所に入所する。
- ・親戚や知人宅などへの避難や自治体と相談し、広域避難などを検討する。

📌被害軽減のための事前対策

- ・自宅の耐震性の確認と、耐震性が不足している場合は耐震補強を実施する。
 - ・家具や家電の固定、照明等の落下防止対策、ガラス等の飛散防止対策を行う。
 - ・災害時の在宅避難を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資のなどの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。

場面 88 ペット連れでの車中泊避難

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所環境
- 地震の後、自宅に大きな被害がなかったが、古い住宅であるため、万が一の倒壊を考え、ペットを連れて避難所に向かった。 - 避難所に到着すると、避難所に空きスペースはあったが、ペットの受入れはできないと言われてしまった。 - ペットを置いて避難することは難しいため、車中泊避難を決意した。 - 狭い車内での車中泊避難となるため、避難の長期化に不安が残る。					

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📍取るべき行動

- ペットの同行避難が可能な避難所やペットを預けられる施設の情報を自治体のホームページなどで確認する。または、避難所で情報提供を依頼する。

📍被害軽減のための事前対策

- 自治体のペットの同行避難対策の状況を確認しておく。
- ケージやフードなどのペット用品を用意しておく。

場面 89 プライバシーが気になる車中泊

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅が倒壊したことから、避難所に避難してきた。
- ・避難所の周辺地域が大きな被害を受けたことから、避難所となっている体育館は避難者でごった返しており、入所するスペースがなかった。
- ・避難所への入所は諦め、自宅にある車で車中泊避難をすることを決意した。
- ・数日間、車内での避難を続けていたが、窓の目隠しがないことから、外からの視線が気になり、着替えをすることもできない。
- ・生活する上でプライバシーが気になり、安心して過ごすことができない。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・自治体の支援を受けるため、また健康維持の観点から、真にやむを得ない場合を除き、車中泊避難は避け、避難所に入所する。
- ・親戚や知人宅などへの避難や自治体と相談し、広域避難などを検討する。
- ・避難所で着替え等が可能なら利用する。

📌被害軽減のための事前対策

- ・自宅の耐震性の確認と、耐震性が不足している場合は耐震補強を実施する。
 - ・家具や家電の固定、照明等の落下防止対策、ガラス等の飛散防止対策を行う。
 - ・災害時の在宅避難を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資のなどの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。

場面 90 十分な物資支援が得られるか不安

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅が倒壊したことから、避難所に避難してきたが、避難所となっている体育館は避難者で満員であった。
- ・少し離れた避難所も巡ってみたが、同様に満員であったため、自家用車での車中泊避難を決めた。
- ・数日間、車内での避難を続けていたが、そろそろ自宅から持ち出した水や食料が尽きそうである。
- ・車中泊避難をしている避難所では、避難所である体育館の避難者への物資配布を行っているが、車中泊避難でも支援が受けられるか不安が募る。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・避難所は避難所以外で避難生活を送る被災者も支援する拠点であるため、避難生活に必要な物資や情報の提供を求める。
- ・自治体の支援を受けるため、また健康維持の観点から、真にやむを得ない場合を除き、車中泊避難は避け、避難所に入所する。
- ・親戚や知人宅などへの避難や自治体と相談し、広域避難などを検討する。

📌被害軽減のための事前対策

- ・自宅の耐震性の確認と、耐震性が不足している場合は耐震補強を実施する。
 - ・家具や家電の固定、照明等の落下防止対策、ガラス等の飛散防止対策を行う。
 - ・災害時の在宅避難を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資のなどの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。

場面 91 母子で他県に避難

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・主人は仕事の関係で被災地に残ったが、避難所の環境が良くなく、子供の生活環境を考慮し、被災しておらず知り合いもいて、緊急避難所も設けているとの情報があつた X 県に母子で避難してきた。
- ・緊急避難所は、食料等は提供されないが生活環境は整っており、被災地の避難所とは比べ物にならない。
- ・自宅は津波で流失してしまったため、主人は避難所から仕事に通っているが、職場も被災しており、この先どうなるかわからない。
- ・X 県にきた理由の一つが、東日本大震災において、県外に避難した避難者にも応急仮設住宅が無料で提供されたことを知っていたためである。
- ・X 県に問い合わせても、まだその準備はなく、被災県からの要請もないとのこと。
- ・あまり長期に緊急避難所にいるわけにもいかず、県の動向を見ながら、住宅を探さないといけない。被災地の状況を考えると戻る気にはならない。

■考慮事項

時刻	-
季節	-
天候	-

☞取るべき行動

- ・応急仮設住宅、被災者支援等の対策は、順次、方針が決まり、公表されていくため、被災県や避難先自治体からの情報収集に努める。

☞被害軽減のための事前対策

- ・災害救助法に基づく支援制度や被災者生活再建支援制度、災害時の廃棄物処理事業など、公的な支援制度の基本的な事項を学んでおく。

場面 92 津波で自宅を流され A 県に縁故避難

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	その他
------	------	-------	---	----	-----

- ・自宅を含む地域全体が津波で流されてしまった。
- ・避難所はどこも満員で、近くに頼れる親類もない。
- ・勤務先も流され、仕事の目途もつかないため、震災の影響のない親戚がいる A 県に避難することを決意した。
- ・A 県は、被災地からの避難者が多らしく、緊急避難所が開設されていた。
- ・緊急避難所では、食料の提供はないが、スペースは十分でプライバシーも確保され、様々な支援情報も得られる。
- ・自宅も職場も流されているため、今後、生活拠点をどうするか、不安が募る。

■考慮事項

時刻	-
季節	-
天候	-

🏠取るべき行動

- ・応急仮設住宅等、被災者支援の対策は、順次、方針が決まり、公表されていくため、被災県や避難先自治体からの情報収集に努める。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・災害救助法に基づく支援制度や被災者生活再建支援制度、災害時の廃棄物処理事業など、公的な支援制度の基本的な事項を学んでおく。

場面 93 ライフライン停止の長期化により、広域避難を迫られる

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	ライフライン停止
------	------	-------	---	----	----------

- ・地震の後、ライフラインが全て停止したが、自宅に大きな被害がなかったことから、在宅避難を決意した。
- ・飲料水は避難所に設置されている給水車にもらいに行っているが、徒歩で重たい水を運搬するのには限界がある。
- ・トイレも下水道が止まっていることから、簡易トイレを使用しているが、手間がかかる。
- ・在宅避難から 1 週間、電気が復旧したが、上下水道は止まったままであり、復旧には数カ月かかる見通しが示された。
- ・自宅での避難継続は諦め、被害を受けていない県外へ、家族で避難することを決めた。

■考慮事項

時刻	-
季節	-
天候	-

📌取るべき行動

- ・広域避難に関する自治体の対応策を確認し、県内外への二次避難所の設置等の仕組みがあれば利用を検討する。
- ・応急仮設住宅等、被災者支援の対策は、順次、方針が決まり、公表されていくため、被災県や避難先自治体からの情報収集に努める。

📌被害軽減のための事前対策

- ・災害救助法に基づく支援制度や被災者生活再建支援制度、災害時の廃棄物処理事業など、公的な支援制度の基本的な事項を学んでおく。

場面 94 建設型応急住宅に入居ができない

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	住宅不足
------	------	-------	---	----	------

- ・ 自宅が津波で流されたため、避難所に避難して1か月半が経過した。
- ・ ライフラインはほぼ復旧し、避難所にも様々な支援物資が届くようになってきた。
- ・ 自治体が建設する建設型応急住宅の第一弾の入居募集があり、早速応募したが、抽選から外れてしまった。
- ・ 自治体では第二弾の入居募集に向け、建設型応急住宅の着工を進めているが、建設場所が不足しているため、第二弾の募集はまだまだ先になりそうである。
- ・ いつ入居できるか、不安が募る。

■考慮事項

時刻	-
季節	-
天候	-

🏠取るべき行動

- ・ 応急仮設住宅には、民間賃貸住宅を借上げ提供する賃貸型応急住宅もあるため、自治体に問い合わせ、活用を検討する。
- ※住み替えが原則求められないことに留意する。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・ 災害救助法に基づく支援制度や被災者生活再建支援制度、災害時の廃棄物処理事業など、公的な支援制度の基本的な事項を学んでおく。

場面 95 津波で自宅が流出し、避難が長期化、応急仮設住宅入居

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	その他
------	------	-------	---	----	-----

- ・避難所生活も1か月を経過した頃から、ライフラインも復旧し、様々な支援物資も行き届くようになる。
- ・高齢の両親も避難所内で仲間もでき、何とか生活しているが、長期化すると体調が心配である。
- ・自宅の周辺一帯は津波で流されており、復旧・復興がどうなるのか、自治体では検討が始まっているようだが、方向性は決まっていないようだ。
- ・自治体から応急仮設住宅として、建設型応急住宅、賃貸型応急住宅、公営住宅等の一時提供等、応急的な住まいには様々な選択肢があることの説明があった。
- ・自分の現在の職場への通勤を考え、民間賃貸住宅を探したいが、高齢の両親は、これまでの地域のつながりが失われることや、避難所でできた仲間と離れることに難色を示している。

■考慮事項

時刻	-
季節	-
天候	-

📌取るべき行動

- ・応急仮設住宅への入居にあたっては罹災証明を取得した上で、自治体の定める手続きに基づき申請を行う。
- ・応急仮設住宅への入居については地域のコミュニティの維持を考慮するよう、自治体に申し入れる。

📌被害軽減のための事前対策

- ・災害救助法に基づく支援制度や被災者生活再建支援制度、災害時の廃棄物処理事業など、公的な支援制度の基本的な事項を学んでおく。

場面 96 地元への帰還か避難先への定住か迷う

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	経済停滞
------	------	-------	---	----	------

- ・家族は無事であったが、自宅が津波で流されたため、仕事がある夫を置いて、母子のみで親類がいる A 県に避難して来て 3 年が経過した。
- ・避難当初は、生活が二重化することから生活費の負担に苦しんだが、A 県では、民間賃貸住宅に無料で入居することができ、避難先での仕事も確保出来たことから生活も落ち着いてきた。
- ・息子も小学生となり、避難先での知り合いも増えてきたことから、生活基盤も出来てきつつある。
- ・夫は被災地で、事業の再建に奮闘しているが、なかなか軌道に乗らずに困っている。
- ・自宅を含む地域一帯は、区画整理が進行中であり、区画整理が進むと、無料で賃貸住宅に住める措置も終わると聞いているため、その負担を考えると被災地との二重生活の負担は厳しい。
- ・被災者生活再建支援金は交付されたが、地元で自宅を再建する費用が足りず、資金の目途も立たない。
- ・避難先の生活に子供も慣れており、このまま定着するか、帰還するか、判断に迷う。

■考慮事項

時刻	-
季節	-
天候	-

☞取るべき行動

- ・被災県、避難先県の相談窓口の活用や、帰還支援等の支援施策を把握し、解決策を検討する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・災害救助法に基づく支援制度や被災者生活再建支援制度、災害時の廃棄物処理事業など、公的な支援制度の基本的な事項を学んでおく。

場面 97 津波で流出した自宅の再建が困難

主体区分	一般県民	場所の特徴	-	被害	経済停滞
------	------	-------	---	----	------

- ・応急仮設住宅の生活も1年が経過した。高齢の両親は、仲間とのつながりが途切れてしまい、部屋にこもって出てこない。
- ・役所の支援担当者が巡回に来て、被災者同士のコミュニティづくりの交流事業の案内を置いて行ったが、行く気力もない様子である。
- ・日々、元気がなくなっていくようで、体調面、精神面で心配が募る。
- ・自治体の復興計画に基づき、元の住宅一帯は、かさ上げと土地区画整理が行われることになり、自治体から意向調査や説明会等も行われた。
- ・高齢の両親を思うと、地域の交流スペースや医療機関が近接していることが望ましいが、住民からは、住民の意向が反映されず、行政主導で街づくりが進むことを懸念する声も少なくないようだ。
- ・高齢の両親を考えると、元の場所に戻ることを望ましいが、住宅の再建の資金の目途がたたないため、震災復興住宅への入居希望を提出した。応急仮設住宅を退去した後の、生活再建の道筋が見出せない。

■考慮事項

時刻	-
季節	-
天候	-

☞取るべき行動

- ・復興計画の検討にあたって、住民説明会等に積極的に参加する。
- ・公的な相談や支援施策を積極的に活用する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・災害救助法に基づく支援制度や被災者生活再建支援制度、災害時の廃棄物処理事業など、公的な支援制度の基本的な事項を学んでおく。

場面 98 家具の下敷きで家族が負傷した視覚障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被 害	揺れによる被害
------	------	-------	------	-----	---------

- ・視覚障がいがあり、家族と暮らしている。突然、激しい揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れに転倒してしまい、身動きが取れないでいると、急に下半身に衝撃と痛みを感じた。家具が倒れ、足を負傷したようだ。
- ・揺れが収まり、リビングにいたはずの家族が気になるので、声を掛けると、かすかに声が返ってくる。転倒した家具に下半身を挟まれ動けないという。
- ・救助を呼ぶため、携帯電話を探したが、どこかに落としたか手元にない。
- ・玄関に向かうも、物が倒れていて、手探りでは容易ではなさそうだ。
- ・余震も続き、家も古いため、倒壊も心配であり、焦りが募る。

■考慮事項

時刻	夜：就寝時間の場合は、身を守る安全確保行動が取れない可能性が高いため、揺れによる被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📍取るべき行動

- ・窓などの開口部が分かれば、声を出して外部に助けを求める。
- ・周辺の家具や物を叩き、周囲に助けを求める。
- ・笛が手元にある場合は、笛を使用して周囲への助けも試みる。
- ・携帯電話などの通信手段が手元にある場合は、携帯電話を使用して助けを求めることも試みる。
- ・津波や土砂災害、火災等の二次災害の危険がある場合は、周囲の支援を得て、立ち退き避難に全力を尽くす。

📍被害軽減のための事前対策

- ・個別避難計画の中で、様々なケースを想定した避難方法を検討し、定めておく。
 - ・可能であれば、スマートフォンなどの情報通信機器を備え、利用方法を習熟しておく。
 - ・家具や家電の固定、照明等の落下防止対策、ガラス等の飛散防止対策を行う。
 - ・自宅の耐震対策を行う。
 - ・自治会などの防災訓練への参加などを通じて、普段から地域の人などとの関係性を構築しておく。
 - ・自宅の周囲のリスクと避難方法をハザードマップで確認しておく。
 - ・万が一の救助要請に備え、笛を備えておく。
- [共助のポイント]
- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認を行い、連携して避難を支援する体制の整備に努める。

場面 99 高層マンションのエレベーターに閉じ込められた視覚障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被 害	揺れによる被害
------	------	-------	------	-----	---------

- ・自宅マンションのエレベーターに乗っている最中に、エレベーター内が突如、激しく揺れた。
- ・突然の出来事で何が起きているか理解できず、身動きが取れない。
- ・揺れが収まると、エレベーターは止まっているように感じた。
- ・ドアやボタンを触っても、動く気配はない。
- ・助けを求めるため、携帯電話を取り出したが、通じない。
- ・エレベーターから出れず、どうしていいか分からない。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が閉じ込められるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・全ての階の行き先ボタンを押し、止まった階で降りる。
- ・閉じ込められた場合は、非常ボタンやインターホンから連絡を取り、慌てず救助を待つ。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチ(白杖のスペア・特殊レンズや特殊コンタクトレンズのスペア、身体障害者手帳や健康保険証、「お薬手帳」のコピー、携帯ラジオ、笛・ホイッスル、ヘルプカード・見え方説明カード、ポータブル充電器、携帯トイレなど)を携行しておく。

場面 100 緊急地震速報の警報に気付かず、安全確保行動が遅れ、怪我をした聴覚障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被 害	揺れによる被害
・突然、激しい揺れに襲われた。聴覚障がいのため、緊急地震速報のアラート音に気づかない。 ・あまりの揺れに転倒してしまい、転倒時に腰を強打してしまった。 ・激痛の中、周囲を見ると、イスや机が動き、様々な物が散乱しているのが確認できた。 ・揺れが収まった後、立ち上がろうとするが、転倒の影響で立ち上がることができない。 ・情報収集をするため、床に落ちている携帯電話を何とか手に取ると、緊急地震速報のメールが届いていた。					

■考慮事項

時刻	夜：就寝時間の場合は、身を守る安全確保行動が取れない可能性が高いため、揺れによる被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📍取るべき行動

- ・周辺の家具や物を叩き、周囲に助けを求める。
- ・笛が手元にある場合は、笛を使用して周囲への助けも試みる。
- ・携帯電話などの通信手段が手元にある場合は、携帯電話を使用しての救助要請も試みる。
- ・テレビやインターネットなどで被害の情報収集に努める。

📍被害軽減のための事前対策

- ・個別避難計画の中で、様々なケースを想定した避難方法を検討し、定めておく。
 - ・家具や家電の固定、照明等の落下防止対策、ガラス等の飛散防止対策を行う。
 - ・自宅の耐震対策を行う。
 - ・所在を知ってもらうため、自治会などの防災訓練などを通じて、普段から地域の人などとの関係性を構築しておく。
 - ・万が一の救助要請に備え、笛を備えておく。
- [共助のポイント]
- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認を行い、連携して避難を支援する体制の整備に努める。

場面 101 家具の下敷きに巻き込まれた車いす利用者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被 害	揺れによる被害
------	------	-------	------	-----	---------

- ・突然、激しい揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れに車いすから転げ落ちそうになり、必死で車いすにしがみついていた。
- ・揺れが落ち着いて周囲を見ると、家具や家電が倒れ、部屋の出入口を塞いでいる。
- ・住宅の損傷は分からないが、柱と梁が少し傾いているように感じる。
- ・家は古いので、余震で倒壊が心配だが、転倒物を動かさないため、逃げられない。

■考慮事項

時刻	夜：就寝時間の場合は、身を守る安全確保行動が取れない可能性が高いため、揺れによる被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・周辺の家具や物を叩き、周囲に助けを求める。
- ・笛が手元にある場合は、笛を使用して周囲への助けも試みる。
- ・携帯電話などの通信手段が手元にある場合は、携帯電話を使用しての救助要請も試みる。
- ・テレビやインターネットなどで被害の情報収集に努める。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・個別避難計画の中で、様々なケースを想定した避難方法を検討し、定めておく。
 - ・家具や家電の固定、照明等の落下防止対策、ガラス等の飛散防止対策を行う。
 - ・自宅の耐震対策を行う。
 - ・所在を知ってもらうため、自治会などの防災訓練などを通じて、普段から地域の人などとの関係性を構築しておく。
 - ・万が一の救助要請に備え、笛を備えておく。
- [共助のポイント]
- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認を行い、連携して避難を支援する体制の整備に努める。

場面 102 留守番中の小学生に迫る火災の延焼

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被 害	火災
------	------	-------	------	-----	----

- ・保護者が外出中に留守番をしていると、突然、激しい揺れに襲われた。
- ・地震だと思い、学校での避難訓練と同様に机の下に直ぐ隠れ、必死で身を守っていると、食器が割れる音がした。
- ・揺れの後、周囲を確認すると食器が散乱していた。
- ・どうしていいかわからないため、リビングでそのまま待機することにした。
- ・しばらくすると、窓の外が騒がしくなってきたが、外に出るのが怖いため、リビングに引き続き留まっていた。
- ・その後、ふと窓を見ると炎が見え、すぐ近くの家が燃えているのが見えた。
- ・近所の人逃げているのが見えたが、どのように逃げていいのかわからない。

■考慮事項

時刻	昼・夜：調理時間中の場合は、揺れによる火災が発生する可能性が高い。
季節	秋・冬：乾燥しているため、延焼する可能性がある。
天候	晴(強風)：延焼する可能性がある。

🏠取るべき行動

- ・危険が迫っている場合は、安全な場所への避難を最優先に行動する。
- ・近くで火災が発生していることが分かったら、周囲に助けを求め、直ぐに「風上へ」「広い場所に」「延焼箇所を避けて」避難する。
- ・できる限り、防災行政無線など自治体からの避難情報を聞くよう努力する。
- ・避難をする場合は、鼻をハンカチなどで覆い、低い姿勢で避難する。
- ・可能であれば周囲に火災発生を知らせながら避難する。
- ・安全が確保された後、保護者との連絡を試みる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・避難所と避難場所の違い、火災からの避難先となる広域避難場所と避難方法、家族との待ち合わせ場所、安否確認方法などについて話し合っておく。
- ・自治会などの防災訓練などに参加し、普段から地域の人などとの関係性を構築しておく。

場面 103 自宅に迫る火災の延焼に気付かない聴覚障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被 害	火災
------	------	-------	------	-----	----

- ・突然、激しい揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れに困惑し、その場でうずくまると、照明が激しく揺れるのが見えた。
- ・揺れの後、周囲を確認すると机の上の荷物が転倒したのみで、他に大きな被害はなかった。
- ・しばらく、テレビや携帯電話で地震の情報収集をしていると、窓の外で近所の人が避難しているのが見えた。
- ・恐らく、避難所に向かっているのだろうと思い、気に留めなかった。
- ・またしばらくして、窓の外を見ると、慌てて逃げていく近所の人の姿が見えた。
- ・窓を開けて周囲を見ると、近所の家が炎に包まれていた。

■考慮事項

時刻	昼・夜：調理時間中の場合は、揺れによる火災が発生する可能性が高い。
季節	秋・冬：乾燥しているため、延焼する可能性がある。
天候	晴(強風)：延焼する可能性がある。

🏠取るべき行動

- ・危険が迫っている場合は、安全な場所への避難を最優先に行動する。
- ・近くで火災が発生していることが分かったら、周囲に助けを求め、直ぐに「風上へ」「広い場所に」「延焼箇所を避けて」避難する。
- ・できる限り、テレビやインターネットなどで自治体からの避難情報を入手するよう努力する。
- ・避難をする場合は、鼻をハンカチなどで覆い、煙が充満する前に、速やかに低い姿勢で周囲に火災発生を知らせながら避難する。
- ・安全が確保された後、家族等との連絡を試みる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・個別避難計画(できている場合)に基づく支援者との連絡方法や、火災からの避難先となる広域避難場所などの避難場所及び避難方法を把握しておく。
- ・自治体等からの緊急情報の確認方法を複数把握しておく。
- ・自治会などの防災訓練などに参加し、普段から地域の人などとの関係性を構築しておく。
[共助のポイント]
- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認を行い、連携して避難を支援する体制の整備に努める。

場面 104 ライフライン停止に直面する医療的ケア児がいる家族

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被 害	ライフライン停止
・ 自宅で医療的ケアが必要な子どもの看護を行っている最中に、大きな揺れが自宅を襲った。 ・ あまりの揺れに困惑し、その場で自分の身を守るので精一杯であった。 ・ 揺れの最中、部屋中にアラートの音が鳴り響き、子どものベッドを見ると、ベッドはロックをしていたものの、激しい揺れで左右に動き、人工呼吸器の機械が転倒し、呼吸器のチューブが外れていたもので、チューブをつなぎなおした。 ・ 子どものケアには電源が欠かせないことから、停電時に備え、外部バッテリーも用意しているが、恐らく数時間程度しかもたないだろう。 ・ 外部バッテリーが尽きた場合は、自家用車から電源を供給するしかないが、燃料がわずかであり、電源の確保が急務である。 ・ 介護用ベッドも電源が必要なため、電源が確保できる場所に避難するにも人手が必要である。					

■考慮事項

時刻	夜：停電による暗闇のため、行動が制限される可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 避難が困難な可能性がある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難が困難な可能性がある。

🏠取るべき行動

- ・ 住宅の損傷が激しい場合や、津波や土砂災害、火災等の二次災害の危険がある場合は、周囲に助けを求め、電源など必要な装備に留意しながら、危険がない場所に立ち退き避難を行う。
- ・ 自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。
- ・ 設備が整った福祉避難所や施設などへの避難を要請する。
- ・ 自宅の倒壊等の危険がなく、自宅での避難生活が可能である場合は、在宅避難を検討する。
- ・ 電源や水の提供支援について、自治体など、あらゆるところに強く要請する。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・ 個別避難計画の中で、様々なケースを想定した避難方法を検討し、定めておく。
 - ・ 自宅の耐震対策を行う。
 - ・ 停電に備え、ポータブルバッテリーやモバイルソーラーパネル、発電機などを備えておくとともに、バッテリーを満充電の状態にしておく。
 - ・ 自治体や医療機関、電力会社、福祉施設等、電源の調達可能先を調整し、確保しておく。
 - ・ 家具や家電、ベッド、各種機器の固定、照明等の落下防止対策、ガラス等の飛散防止対策を行う。
 - ・ 自治会などの防災訓練などに参加し、普段から地域の人などとの関係性を構築しておく。
 - ・ 水や流動食、薬、医療器具の備蓄をしておく。
 - ・ 災害時の医療機関について、平時から連絡先を確認しておく。
- 〔共助のポイント〕
- ・ 自治会や自主防災組織において、平時から、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認を行い、医療機器の操作の習熟も含め、連携して避難を支援する体制の整備に努める。
 - ・ 併せて、命に直結する電源の備蓄のほか、災害時の調達と支援方法を検討しておく。

場面 105 余震が続く中、自宅で家族の帰宅を待つ小学生

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被 害	その他被害
------	------	-------	------	-----	-------

- ・ 学校から帰宅後、一人でいる時に大きな揺れに襲われた。
- ・ 咄嗟に学校での避難訓練のように、テーブルの下に潜ったため無事であった。
- ・ 揺れの後、周囲を見るとテレビや食器棚が倒れ、様々な物が散乱していた。
- ・ 保護者は仕事で自宅には私一人のため、携帯電話で保護者に電話をしようと試みたが、繋がらない。
- ・ 時間を空けて何度か保護者に電話したが、繋がらない。
- ・ その後も強い余震が度々起こり、その度に家が激しくきしむ音がする。
- ・ 保護者と連絡が取れない中、不安が募り、どうしていいか分からない。

■ 考慮事項

時刻	夜：停電による暗闇のため、行動が制限される可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞ 取るべき行動

- ・ 自分自身の安全を確保した上で、保護者と連絡が取れない場合は、安全を確認した上で家の外に出て、近所の人に状況を伝え、避難等の助言や支援を求める。
- ・ 津波や土砂災害、火災等の二次災害の危険がある場合は、大人の助言を得ながら、危険がない場所に立ち退き避難を行う。
- ・ 電話が集中してつながらない場合は、メールや SNS など連絡を試みる。
- ・ 災害用伝言ダイヤル(171)や災害用伝言板(Web171)を利用して安否確認を試みる。
- ・ 自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

☞ 被害軽減のための事前対策

- ・ ハザードマップで、自宅の周辺がどのような危険があるのか、災害の種類に応じて、どのようなルートで、どこに避難するか、家族の待ち合わせ場所等を確認し、家族全員で共有しておく。
- ・ 災害用伝言ダイヤル(171)や災害用伝言板(Web171)の利用方法を習得しておく。

場面 106 エレベーター停止により、孤立したマンション高層階の車いす利用者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被 害	その他被害
------	------	-------	------	-----	-------

- ・突然、自宅の高層マンションがゆっくりと揺れ始め、静観していると、徐々に長い激しい揺れに変わった。
- ・あまりの揺れに車いすから転げ落ちそうになり、必死で車いすにしがみついた。
- ・テーブルやイスが大きく動き、照明も揺れており、揺れが完全に収まるまで長時間かかった。
- ・揺れの後、室内を見てみると一部の物が散乱していた。
- ・このまま室内に留まることに不安を感じたため、地上に出ることにしたが、廊下に出てみると、エレベーターが停止していた。
- ・周囲の部屋からも人が出てきて、地上に向かおうとしているが、エレベーターが停止していることから、非常階段を利用して避難している。
- ・エレベーターが停止しているため、誰かに抱えてもらい避難する必要があるが、高層階のため避難は困難である。

■考慮事項

時刻	夜：停電による暗闇のため、行動が制限される可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🔗取るべき行動

- ・ライフラインの被災程度や屋内の被災状況から、生活できる状態であれば在宅避難を行う。
- ・生活できる状況にない場合、または火災など危険が迫っている場合は、周囲に支援を求め、直ちに立ち退き避難を行う。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

🔗被害軽減のための事前対策

- ・ライフラインの停止を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
 - ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
 - ・個別避難計画を策定し、立ち退き避難の支援者、避難方法などを検討しておく。
 - ・マンションの自主防災組織や自治会の訓練などに参加し、災害時に助け合う、顔の見える関係づくりに努める。
- [共助のポイント]
- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認を行い、連携して避難を支援し、さらには消防等に救助要請する体制の整備に努める。

場面 107 エレベーター停止により、孤立したマンション高層階の肢体不自由者(車いす利用なし)

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被 害	その他被害
- 突然、自宅の高層マンションがゆっくりと揺れ始め、静観していると、徐々に長い激しい揺れに変わった。 - 何かにつかまりたいが、体が上手く動かせないため、つかまることが出来ず、床に転倒してしまった。 - 大きく動いているテーブルやイス等がぶつかりながら、揺れが完全に収まるまで必死で身を守った。 - 揺れの後、室内を見てみると一部の物が散乱していた。 - このまま室内に留まることに不安を感じたため、地上に出ることにしたが、廊下に出てみると、エレベーターが停止していた。 - 周囲の部屋からも人が出てきて、地上に向かおうとしているが、エレベーターが停止していることから、非常階段を利用して避難している。 - 歩行に支障があることから、誰かに抱えてもらい避難する必要があるが、高層階のため避難は困難である。					

■考慮事項

時刻	夜：停電による暗闇のため、行動が制限される可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・ライフラインの被災程度や屋内の被災状況から、生活できる状態であれば在宅避難を行う。
- ・生活できる状況にない場合、または火災など危険が迫っている場合は、周囲に支援を求め、直ちに立ち退き避難を行う。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ライフラインの停止を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
 - ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
 - ・個別避難計画を策定し、立ち退き避難の支援者、避難方法などを検討しておく。
 - ・マンションの自主防災組織や自治会の訓練などに参加し、災害時に助け合う、顔の見える関係づくりに努める。
- [共助のポイント]
- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認を行い、連携して避難を支援し、さらには消防等に救助要請する体制の整備に努める。

場面 108 自宅に津波が迫る高齢者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	津波浸水危険地域	被 害	津波
------	------	-------	----------	-----	----

- ・突然の激しい揺れに踏ん張ることができず、その場でしゃがみ込み、身を守った。
- ・揺れが収まった後、周囲を確認すると食器棚や様々な物が床に散乱していた。
- ・周囲の状況に茫然としていると、携帯電話からアラートが鳴り響いた。
- ・携帯電話を確認すると、大津波警報の発表を知らせる緊急速報メールであり、屋外でもスピーカーから避難を呼びかける音声聞こえた。
- ・津波に関しては、少し離れた高台が避難場所だったと記憶している。
- ・周囲で逃げろという声が上がっているが、足が弱っていて早く歩けそうにない。
- ・津波の襲来が迫っていると思うと、不安で焦りが募る。

■考慮事項

時刻	夜：就寝時間の場合は、避難行動まで時間がかかるため、津波による被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

📍取るべき行動

- ・周囲に「早く歩けない」旨を伝え、助けを求めながら、高台を目指す。より近くに津波避難ビルや高い建物があれば、躊躇せず避難する。

📍被害軽減のための事前対策

- ・個別避難計画の中で、様々なケースを想定した避難方法を検討し、定めておく。
 - ・自主防災組織や自治会の訓練などに参加し、災害時に助け合う、顔の見える関係づくりに努める。
 - ・ハザードマップ等で浸水区域、浸水の程度、津波の到達時間などを確認しておく。
 - ・津波避難場所や津波避難ビルの位置を把握しておくとともに、避難経路や津波標識、津波フラッグを確認しておく。
- [共助のポイント]
- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認を行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。

場面 109 迫る津波の中、高齢者の避難支援

主体区分	要配慮者	場所の特徴	津波浸水危険地域	被 害	津波
------	------	-------	----------	-----	----

- ・突然、激しい揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れに、その場でうずくまるのが精一杯であった。
- ・揺れの後、携帯電話から大津波警報の発表を知らせる緊急速報メールが鳴り響き、屋外でもスピーカーから避難を呼びかける音声聞こえた。
- ・自宅は沿岸部にあり、短時間で津波が襲来する予測になっているため、すぐに避難を始めなければいけない。
- ・隣の家には自力で歩けない高齢女性が娘と住んでおり、災害発生時には、私も高齢女性の避難を支援する役割になっている。
- ・家族には、直ぐに近くの高台へ行くよう指示し、隣の家に向かった。
- ・隣の家では、娘が高齢女性の避難準備をしていたため、以前定めた個別避難計画どおりに、私の車で高台に向かった。
- ・高台の手前で車が渋滞にはまってしまい戻ることもできない。
- ・高齢女性を背負って歩いて高台を目指すか、別の施設を探すか、判断ができない。

■考慮事項

時刻	夜：就寝時間の場合は、避難行動まで時間がかかるため、津波による被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

☞取るべき行動

- ・周囲に声を掛け、助けを求めながら、徒歩で高台を目指す。より近くに津波避難ビルや高い建物があれば、躊躇せず逃げ込み、浸水深以上の高さに避難する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・個別避難計画の中で、様々なケースを想定した避難方法を検討し、定めておく。
 - ・自主防災組織や自治会の訓練などに参加し、災害時に助け合う、顔の見える関係づくりに努める。
 - ・ハザードマップ等で浸水区域、浸水の程度、津波の到達時間などを確認しておく。
 - ・津波避難場所や津波避難ビルの位置を把握しておくとともに、避難経路や津波標識、津波フラッグを確認しておく。
- [共助のポイント]
- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認を行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。

場面 110 保護者が外出中、自宅にいる小学生に迫る津波

主体区分	要配慮者	場所の特徴	津波浸水危険地域	被 害	津波
------	------	-------	----------	-----	----

- ・保護者が不在の中、自宅で一人にいる時に大きな揺れに襲われた。
- ・咄嗟に学校での避難訓練のように、テーブルの下に潜ったため無事であった。
- ・外ではスピーカーから何か呼びかけているが、分からない。
- ・外に出てみると、周囲には倒壊している家もある。
- ・大人が走りながら、津波が来るから高台にある〇〇公園に避難しろと叫んでいる。
- ・保護者がいつ戻ってくるか分からず、待つべきかどうか分からない。

■考慮事項

時刻	夜：就寝時間の場合は、避難行動まで時間がかかるため、津波による被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

🏠取るべき行動

- ・保護者も津波から避難していると思い、保護者を待たずに早く逃げる。
- ・避難先が分からなければ大人に聞く。
- ・津波が迫ってきたら、近くの逃げ込めそうな高いビルや高い所に逃げる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・津波避難場所や津波避難ビルの位置を把握しておくとともに、避難経路や津波標識、津波フラッグを確認しておく。
- ・ハザードマップ等で浸水区域、浸水の程度、津波の到達時間などを確認しておく。
- ・津波発生時は、自らの判断で直ちに避難する意識を共有しておく。
- ・家族との連絡や安否確認方法、待ち合わせ場所などを家族で話し合っておく。

場面 111 津波が迫る中、支援者を待つ視覚障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	津波浸水危険地域	被 害	津波
------	------	-------	----------	-----	----

- ・突然、激しい揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れにその場でうずくまるのが精一杯であった。
- ・揺れが収まった後、手で周囲を探るも物が散乱しており、普段の状況と異なるため、自分の位置や周囲がどうなっているのかが分からない。
- ・この地域は津波の浸水地域と認識しているが、どの場所に避難して良いか分からないし、この状況では、一人では避難することができない。
- ・以前、自治体の人と一緒に自身の個別避難計画を策定した際には、家族の他に近所の人も避難を支援してくれることになっていた。この揺れでは支援者も被災しているかもしれない。津波が迫る中、焦りが募る。
- ・外のスピーカーから津波からの避難を促す放送が流れ、焦燥感に駆られるが、支援者を待つべきか判断に迷う。

■考慮事項

時刻	夜：就寝時間の場合は、避難行動まで時間がかかるため、津波による被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

🏠取るべき行動

- ・津波が切迫している状況下では、支援者を待たずに、自力で家の外に出られる場合は、周囲に避難誘導と支援を求め、自力で出られない場合は、上階の窓から大声で支援を求める。
- ・笛が手元にある場合は、笛を使用して周囲への助けも試みる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・個別避難計画の中で、様々なケースを想定した避難方法を検討し、定めておく。
 - ・自主防災組織や自治会の訓練などに参加し、災害時に助け合う、顔の見える関係づくりに努める。
 - ・ハザードマップ等で浸水区域、浸水の程度、津波の到達時間などを確認しておく。
 - ・津波避難場所や津波避難ビルの位置を把握しておくとともに、避難経路や津波標識、津波フラッグを確認しておく。
 - ・万が一の救助要請に備え、笛を備えておく。
- [共助のポイント]
- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認を行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。

場面 112 津波が迫る中、津波警報に気付かない聴覚障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	津波浸水危険地域	被 害	津波
------	------	-------	----------	-----	----

- ・突然、激しい揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れに困惑し、その場でうずくまると、照明が激しく揺れるのが見えた。
- ・揺れの後、周囲を確認すると机の上の荷物が転倒したのみで、他に大きな被害はなかった。
- ・停電しテレビもつかないため、状況がつかめないが、外を見ると多くの建物が倒れたり、傾いたりしている。
- ・しばらくすると、窓の外で近所の人々が避難しているのが見えた。こちらを見て何か叫んでいるが理解できない。
- ・恐らく、避難所に向かっているのだろうと思ったが、携帯電話を見ると緊急速報メールで津波からの避難を呼びかけている。
- ・海岸から距離があるため、気にしておらず、避難場所も分からない。
- ・避難が遅れたのではないかと急に不安になる。

■考慮事項

時刻	夜：就寝時間の場合は、避難行動まで時間がかかるため、津波による被害にあうリスクが高い。 停電の場合は、手話や身振りによるコミュニケーション、話者の口元が見えない可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

🏠取るべき行動

- ・直ちに家を出て、周囲の人に耳が聞こえない旨を伝え、避難支援を求める。身振りなどの誘導に従い、避難場所を目指す。
- ・笛が手元にある場合は、笛を使用して周囲への助けも試みる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・個別避難計画の中で、様々なケースを想定した避難方法を検討し、定めておく。
 - ・テレビの他、スマートフォンなどで、自治体等の防災情報を把握できるようにしておく。
 - ・自主防災組織や自治会の訓練などに参加し、災害時に助け合う、顔の見える関係づくりに努める。
 - ・ハザードマップ等で浸水区域、浸水の程度、津波の到達時間などを確認しておく。
 - ・津波避難場所や津波避難ビルの位置を把握しておくとともに、避難経路や津波標識、津波フラッグを確認しておく。
 - ・万が一の救助要請に備え、笛を備えておく。
- [共助のポイント]
- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認を行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。
 - ・避難を呼びかける場合、絵や図、身振りなどで伝える。

場面 113 自宅に津波が迫る医療的ケア児がいる家族

主体区分	要配慮者	場所の特徴	津波浸水危険地域	被害	津波
------	------	-------	----------	----	----

- ・突然、激しい揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れに困惑し、その場で、自分の身を守るので精一杯であった。
- ・揺れの後、すぐさま隣室にいる医療的ケアが必要な子どもの様子を見たが、大きな被害はなく、人工呼吸器や酸素濃縮器も正常に起動していた。
- ・子どもの無事にほっとしていると、突然、携帯電話からアラートが鳴り響いた。
- ・携帯電話を確認すると、大津波警報の発表を知らせる緊急速報メールであり、屋外でもスピーカーから避難を呼びかける音声聞こえた。
- ・窓の外では、急いで避難している近所の人姿が見えた。
- ・海から距離があり、津波は大丈夫と思い込んでいた。すぐに避難したいが、電源や人工呼吸器、酸素濃縮等の様々な機器を持っていかないといけないため、人手と車両も必要である。

■考慮事項

時刻	夜：就寝時間の場合は、避難行動まで時間がかかるため、津波による被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 避難が困難な可能性がある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難が困難な可能性がある。

📌取るべき行動

- ・自力で避難できない場合は、直ちに家を出て周囲に支援を求め、協力を得ながら避難行動をとる。

📌被害軽減のための事前対策

- ・個別避難計画の中で、様々なケースを想定した避難方法(バギー、担架、抱っこ紐など)及び避難経路を検討し、定めておく。
 - ・電源や人工呼吸器など、命に係わる機器を緊急時に持ち出せるようにしておく。
 - ・テレビ、ラジオ、スマートフォンなど、自治体等の防災情報を把握できる複数の手段を確保しておく。
 - ・自主防災組織や自治会の訓練などに参加し、災害時に助け合う、顔の見える関係づくりに努める。
 - ・ハザードマップ等で浸水区域、浸水の程度、津波の到達時間などを確認しておく。
 - ・津波避難場所や津波避難ビルの位置を把握しておくとともに、避難経路や津波標識、津波フラッグを確認しておく。
 - ・水や流動食、薬、医療器具の備蓄をしておく。
 - ・災害時の医療機関について、平時から連絡先を確認しておく。
- 〔共助のポイント〕
- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認を行い、医療機器の操作の習熟も含め、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。

場面 114 津波警報に戸惑う外国籍県民

主体区分	要配慮者	場所の特徴	津波浸水危険地域	被 害	津波
------	------	-------	----------	-----	----

- ・日本に来て半年、まだ日本語が習得できていない。自宅にいる時に経験したことのない揺れが発生し、事態が理解できずにいた。
- ・何とかやり過ごしたが、家の中は家具も倒れて無茶苦茶である。日本は地震が多いと聞いていたが、こんなに激しいとは思わなかった。
- ・茫然としていると、手元のスマートフォンが大きな音を出している。何かのアラートのようなのだが、日本語なのでよく分からない。
- ・家の外でスピーカーから何か呼びかけている。窓を開けて、耳を傾けると、「つなみ…」という言葉が理解できた。津波がくるのだろうか。
- ・ここは海岸に近いが、ここまで来るのだろうか。
- ・逃げるとしても避難場所も分からない。知人に電話してもつながらないため、どうしてよいかわからない。

■考慮事項

時刻	夜：就寝時間の場合は、避難行動まで時間がかかるため、津波による被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

📍取るべき行動

- ・津波の可能性を察知したら、直ちに屋外に出て、高台や高い建物を目指す。
- ・周囲に身振りや日本語が分からないことを伝え、支援を求める。
- ・スマートフォンに翻訳アプリをダウンロードしていれば、アラートの内容の把握に努める。

📍被害軽減のための事前対策

- ・各種外国語パンフレットなどで災害時の行動に関する予備知識の習得に努める。
- ・災害の状況や駐日外国公館の連絡先、交通機関の状況などの情報を把握する方法を確認しておく。
- ・外国語に対応した災害アプリや音声翻訳アプリをダウンロードしておく。

場面 115 土砂災害の兆候に気付かない聴覚障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	土砂災害危険地域	被 害	土砂
------	------	-------	----------	-----	----

- ・突然、激しい揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れに困惑し、その場でうずくまると、照明が激しく揺れるのが見えた。
- ・揺れの後、周囲を確認すると机の上の荷物が転倒したのみで、他に大きな被害はなかった。
- ・時折、余震により自宅が揺れるが、自宅は比較的新しいので倒壊の心配はない。
- ・窓の外を見ると、裏山から少量の土砂が自宅の庭に流出しているように見える。山肌を見ると、水が湧き出していた。
- ・避難をすべきか、自宅に留まるか迷う。

■考慮事項

時刻	夜：就寝時間の場合は、身を守る安全確保行動が取れない可能性が高いため、土砂災害による被害にあうリスクが高い。 土砂災害の兆候に気付きにくい可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 土砂災害のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・土砂災害警戒区域や、がけ地、急傾斜地などにいる場合、またはその確認ができない場合でも、小さな落石など、土砂災害の前兆と感じたら、直ちに、安全な場所に立ち退き避難する。
- ・立ち退き避難の余裕がない場合は、なるべく上階のがけ地の反対側の部屋に移動する。
- ・避難場所が分からない場合は、がけ地から離れたうえで、周囲に協力を求める。

☞被害軽減のための事前対策

- ・個別避難計画の中で、様々なケースを想定した避難方法を検討し、定めておく。
- ・ハザードマップで、自宅周辺の危険度、避難場所や避難経路などを確認しておく。
- ・自主防災組織や自治会の訓練などに参加し、災害時に助け合う、顔の見える関係づくりに努める。
- ・土砂災害警戒区域等を事前に確認しておくとともに、がけ崩れや地すべり、土石流などの土砂災害の前兆を確認しておく。

がけ崩れ：ひび割れ、小石が落ちてくる、水が湧き出る、
湧き水が止まる・濁る、地鳴りが聞こえる等

地すべり：ひび割れ・陥没、亀裂や段差の発生、水が噴き出す、
井戸や沢の水が濁る、地鳴り・山鳴りがする、樹木が傾く等

土石流：山鳴りがする、急に川の水が濁る、腐った土の臭いがする、
降雨が続くのに川の水位が下がる、立木が裂ける音や
石がぶつかり合う音が聞こえる等

〔共助のポイント〕

- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認を行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。

場面 116 土砂災害に巻き込まれる車いす利用者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	土砂災害危険地域	被 害	土砂
------	------	-------	----------	-----	----

- ・突然、激しい揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れに車いすから転げ落ちそうになり、必死で車いすにしがみついた。
- ・揺れの後、周囲を確認すると机の上の荷物が転倒したのみで、他に大きな被害はなかった。
- ・しばらく、テレビや携帯電話で地震の情報収集をしていると、外で「逃げろ」という声が上がっている。少し先で崖が崩れたようだ。
- ・最低限の物を持って玄関に向かうが玄関がなかなか開かず、気持ちが焦る。

■考慮事項

時刻	夜：就寝時間の場合は、身を守る安全確保行動が取れない可能性が高いため、土砂災害による被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 土砂災害のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・大声で外部に出られない旨を伝え、支援を求める。外部の支援が間に合わない場合は、上層階に移動が可能であれば、上層階のがけ地の反対側の部屋に移動する。
- ・笛が手元にある場合は、笛を使用して周囲への助けも試みる。
- ・土砂災害警戒区域や、がけ地、急傾斜地などにいる場合、またはその確認ができない場合でも、小さな落石など、土砂災害の前兆と感じたら、直ちに、安全な場所に立ち退き避難する。
- ・避難場所が分からない場合は、がけ地から離れたうえで、周囲に協力を求める。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・個別避難計画の中で、様々なケースを想定した避難方法を検討し、定めておく。
- ・ハザードマップで、自宅周辺の危険度、避難場所や避難経路などを確認しておく。
- ・自主防災組織や自治会の訓練などに参加し、災害時に助け合う、顔の見える関係づくりに努める。
- ・万が一の救助要請に備え、笛を備えておく。
- ・土砂災害警戒区域等を事前に確認しておくとともに、がけ崩れや地すべり、土石流などの土砂災害の前兆を確認しておく。
 - がけ崩れ：ひび割れ、小石が落ちてくる、水が湧き出る、湧き水が止まる・濁る、地鳴りが聞こえる等
 - 地すべり：ひび割れ・陥没、亀裂や段差の発生、水が噴き出す、井戸や沢の水が濁る、地鳴り・山鳴りがする、樹木が傾く等
 - 土石流：山鳴りがする、急に川の水が濁る、腐った土の臭いがする、降雨が続くのに川の水位が下がる、立木が裂ける音や石がぶつかり合う音が聞こえる等

〔共助のポイント〕

- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認や声掛けを行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。

場面 117 交通機関の停止により、駅で帰宅困難になった知的障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被害	帰宅困難
------	------	-------	------	----	------

- ・職場の最寄り駅のホームで列車を待っている最中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れに、思わずその場でしゃがみ込み、揺れが収まるのを待った。
- ・揺れの後、周囲をみると利用客のほとんどが携帯電話で何か調べている。
- ・しばらく、列車が到着するのを待ったが一向に列車は来ない。
- ・駅のホームでは、アナウンスで何か言っているのが、聞こえた。
- ・詳細は難しく理解できないが、列車がストップしているようだ。
- ・どうやって帰宅すれば良いか、分からない。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・自身のことや連絡先を記したヘルプカードなどを周囲に見せて支援を求める。
- ・むやみに移動せず、上着やカバンなどで頭部を守りながら、駅員などの誘導に従い自治体が開設する一時滞在施設等に滞在し、家族や支援者からの連絡を待つ。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ヘルプカードなどに連絡先や支援を受けたい内容を記載し、常に携帯しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携帯しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

〔共助のポイント〕

- ・見た目で障害の有無が分からず、自分から声を上げられず、意思を伝えられない場合があるため、立ち尽くしている方を把握したら、声を掛け、ゆっくり分かり易い言葉や絵や写真などを使って、話しかける。

場面 118 空港の停止により、帰国できなくなった外国人観光客

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被害	帰宅困難
------	------	-------	------	----	------

- ・1人で観光目的で来日した。帰国するため、駅で空港に向かう列車を待っている最中に突然大きな揺れに襲われた。
- ・経験したことがない、あまりの揺れに、その場でしゃがみ込むのが精一杯であった。
- ・揺れの後、周囲をみると利用客のほとんどがしゃがみ込み、茫然としている。
- ・駅員が慌ただしく走り回り、何かを言っているが分からない。
- ・携帯電話で調べると、地震が起こったことが分かった。
- ・しばらく、列車が到着するのを待ったが、一向に列車は来ない。
- ・駅のホームでは、アナウンスが聞こえたが、何を言っているのか、分からない。
- ・携帯電話で調べると、列車も空港もストップし、当面の間、運転再開しないことが分かった。
- ・今後、どのようにしたら良いのか分からない。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📍取るべき行動

- ・周囲に声を掛け、言葉が通じる者から状況や安全確保の方法などを聞く。
- ・インターネットが使えるば、スマートフォンなどで情報収集を行う。
- ・空港への移動が困難な場合は、自治体が開設する一時滞在施設等に滞在し、情報収集を行う。

📍被害軽減のための事前対策

- ・各種外国語パンフレットなどで災害時の行動に関する予備知識の確認に努める。
- ・災害の状況や駐日外国公館の連絡先、交通機関の状況などの情報を把握する方法を確認しておく。
- ・外国語に対応した災害アプリや音声翻訳アプリをダウンロードしておく。

場面 119 交通機関の停止により、駅で帰宅困難になった高齢者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被害	帰宅困難
------	------	-------	------	----	------

- ・自宅から遠方の駅のホームで列車を待っている最中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・周囲の携帯電話から緊急地震速報のアラートが鳴り響き、頭上の電光掲示板が大きく揺れている。
- ・あまりの揺れに、その場でしゃがみ込むのが、精一杯であった。
- ・揺れの後、周囲をみると利用客のほとんどがしゃがみ込み、茫然としている。
- ・駅員が慌ただしく走り回り、利用客の安否を確認している。
- ・この揺れだと当分の間、運転は再開しないだろうと思うが、携帯電話が通じないため、運行情報の確認をすることができない。家族とも連絡がつかない。
- ・自宅までは遠く、足に不安があるため、徒歩での帰宅は困難である。
- ・当分の間、列車の再開は見込めなさそうであるため、どうするか判断に迷う。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 帰宅に時間がかかる可能性がある。

📍取るべき行動

- ・むやみに帰宅や移動することは控える。駅員などの案内や、テレビ、ラジオ、防災行政無線、自治体のホームページやSNSなどから、帰宅困難者を受け入れている一時滞在施設等を確認し、そこに泊まる。
- ・移動に支援が必要な場合は、周囲に声を掛け、支援を求める。
- ・一時滞在施設で、家族の安否確認と交通機関の運行に関する情報収集に努める。
- ・健康の悪化に懸念がある時は、一時滞在施設のスタッフに申し出る。

📍被害軽減のための事前対策

- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。
- ・家族と災害時の安否確認方法、避難場所、避難方法、待ち合わせ場所などを相談し、共有しておく。
[共助のポイント]
- ・駅周辺の滞留者に要配慮者を見かけた場合は、声を掛け、周囲と連携し、できる限りの支援に努める。

場面 120 知的障がい者の友人と繁華街で被災

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被害	その他被害
------	------	-------	------	----	-------

- ・知的障がいのある友人Aさんと繁華街を歩いている最中に、激しい揺れに遭遇、周囲の建物や電柱が激しく揺れ、看板等が落ちてきた。
- ・咄嗟に二人とも安全確保行動をとったため怪我はなかったが、Aさんは状況の理解が追いついていないようで、声を掛けても反応が少ない。
- ・家族と連絡を取りたいが、電話が繋がらない。安全な場所に避難したいが、Aさんは動こうとしない。

■考慮事項

時刻	昼：利用者が多い可能性があることから、多くの人が被災し、避難時の雑踏事故にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・余震による落下物等からの二次災害を防ぐため、公園等の広い場所や建築年が新しいような堅牢な建物に避難する。
- ・知的障がい者等には、強い言葉は控え、分かりやすい言葉や絵やジェスチャー等で安全確保や避難を呼びかける。
- ・避難に支援が必要な場合は、障がいがあることを伝え、周囲に支援を求め、避難している時も可能な限り、親族や関係者に連絡を取ることを試みる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・ヘルプカードなどに連絡先や支援を受けたい内容を記載し、常に携帯しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携帯しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。
- ・支援者がいる場合は、災害時の連絡方法、支援者不在の時の対応などについて話し合っておく。

[共助のポイント]

- ・見た目だけでは、障害の有無が分からず、自分から声を上げられず、意思を伝えられない場合があるため、立ち尽くしている方を把握したら、声を掛け、ゆっくり分かり易い言葉や絵や写真などを使って、話しかける。

場面 121 周囲の状況が分からず、パニックになり、雑踏に巻き込まれる精神障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被害	その他被害
------	------	-------	------	----	-------

- ・帰宅するため、駅の構内を歩いている最中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れにその場でうずくまるのが精一杯であった。
- ・あまりの揺れにパニックとなり、身動きが取れないでいると、周囲がざわつき始めたが、何が起きているのか分からない。
- ・その場で立ち尽くしていると、遠くから叫び声が聞こえ、周囲の人が走り始め、立ち尽くしている私に誰かがぶつかった。
- ・何が起こったか分からず、そのまま人の流れに押されて身動きが取れなくなってしまった。

■考慮事項

時刻	昼：利用者が多い可能性があることから、多くの人が被災し、避難時の雑踏事故にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・自身のことや連絡先を記したヘルプカードなどを周囲に見せて支援を求める。
- ・むやみに移動せず、上着やカバンなどで頭部を守りながら、駅員などの誘導に従い自治体が開設する一時滞在施設等に滞在し、家族や支援者からの連絡を待つ。
- ・家族や支援者に連絡する。または、連絡を取ってもらう。
- ・症状が悪化した場合は主治医や医療機関に連絡をとってもらう。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ヘルプカードなどに連絡先や支援を受けたい内容を記載し、常に携帯しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携帯しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

[共助のポイント]

- ・見た目だけでは、障害の有無が分からず、自分から声を上げられず、意思を伝えられない場合があるため、立ち尽くしている方を把握したら、不安を和らげるため、強い言葉や指示的な言い方は避け、落ち着いた態度で接する。強い不安や症状の悪化がみられる場合は、医療機関に相談する。

場面 122 津波が迫る中、避難ができない視覚障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	津波浸水危険地域	被害	津波
------	------	-------	----------	----	----

- ・買い物中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れにその場でうずくまるのが精一杯であった。
- ・揺れが収まった後、しばらくすると、津波が来るため、近くの高台に避難してくださいとアナウンスがあった。
- ・周囲がざわつき始め、店員が避難を促しているが、避難の方向や場所が分からない。
- ・一人では避難することができないことから、身動きが取れない。

■考慮事項

時刻	昼：利用者が多い可能性があることから、多くの人が被災し、津波による被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

☞取るべき行動

- ・周囲に自身の状態を伝え、誘導と支援を求めながら、少しでも高い場所に避難する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ヘルプカードなどに連絡先や支援を受けたい内容を記載し、常に携帯しておく。
 - ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携帯しておく。
 - ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。
 - ・支援者がいる場合は、災害時の連絡方法、支援者不在の時の対応などについて話し合っておく。
 - ・自宅やいつも行く場所の周辺の災害のリスクや避難方法などを確認しておく。
- 〔共助のポイント〕
- ・声を掛ける時は、あっち、こっちではなく、前、右など具体的な言葉を使う。
 - ・避難行動中に支援を求める要配慮者を見かけた場合は、声を掛け、自身の安全確保にも留意しながら、周囲と連携し、できる限りの支援に努める。

場面 123 津波が迫る中、避難誘導の音声に気付かない聴覚障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	津波浸水危険地域	被害	津波
------	------	-------	----------	----	----

- ・買い物中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れにその場でうずくまるのが精一杯であった。
- ・揺れが収まった後、しばらくすると周囲の客が一斉に出口に向かって走り出した。
- ・店員も慌てた様子で、指を指しながら何かを指示しているが、内容が分からない。
- ・不安になりながら、人の流れの方向に避難するも、何故、他の人が走って避難しているのかが分からない。

■考慮事項

時刻	昼：利用者が多い可能性があることから、多くの人々が被災し、津波による被害にあうリスクが高い。 夜：停電の場合は、手話や身振りによるコミュニケーション、話者の口元が見えない可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

☞取るべき行動

- ・周囲に自身の状態を伝え、誘導と支援を求めながら、少しでも高い場所に避難する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ヘルプカードなどに連絡先や支援を受けたい内容を記載し、常に携帯しておく。
 - ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携帯しておく。
 - ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。
 - ・支援者がいる場合は、災害時の連絡方法、支援者不在の時の対応などについて話し合っておく。
 - ・自宅やいつも行く場所の周辺の災害のリスクや避難方法などを確認しておく。
- [共助のポイント]
- ・避難を呼びかける場合、絵や図、身振りなどで伝える。
 - ・避難行動中に支援を求める要配慮者を見かけた場合は、声を掛け、自身の安全確保にも留意しながら、周囲と連携し、できる限りの支援に努める。

場面 124 津波が迫る中、避難に時間がかかる車いす利用者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	津波浸水危険地域	被害	津波
------	------	-------	----------	----	----

- ・商業施設内を通行している最中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れに車いすから転げ落ちそうになり、必死で車いすにしがみついた。
- ・揺れの後、周囲の携帯電話から津波からの避難を呼びかける緊急速報メールのアラートが鳴り響いた。
- ・その場で立ち尽くしていると、店員が津波が来るため、急いで近くの高台へ避難するよう、呼びかけてきた。
- ・周囲の人は走って逃げているが、車いすではスピードが違うことから、どんどん置いて行かれる。
- ・津波が迫る中、避難できるか不安が募る。

■考慮事項

時刻	昼：利用者が多い可能性があることから、多くの人々が被災し、津波による被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

☞取るべき行動

- ・周囲に自身の状態を伝え、誘導と支援を求めながら、少しでも高い場所に避難する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ヘルプカードなどに連絡先や支援を受けたい内容を記載し、常に携帯しておく。
 - ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携帯しておく。
 - ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。
 - ・支援者がいる場合は、災害時の連絡方法、支援者不在の時の対応などについて話し合っておく。
 - ・自宅やいつも行く場所の周辺の災害のリスクや避難方法などを確認しておく。
- 〔共助のポイント〕
- ・車いすを動かす時は声を掛ける。
 - ・動かせない場合は担架の利用、背負うなどの対応も必要になる。
 - ・避難行動中に支援を求める要配慮者を見かけた場合は、声を掛け、自身の安全確保にも留意しながら、周囲と連携し、できる限りの支援に努める。

場面 125 信号が消えていることに気付かず、交差点を通過する視覚障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被害	その他被害
------	------	-------	------	----	-------

- ・会社から帰宅するため、最寄り駅に向かって歩いている最中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れにその場でうずくまるのが精一杯であった。
- ・大きな揺れであったが、周囲からは落下や破損等の音はしなかった。
- ・揺れの後、白杖で周囲を探ったが、点字ブロックの周囲には散乱物がなさそうであったため、普段の帰宅経路を注意しながら歩き始めた。
- ・横断歩道に差し掛ったため、普段通り、信号の音声や車の走行音を頼りに横断の機会を伺っていたが、いつまでも信号の音声もなく、常に車が動いているように感じる。
- ・車の通行音が消えたため、横断歩道を渡ったところ、急ブレーキの音がした。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雨音で音が聞こえにくい。 雪：低体温症のリスクがある。 帰宅に時間がかかる可能性がある。

📌取るべき行動

- ・自身のことや連絡先を記したヘルプカードなどを周囲に見せて、横断のための支援を求める。
- ・路上も地震の揺れで安全とは限らないため、自宅か近くの避難所等の安全な場所への避難の支援を求める。

📌被害軽減のための事前対策

- ・ヘルプカードなどに連絡先や支援を受けたい内容を記載し、常に携帯しておく。
 - ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携帯しておく。
 - ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。
 - ・支援者がいる場合は、災害時の連絡方法、支援者不在の時の対応などについて話し合っておく。
 - ・自宅やいつも行く場所の周辺の災害のリスクや避難方法などを確認しておく。
- 〔共助のポイント〕
- ・声を掛ける時は、あっち、こっちではなく、前、右など具体的な言葉を使う。
 - ・避難行動中に支援を求める要配慮者を見かけた場合は、声を掛け、自身の安全確保にも留意しながら、周囲と連携し、できる限りの支援に努める。

場面 126 帰宅中に被災し、周囲の状況に混乱する精神障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被害	その他被害
------	------	-------	------	----	-------

- ・ 繁華街を歩いている最中に、突然、大きな揺れに襲われた。
- ・ あまりの揺れにその場でうずくまるのが精一杯であった。
- ・ 身を守りながら周囲を見ると、ビルが左右に激しく揺れ、看板が今にも落ちそうなくらい揺れているのが見えた。
- ・ 揺れが収まった後、周囲を確認すると路上にはビルから落下したガラスの破片や外壁が散乱し、一部の信号は傾いていた。
- ・ あまりの衝撃にパニックとなり、どのように対応していいのかわからなくなってしまった。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 帰宅に時間がかかる可能性がある。

☞取るべき行動

- ・ 自身のことや連絡先を記したヘルプカードなどを周囲に見せて支援を求める。
- ・ むやみに移動せず、上着やカバンなどで頭部を守りながら、駅員などの誘導に従い自治体が開設する一時滞在施設等に滞在し、家族や支援者からの連絡を待つ。
- ・ 家族や支援者に連絡する。または、連絡を取ってもらう。
- ・ 症状が悪化した場合は主治医や医療機関に連絡をとってもらう。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ ヘルプカードなどに連絡先や支援を受けたい内容を記載し、常に携帯しておく。
- ・ 万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携帯しておく。
- ・ 外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

[共助のポイント]

- ・ 不安を和らげるため、強い言葉や指示的な言い方は避け、落ち着いた態度で接する。強い不安や症状の悪化がみられる場合は、医療機関に相談する。

場面 127 津波から逃げる方向が分からない知的障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	津波浸水危険地域	被害	津波
------	------	-------	----------	----	----

- ・帰宅するため、自宅近くの海辺を歩いている最中に突然、大きな揺れに襲われた。
- ・あまりの揺れに茫然とし、その場で立ち尽くしていた。
- ・揺れの後、一部の住民が慌てて逃げる様子が見えたが、なぜ逃げているのか、分からなかった。
- ・そのまま自宅へ向かっていると、携帯電話から大きなアラートが鳴り響いた。
- ・通常とは違う音に動揺していると、屋外のスピーカーからも何かを呼びかけているアナウンスが聞こえたが、アナウンスの意味は分からない。
- ・普段とは違う光景に動揺し、どうしていいか分からない。

■考慮事項

時刻	昼：利用者が多い可能性があることから、多くの人が被災し、津波による被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

☞取るべき行動

- ・自身のことや連絡先を記したヘルプカードなどを周囲に見せて支援を求める。
- ・津波が迫っている場合は、支援を求めながら、少しでも高い場所に避難する。
- ・安全を確保した後、親族や関係者に連絡を取ることを依頼する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ヘルプカードなどに連絡先や支援を受けたい内容を記載し、常に携帯しておく。
 - ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携帯しておく。
 - ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。
 - ・支援者がいる場合は、災害時の連絡方法、支援者不在の時の対応などについて話し合っておく。
 - ・自治会などの防災訓練への参加などを通じて、避難場所や避難方法の把握に努めるとともに、近所や支援者などに助けが求められる関係を構築しておく。
- [共助のポイント]
- ・見た目で障害の有無が分からず、自分から声を上げられず、意思を伝えられない場合があるため、立ち尽くしている方を見つけたら、声を掛け、ゆっくり分かり易い言葉や絵や写真などを使って、話しかける。

場面 128 大津波警報に戸惑う外国人観光客

主体区分	要配慮者	場所の特徴	津波浸水危険地域	被害	津波
------	------	-------	----------	----	----

- ・有名な海岸沿いを散策している最中に、突然、周囲からアラートが鳴り響き、大きな揺れに襲われた。
- ・経験したことがない、あまりの揺れに、その場でしゃがみ込むのが、精一杯であった。
- ・揺れの後、周囲をみると観光客のほとんどがしゃがみ込み、周辺には住宅から落下したガラスや外壁が散乱し、がけ崩れも発生していた。
- ・しばらく茫然としていて、一部の観光客が何かに焦ったように、海岸から離れて走っていく姿が見えた。
- ・戸惑っていると、周囲の携帯電話から大きなアラートが鳴り響き、屋外のスピーカーからも何かを呼びかけているアナウンスが聞こえた。
- ・初めての日本で被災し、どうしていいか分からない。

■考慮事項

時刻	昼：利用者が多い可能性があることから、多くの人が被災し、津波による被害にあうリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

📍取るべき行動

- ・周囲に声を掛け、言葉が通じる者から状況や安全確保の方法などを聞く。
- ・スマートフォンに翻訳アプリを設定していれば、アラートの内容の把握に努める。

📍被害軽減のための事前対策

- ・各種外国語パンフレットなどで災害時の行動に関する予備知識の習得に努める。
- ・災害の状況や駐日外国公館の連絡先、交通機関の状況などの情報を把握する方法を確認しておく。
- ・外国語に対応した災害アプリや音声翻訳アプリをダウンロードしておく。

場面 129 緊急停止した列車に閉じ込められた車いす利用者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被害	揺れによる被害
------	------	-------	------	----	---------

- ・列車で通勤中、車内に緊急地震速報のアラートが鳴り響いた瞬間、列車が急停止した。
- ・停止して間もなく、車内が大きく揺れ、車内に悲鳴が響いた。
- ・揺れの後、車内放送があり地震により列車は全線でストップし、復旧の見込みは不明とのアナウンスがあった。
- ・停止から3時間後、ようやく乗務員によりドアが解放され、乗客が次々とドアに腰を下ろし、お尻を前方にずらしながら、線路に降りていった。
- ・線路までは高さがあり、車いすは重量もあることから、降車には複数人の手助けが必要である。
- ・降車後も車いすでは線路上を通行できない。
- ・現状、乗務員以外の誘導人員は見当たらないことから、人数が揃うまで、さらに車内で待機するしかない。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 帰宅に時間がかかる可能性がある。

📍取るべき行動

- ・車椅子で車内に留まっていることを、周囲の協力を得て、早期に外部に伝え、消防等の救出を待つ。
- ・運行会社の安全確認が完了するまで待機し、乗務員や運行会社からの情報や誘導に従い、冷静に移動する。

📍被害軽減のための事前対策

- ・ヘルプカードなどに連絡先や支援を受けたい内容を記載し、常に携帯しておく。
 - ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携帯しておく。
 - ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。
 - ・支援者がいる場合は、災害時の連絡方法、支援者不在の時の対応などについて話し合っておく。
 - ・自宅やいつも行く場所の周辺の災害のリスクや避難方法などを確認しておく。
- 〔共助のポイント〕
- ・車いすを動かす時は声を掛ける。
 - ・動かせない場合は、担架の利用、背負うなどの対応も必要になる。
 - ・避難行動中に支援を求める要配慮者を見かけた場合は、声を掛け、自身の安全確保にも留意しながら、周囲と連携し、できる限りの支援に努める。
 - ・列車の中で車いすから降りてもらい、担架や背負うなどの方法で車いすを動かせる場所まで移動するなどの対応も必要である。

場面 130 緊急停止した列車に閉じ込められた肢体不自由者(車いす利用なし)

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被害	揺れによる被害
------	------	-------	------	----	---------

- ・列車で通勤中、車内に緊急地震速報のアラートが鳴り響いた瞬間、列車が急停止した。
- ・停止して間もなく、車内が大きく揺れ、車内に悲鳴が響いた。
- ・揺れの後、車内放送があり地震により列車は全線でストップし、復旧の見込みは不明とのアナウンスがあった。
- ・停止から3時間後、ようやく乗務員によりドアが解放され、乗客が次々とドアに腰を下ろし、お尻を前方にずらしながら、線路に降りていった。
- ・線路までは高さがあり、体が上手く動かせないことから、降車には複数人の手助けが必要である。
- ・降車後も不安定な線路上を歩行するには不安がある。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 帰宅に時間がかかる可能性がある。

📍取るべき行動

- ・車椅子で車内に留まっていることを、周囲の協力を得て、早期に外部に伝え、消防等の救出を待つ。
- ・運行会社の安全確認が完了するまで待機し、乗務員や運行会社からの情報や誘導に従い、冷静に移動する。

📍被害軽減のための事前対策

- ・ヘルプカードなどに連絡先や支援を受けたい内容を記載し、常に携帯しておく。
 - ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携帯しておく。
 - ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。
 - ・支援者がいる場合は、災害時の連絡方法、支援者不在の時の対応などについて話し合っておく。
 - ・自宅やいつも行く場所の周辺の災害のリスクや避難方法などを確認しておく。
- [共助のポイント]
- ・車いすを動かす時は声を掛ける。
 - ・動かせない場合は、担架の利用、背負うなどの対応も必要になる。
 - ・避難行動中に支援を求める要配慮者を見かけた場合は、声を掛け、自身の安全確保にも留意しながら、周囲と連携し、できる限りの支援に努める。
 - ・列車の中で車いすから降りてもらい、担架や背負うなどの方法で車いすを動かせる場所まで移動するなどの対応も必要である。

場面 131 緊急停止した列車に閉じ込められ、音声アナウンスに気付かない聴覚障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被害	揺れによる被害
・列車で帰宅中に乗客が一斉に携帯電話を見始めた。 ・突然の状況に困惑していると、列車が急停止した。 ・咄嗟に吊革につかまり、なんとか体制を維持していると、車内が大きく揺れ、押しつぶされそうになるのを必死で耐えた。 ・揺れの後、一部の照明を残して、車内が急に薄暗くなった。 ・しばらくすると、乗客が耳を澄まして何かを聞いている様子が見えたが、何が放送されているのか、分からない。 ・音声情報が優先となっており、いつ解放されるのか、他の交通手段はあるのか分からないため、不安が募る。					

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📖取るべき行動

- ・ヘルプカードなどを提示し、音声以外の方法で、状況を教えてくれるよう、周囲に依頼する。
- ・インターネットが通じれば、スマートフォンで被害の状況や、自治体、交通事業者の情報を収集する。

📖被害軽減のための事前対策

- ・ヘルプカードなどに連絡先や支援を受けたい内容を記載し、常に携帯しておく。
 - ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携帯しておく。
- 〔共助のポイント〕
- ・避難を呼びかける場合、絵や図、身振りなどで伝える。
 - ・避難行動中に支援を求める要配慮者を見かけた場合は、声を掛け、自身の安全確保にも留意しながら、周囲と連携し、できる限りの支援に努める。

場面 132 緊急停止した列車に閉じ込められ、パニックになる精神障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被害	揺れによる被害
------	------	-------	------	----	---------

- ・列車で帰宅中、車内に緊急地震速報のアラートが鳴り響いた瞬間、列車が急停止した。
- ・急停止に伴い、満員状態の車内では身動きが取れず、押しつぶされそうになっている乗客の悲鳴が上がっている。
- ・停止して間もなく、車内が大きく揺れ、再び車内に悲鳴が響いた。
- ・吊革につかまり、なんとか体制を維持していると、窓からは周囲の建物から壁やガラスが落ちてくる様子が見えた。
- ・揺れの後、車内放送があり、地震により列車は全線でストップし、復旧の見込みは不明とのアナウンスがあった。
- ・これまでに遭遇したことのない事態で頭の理解が追いつかず、パニックになってしまった。
- ・停止から1時間経ってもドアが開かず、どんどん体調も悪くなってくる。
- ・いつになったら解放されるのか分からず、不安が募る。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📍取るべき行動

- ・自身のことや連絡先を記したヘルプカードなどを周囲に見せて支援を求める。
- ・むやみに移動せず、上着やカバンなどで頭部を守りながら、駅員などの誘導に従い自治体が開設する一時滞在施設等に滞在し、家族や支援者からの連絡を待つ。
- ・家族や支援者に連絡する。または、連絡を取ってもらう。
- ・症状が悪化した場合は主治医や医療機関に連絡をとってもらう。

📍被害軽減のための事前対策

- ・ヘルプカードなどに連絡先や支援を受けたい内容を記載し、常に携帯しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携帯しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

〔共助のポイント〕

- ・不安を和らげるため、強い言葉や指示的な言い方は避け、落ち着いた態度で接する。強い不安や症状の悪化がみられる場合は、医療機関に相談する。

場面 133 列車が緊急停止し、帰宅困難になった小学生

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被害	帰宅困難
------	------	-------	------	----	------

- ・列車で通学中、車内にアラートが鳴り響いた瞬間、列車が急停止した。
- ・揺れの後、車内放送があり地震により列車は全線でストップし、復旧の見込みは不明とのアナウンスがあった。
- ・携帯電話を使用して、保護者に電話しようとするが繋がらない。
- ・停止から3時間後、ようやく乗務員によりドアが解放され、周囲の大人の助けをもらいながら外に出られた。
- ・30分ほど線路の上を歩いてようやく駅に着いたが、未だに携帯電話が繋がらず、保護者からも連絡がない。
- ・初めて途中下車した駅は、最寄り駅から数駅離れており、土地勘がない。
- ・どうして良いか分からないので、周囲の大人についていくが、自分がどこに向かっているか分からない。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 帰宅に時間がかかる可能性がある。

📍取るべき行動

- ・駅員や周囲の大人に声を掛け、支援を要請する。
- ・誘導に従い、一時滞在施設など安全な場所へ移動し、家族と連絡がつくまで移動は控える。
- ・携帯電話がない場合、または連絡がつかない場合は、周囲の大人に相談し、連絡をとってもらう。

📍被害軽減のための事前対策

- ・登校など、外出中の災害発生時における家族との連絡方法、避難など安全確保方法、待ち合わせ場所などを家族で話し合っておく。
- ・平時から、自宅と学校間の徒歩帰宅ルートを確認しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。

場面 134 車で移動中、渋滞に遭遇し、帰宅困難になった車いす利用者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被害	帰宅困難
------	------	-------	------	----	------

- ・ 車で一般道を移動中、携帯電話から緊急速報メールのアラートが鳴り響いた。
- ・ 突然の事態に動揺しつつも、減速しながら路肩に停車した瞬間、車内が激しく揺れた。
- ・ 揺れの後、周囲を確認すると、道路上に一部飛散物が散乱しているものの、通行自体は問題ないように見えた。
- ・ しばらくして、一部の車が徐行しながら飛散物を避け、運転を再開するのが見えたが、他の車と同じように移動して良いのか、車を置いて車いすで避難した方が良いか、判断に迷う。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 帰宅に時間がかかる可能性がある。

📌取るべき行動

- ・ 急ブレーキを避け、安全に道路の左側に停止させる。停止後は、カーラジオ等により地震情報や交通情報を確認する。
- ・ 引き続き車を運転する場合は、道路の損壊、信号機の作動停止、道路上の障害物などに十分注意する。
- ・ 土砂や津波の二次災害の恐れがある場合は車を置いて避難し、できる限り道路外の場所に移動しておき、やむを得ず道路上に置いて避難するときは、道路の左側に寄せて駐車し、エンジンを止め、キーは付けたまま、ドアはロックせずに車を離れる。
- ・ 自宅等への動線となる道路の安全や利用できる公共交通機関などが確認できるまでは、むやみに帰宅や移動することは控え、帰宅困難者を受け入れている一時滞在施設などに留まり、家族等の安否確認や、テレビ、ラジオ、防災行政無線、自治体等のホームページなどの公共の情報を確認する。
- ・ 車いすで避難する場合は、周囲に声を掛け、避難の支援を依頼する。

📌被害軽減のための事前対策

- ・ ヘルプカードなどに連絡先や支援を受けたい内容を記載し、常に携帯しておく。
 - ・ 万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携帯しておく。
 - ・ 避難誘導看板やピクトグラムなどの意味を理解しておく。
 - ・ 自治体や道路管理者の防災情報を確認する方法を習得しておく。
 - ・ 支援者がいる場合は、災害時の連絡方法、支援者不在の時の対応などについて話し合っておく。
 - ・ 自宅やいつも行く場所の周辺の災害のリスクや避難方法、家族との安否確認方法などを確認しておく。
- 〔共助のポイント〕
- ・ 車いすを動かす時は声を掛ける。
 - ・ 動かせない場合は、担架の利用、背負うなどの対応も必要になる。
 - ・ 避難行動中に支援を求める要配慮者を見かけた場合は、声を掛け、自身の安全確保にも留意しながら、周囲と連携し、できる限りの支援に努める。

場面 135 緊急停止した列車内で停電が発生し、体温調整に苦慮する車いす利用者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	一般地域	被害	ライフライン停止
------	------	-------	------	----	----------

- ・列車で通勤中、車内に緊急地震速報のアラートが鳴り響いた瞬間、列車が急停止した。
- ・急停止に伴い、満員状態の車内では身動きが取れず、押しつぶされそうになっている乗客の悲鳴が上がっている。
- ・停止して間もなく、車内が大きく揺れ、再び車内に悲鳴が響いた。
- ・あまりの揺れに車いすから転げ落ちそうになり、必死で車いすにしがみついた。
- ・揺れの後、車内放送があり地震により列車は全線でストップし、復旧の見込みは不明とのアナウンスがあった。
- ・車内は停電しており、空調がストップしているため、熱気が充満している。
- ・体温調整ができないため、体中が熱くなり、気分が悪くなってきた。

■考慮事項

時刻	朝・夜：通勤・通学時間や帰宅時間の場合は、多くの人が帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・自身のことや連絡先を記したヘルプカードなどを周囲に見せて、非常通報ボタンを押して、乗務員に状況を伝え、乗務員の誘導に従い冷静に避難する。
- ・体温調整ができず体調悪化が懸念される場合は、一定の空間を空けるなど、できるだけ対応を依頼する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ヘルプカードなどに連絡先や支援を受けたい内容を記載し、常に携帯しておく。
 - ・平時から、自宅と職場間の徒歩帰宅ルート及びルート沿いの避難施設を確認しておく。
 - ・避難誘導看板やピクトグラムなどの意味を理解しておく。
 - ・自治体や道路管理者の防災情報を確認する方法を習得しておく。
 - ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携帯しておく。
 - ・支援者がいる場合は、災害時の連絡方法、支援者不在の時の対応などについて話し合っておく。
 - ・自宅やいつも行く場所の周辺の災害のリスクや避難方法、家族との安否確認方法などを確認しておく。
- [共助のポイント]
- ・車いすを動かす時は声を掛ける。
 - ・動かせない場合は、担架の利用、背負うなどの対応も必要になる。
 - ・避難行動中に支援を求める要配慮者を見かけた場合は、声を掛け、自身の安全確保にも留意しながら、周囲と連携し、できる限りの支援に努める。
 - ・列車の中で車いすから降りてもらい、担架や背負うなどの方法で車いすを動かせる場所まで移動するなどの対応も必要である。

場面 136 ライフラインが停止している中、乳幼児のミルクが作れない女性

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	ライフライン停止
------	------	-------	---	----	----------

- ・地震の後、自宅に大きな被害がなかったが、自宅の電気、上下水道、ガス、通信全てのライフラインが停止してしまった。
- ・少し離れた場所にある避難所はひどく混雑しており、乳幼児を連れての避難はためられるため自宅で過ごしている。
- ・残っていたカセットコンロと備蓄の水でミルクを作っていたが、カセットボンベがなくなり、水も粉ミルクも乏しくなってきた。洗浄する生活用水も尽きた。
- ・インターネットもメールも使えず、どこに支援要請して良いのか分からない。

■考慮事項

時刻	夜：停電による暗闇のため、行動が制限される可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・避難所は、避難所以外で避難生活を送る被災者も支援する拠点でもあるため、避難所のスタッフや巡回してきた公的機関の職員などに、水やミルク、カセットボンベなどの支援を強く要請する。また、液体ミルクの備蓄があれば支援を要請する。
- ・在宅避難の環境が厳しい場合は、自治体に個別スペースやプライバシーが確保できる避難所や福祉避難所への入所を要請する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・ライフラインの停止を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、粉ミルク、紙オムツ、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。

※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。

[共助のポイント]

- ・地域で避難所毎に定める避難所運営マニュアルなどに、乳幼児を抱えた家族への配慮や在宅避難に対する巡回支援などを定めておく。

場面 137 高層マンションの上層階で孤立する高齢者を抱えた世帯

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	通信障害・孤立
------	------	-------	---	----	---------

- ・地震の後、自宅に大きな被害がなかったが、エレベーターが停止していた。
- ・非常階段はあるが、歩行が困難な高齢者がいるため、在宅避難を決意した。
- ・すぐにエレベーターも復旧すると考えていたが、3日経っても復旧しない。
- ・自宅にある水や食料も尽きてきたことに加え、高齢者の持病の薬が今日の分までしかなく、生活環境の悪化により、体調も悪化してきている。
- ・携帯電話もまだ繋がらず、どのように対応していいか、相談ができない状況だ。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・物資の不足が見込まれる場合は、周囲の世帯と相談し、移動可能な者が避難所まで物資を取りに行く。
- ・在宅避難の環境が厳しい場合は、自治体に福祉避難所等への避難支援を要請する。
- ・かかりつけの医療機関や薬局に連絡し、残薬が少ないことを相談する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・ライフラインの停止を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意しておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・お薬手帳を含む非常持ち出し品を用意しておく。
- ・マンションの備蓄や設備を確認しておく。
- ・自治会や自主防災組織において、避難生活を支え合う体制を整備し、共有しておく。
- ・高齢者については、自治体で作成する避難行動要支援者名簿に登録しておく。また、個別避難計画を作成しておく。
- [共助のポイント]
- ・自治会や自主防災組織で、個人情報に留意したうえで、要配慮者の情報を共有し、連携して、在宅や立ち退き避難を支援する体制を整備しておく。

場面 138 道路寸断により、孤立状態となった高齢者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	通信障害・孤立
------	------	-------	---	----	---------

- ・地震の後、自宅に大きな被害がなかったが、自宅から市街地へと続く唯一の道路が土砂崩れでふさがれていた。
- ・大量の土砂であり、高齢のため、乗り越えて市街地へ向かうことができない。
- ・この地域は人家も多くはなく、近くには一時避難場所となる公民館があるが、備蓄も多くないことを知っているため、在宅避難を選択した。
- ・ライフラインが停止し、携帯電話も通じない中、自宅で3日間過ごしたが、そろそろ自宅にある水や食料が尽きそう。
- ・周囲は高齢世帯ばかりで、健康を害し始めている者もいる。
- ・救助を求めたいが、連絡手段がない。

■考慮事項

時刻	夜：停電による暗闇のため、行動が制限される可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📍取るべき行動

- ・地域住民で話し合い、あらゆる手段で外部との接触を試みる。
- ・ヘリの臨時離発着場所が決まっていれば、障害物の除去など、環境整備に努める。
- ・近所や知り合い、自治体などにあらゆる手段で連絡を試み、支援を求める。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

📍被害軽減のための事前対策

- ・ライフラインの停止を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意しておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・お薬手帳を含む非常持ち出し品を用意しておく。
- [共助のポイント]
- ・自治会や自主防災組織で、個人情報には留意したうえで、要配慮者の情報を共有し、支援できる体制を確保しておく。
- ・自治会や自主防災組織において、地域として水、食料、医薬品や資機材の備蓄などを行う。自治体と連携して、衛星携帯電話や充電器、ヘリの臨時離発着場所などを確保しておく。

場面 139 病院の受入れを懸念する妊婦

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	医療・衛生
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅に大きな被害がなく、出産を間近に控えていることから、在宅避難を決意した。
- ・ライフラインが停止し、携帯電話も通じない中、自宅で3日間過ごした。
- ・この状況であると、病院も負傷者の手当てで手一杯の可能性があるので、出産時に病院が受け入れてくれるのか心配である。
- ・病院にも確認したいが、電話が繋がらない。
- ・しっかりとした食事もとれていないことから、胎児への影響も気になる。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・自治体の災害対策本部、避難所の自治体職員や医師、保健師など、あらゆる手段を通じて、医療機関の受入れの調整を強く申し入れる。
- ・要配慮者として、自治体や関係機関が把握できるよう、自治体の登録システムがあれば、在宅避難者として登録する。
- ・在宅での緊急時の対応に不安がある場合は、避難所に避難し、保健・医療支援が受けられる環境を確保する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ライフラインの停止を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・非常持ち出し品として、母子健康手帳、保険証・診察券、マスクなど感染対策用品、分娩に必要な物品などを準備しておく。
- [共助のポイント]
- ・自治会や自主防災組織において、平時から、個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認や声掛けを行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。

場面 140 生活環境悪化により体調不良になる高齢者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	医療・衛生
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅に大きな被害がなかったことと、高齢者がいるため在宅避難を決意した。
- ・断水のため、トイレが使用できず、携帯トイレでしのいでいる。
- ・入浴もできず、停電も続いており、室温の調整もできない。
- ・生活環境の悪化に伴い、高齢者の持病も悪化してきており、薬も残り少なくなっている。
- ・避難所は入所者で大混雑だと聞くし、福祉避難所はまだ開設されていないようだ。
- ・高齢者の体調が気がかりで、どのように対応するか悩む。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・在宅避難で健康を害す状況では、親戚や知人宅などへの避難や、他に手段がない場合は、車中泊避難、自治体と相談し、広域避難などを検討する。
- ・福祉避難所が開設されていない場合、個別空間の提供と保健・医療の支援が可能な一般避難所への入所を自治体職員と調整する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・ライフラインの停止を想定し、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・自治体が作成する避難行動要支援者名簿に登録しておく。また、個別避難計画を作成しておく。
- ・お薬手帳を含む非常持ち出し品を用意しておく。
- ・かかりつけ医と災害時の連絡方法や、在宅や避難所での対応について話し合っておく。
- [共助のポイント]
- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認や声掛けを行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。

場面 141 人工透析が受けられない透析患者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	医療・衛生
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅に大きな被害がなかったことから、在宅避難を決意した。
- ・週3日の人工透析が欠かせないことから、かかりつけの病院に連絡してみると、血液透析機器が地震で故障したことから、断水も重なり今は透析が行えず、復旧に追われているとのこと。
- ・近場の医療機関も周辺の被災が甚大であり、ライフラインが停止していることから、対応できるところがないように思う。
- ・命にかかわるが、どのように対応していいのか、分からない。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・かかりつけの施設(医療機関)と対応を相談し、対応できる施設の紹介を受ける。
- ・それでも見つからないときは、自治体の災害対策本部、避難所の自治体職員や医師、保健師など、あらゆる手段を通じて、医療機関の受入れの調整を強く申し入れる。
- ・対応可能な施設が見つかった場合で、自ら移動が困難な場合は、周囲に相談して移動の支援を要請する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

📌被害軽減のための事前対策

- ・非常持ち出し品として、人口透析に必要な情報を記載した書類等を常に携行できるようにしておく。
- ・平時から、人工透析が受けられる複数の施設を把握しておく。
- ・施設への移動方法について、家族等と話し合っておく。
- ・かかりつけ医と災害時の連絡方法や、在宅や避難所での対応について話し合っておく。
- ・自治体で作成する避難行動要支援者名簿に登録しておく。また、個別避難計画を作成しておく。
- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認や声掛けを行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。

場面 142 避難所の環境を懸念し、在宅避難を継続する車いす利用者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・身体に障害があり、移動には車いすが欠かせない。自宅でテレビを見ながらくつろいでいる最中に被災した。家具等は固定していたため、負傷せずに済んだ。
- ・自宅は古い木造戸建てであるため、耐震性が気になる。最初の揺れは大丈夫だったが、強い余震が続くと不安である。
- ・本来であれば、立ち退き避難して、避難所に行かないといけなのだろうが、介護ベッドがないと生活が厳しく、この暑さの中で冷房が途絶えると、体温調整も難しい。また、介護資機材はかなりの量になるため、それを持って避難するのは困難である。
- ・自宅が無事でこのまま停電しない限りは、在宅で過ごしたい。停電しないことを祈るばかりだ。

■考慮事項

時刻	-
季節	-
天候	-

🏠取るべき行動

- ・在宅避難の環境が厳しい場合は、自治体に福祉避難所や、バリアフリーなど要配慮者対応が可能な避難所への入所を要請する。
- ・要配慮者として、自治体や関係機関が把握できるよう、自治体の登録システムがあれば、在宅避難者として登録する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
 - ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
 - ・自治体が作成する避難行動要支援者名簿に登録しておく。また、個別避難計画を作成しておく。
- [共助のポイント]
- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認や声掛けを行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。

場面 143 避難所の環境を懸念し、在宅避難を継続する知的障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	被害	避難所環境
------	------	-------	----	-------

- ・地震の後、自宅に大きな被害がなかったが、古い住宅であるため今後の余震のことを考えると心配である。
- ・万が一の倒壊を考え避難所に入所したいが、知的障がいの娘がおり、環境の変化に敏感なことから、慣れない環境で見慣れない避難者に囲まれての避難生活には耐えられないため、在宅避難を決意した。
- ・知的障がいの娘は、地震でかなりショックを受けたのか、興奮気味である。
- ・停電となっているため、娘も不安になると考えられる。
- ・避難所への避難も頭をよぎるが、個室がない場合は、他の避難者の理解が得にくいだろう。

■考慮事項

時刻	－
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・在宅避難の環境が厳しい場合は、自治体の災害対策本部の福祉部門や、巡回してくる保健師や自治会、自治体職員などに、個別空間が確保できる避難所や福祉避難所への避難を要請する。
- ・在宅避難で健康を害す状況では、親戚や知人宅などへの避難や、他に手段がない場合は、車中泊避難、自治体と相談し、広域避難などを検討する。
- ・要配慮者として、自治体や関係機関が把握できるよう、自治体の登録システムがあれば、在宅避難者として登録する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・ヘルプカードなどに連絡先や支援を受けたい内容を記載し、常に携帯しておく。
- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、ヘルプカードの他、持っていると思われる物など、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携帯しておく。
- ・支援者がいる場合は、災害時の連絡方法、支援者不在の時の対応などについて話し合っておく。
- ・自治体が作成する避難行動要支援者名簿に登録しておく。また、個別避難計画を作成しておく。
- ・自治会などの防災訓練への参加などを通じて、避難場所や避難方法の把握に努めるとともに、近所や支援者などに助けが求められる関係を構築しておく。

〔共助のポイント〕

- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認や声掛けを行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。

場面 144 避難所の環境を懸念し、在宅避難を継続する精神障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅に大きな被害がなかったが、古い住宅であるため、今後の余震のことを考えると心配である。
- ・万が一の倒壊を考え、避難所に入所したいが、服薬が欠かせない精神障がい者の家族がおり、避難所での共同生活や障がい者への配慮に不安があるため、在宅避難を決意した。
- ・ライフラインが停止し、携帯電話も通じない中、自宅で3日間過ごした。精神障がいの家族は、生活環境の変化にストレスが日々蓄積し、症状は悪化しているようだ。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・在宅避難の環境が厳しい場合は、自治体の災害対策本部の福祉部門や、巡回してくる保健師や自治会、自治体職員などに、個別空間が確保できる避難所や福祉避難所への避難を要請する。
- ・在宅避難で健康を害す状況では、親戚や知人宅などへの避難や、他に手段がない場合は、車中泊避難、自治体と相談し、広域避難などを検討する。
- ・要配慮者として、自治体や関係機関が把握できるよう、自治体の登録システムがあれば、在宅避難者として登録する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
 - ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
 - ・かかりつけ医と災害時の連絡方法や、在宅や避難所での対応について話し合っておく。
 - ・自治体が作成する避難行動要支援者名簿に登録しておく。また、個別避難計画を作成しておく。
- [共助のポイント]
- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認や声掛けを行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。

場面 145 アレルギー対応の食材不足により苦慮するアレルギー患者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	医療・衛生
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震で身の安全は確保できたが、自宅の損傷が激しく倒壊の恐れがあるため、避難所に避難してきた。
- ・食品アレルギーが強く、アレルギー対応食品も備蓄していたが、自宅の損傷が激しく、持ち出すことができなかった。
- ・翌朝になると非常食の配布があったが、食品アレルギーのため、食べることができなかった。
- ・避難所スタッフに食品アレルギーを避けるため、原材料を聞いたが、誰も詳しくは分からなかった。
- ・数日経ってもアレルギー対応の食事は望めなかったことから、見た目で原材料が判明する食材を中心に食べるしかない。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・命にかかわる可能性のある要配慮事項については、同じ環境にある方がいれば協力し、避難所の運営スタッフや自治体の職員に強く要請する。
- ・容器包装に入った食品の食品表示を確認し、飲食可能な食品を優先して配付してもらうよう運営スタッフに依頼する。
- ・アレルギー対応については、避難所スタッフや巡回している保健師や医師などに相談する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

☞被害軽減のための事前対策

- ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・アレルギー対応食品を多めに備蓄し、非常持ち出し品として携行できるようにしておく。
- ・避難所運営も含めた自主防災活動に積極的に参加し、女性、子供、障がい者等の要配慮者の立場から、避難所の運営改善を提案していく。

場面 146 衛生環境の悪化によりアトピー性皮膚炎が悪化するアトピー患者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	医療・衛生
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震で身の安全は確保できたが、自宅の損傷が激しく倒壊の恐れがあるため、避難所に避難してきた。
- ・アトピー性皮膚炎が重く、塗り薬也多めに処方されているが、自宅は倒壊の危険があるため、使いかけの数日分しか持ち出せなかった。
- ・避難所では周囲の目線が気になり、薬を塗るにも気を使う状況だ。
- ・入浴もできず地震から3日目、持病のアトピー性皮膚炎が悪化してきた。
- ・病院で塗り薬を処方してもらいたいが、この状況だと病院も負傷者の手当てで手一杯の可能性があるので、対応してくれるのか心配である。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・可能であれば、避難所運営に積極的に関わり、避難所スタッフや自治体の職員に段ボールなどの間仕切りによる個別空間を確保できる体制の早期の導入、女性や要配慮者への配慮などを強く提案する。
- ・医薬品の確保や医療支援について、避難所スタッフや巡回している保健師や医師などに相談する。
- ・自宅を離れる際は、可能な限り電気器具のプラグを抜き、ブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて離れる。

☞被害軽減のための事前対策

- ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・健康維持に欠かせない医薬品は、非常持ち出し品として携行できるようにしておく。
- ・日頃からかかりつけ医などの関係者と災害時の対応について、話し合っておく。
- ・避難所運営も含めた自主防災活動に積極的に参加し、女性、子供、障がい者等の要配慮者の立場から、避難所の運営改善を提案していく。

場面 147 一時滞在施設で3日目、持病の薬が切れる高齢者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	医療・衛生
------	------	-------	---	----	-------

- ・持病を抱えた高齢者が1人で遠方に外出している最中に被災した。
- ・最寄り駅まで歩いて来たが、列車が動かないため、帰宅困難者を受け入れている一時滞在施設に滞在することとした。
- ・施設では水、食料が配布されたため、落ち着くことが出来た。明日の列車の再開を期待し休んだ。
- ・施設で3日目を迎えたが、列車が再開する見込みはまだ立っていない。
- ・水と食料はあるが、持病の薬は間もなく切れそうであり、何日も薬が切れると心配である。
- ・電気も復旧しないことから、極寒のこの時期では、配布される毛布一枚では厳しい。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・一時滞在施設のスタッフや自治体職員に、医薬品の確保を要請する。
- ・帰宅が困難で、一時滞在が長引く可能性がある場合は、生活環境の整った避難所への入所をスタッフ等と調整する。
- ・体調悪化が懸念される場合は、医療機関の受診や福祉避難所などへの移動を要請する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・万が一の場合に備え、常にカバンやリュックの中に、必要最小限のグッズを入れた防災ポーチを携行しておく。
- ・外出時は、緊急避難や徒歩帰宅に備え、可能な限り両手があくリュックを利用し、歩きやすい靴を履いておく。また、会社などにリュックや歩きやすい靴を備えておくことも有効である。
- ・健康維持に欠かせない持病の薬は、非常持ち出し品として携行できるようにしておく。
- ・外出中の災害時の対応について、家族やかかりつけ医などと相談しておく。

場面 148 トイレを我慢し、体調不良になる視覚障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	医療・衛生
------	------	-------	---	----	-------

- ・重度の視覚障がいがある女性で、ほとんど見えない。
- ・発災時、一人住みの賃貸アパートで何とか難を逃れたが、建物が倒壊する危険があるため避難を促され、支援者の助けもあり、避難所に入所することが出来た。
- ・福祉避難所に入所したいが、開設が遅れているため、一般避難所で我慢するしかない。
- ・トイレに近い場所を希望したが、要配慮者向けの間仕切りで区切られたスペースはトイレから離れている。
- ・普段とは違う環境のため一人でトイレに行くことが難しく、声をかけると女性スタッフが付き添ってくれるが、躊躇してしまう。
- ・夜間のトイレを回避するため、いつしか飲食を控えるようになった。
- ・暑さも気になる時期だが水分も控えているが、体も強い方ではないので、全身の倦怠感と下腹部の痛みがでてきた。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・避難所のスタッフや自治体の職員に、トイレへの移動に支障がある障がい者等はトイレに近い場所に配置すること、点字による案内を設置すること等を強く申し入れる。
- ・トイレの利用回数を減らすための飲食制限は、体調悪化につながることから止め、トイレが必要な時はスタッフに支援を求める。
- ・親戚や知人宅などへの避難や、他に手段がない場合は、車中泊避難、自治体と相談し、広域避難などを検討する。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
 - ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
 - ・体調不良を防止するため、こまめに水分補給や適度な運動を行うとともに、歯みがき、手洗い、うがいによる口腔内のケアを行う。
 - ・支援者がいれば、災害時の避難について話し合っておき、可能であれば支援者の協力を得て、避難所運営マニュアル等に要配慮者の専用スペースの設置と配慮等を位置付けるよう提案する。
- [共助のポイント]
- ・声を掛けるときは近寄って、「向こう」「こっち」ではなく「前」「右」と具体的に伝える。誘導するときは、腕や肩につかまってもらう。
 - ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認や声掛けを行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。

場面 149 バリアフリー対応の応急仮設住宅の確保に苦慮する身体障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	避難所不足等
------	------	-------	---	----	--------

- ・身体に障がいがあり車いすが欠かせない。
- ・地震発生前から一人住まいで、地震の揺れによる自宅の被害が大きく、応急危険度判定で建築物全体に著しい傾斜があると注記されていたため、支援者の助けを借りて避難所に入所し、2 か月が経過した。
- ・入所当初は避難所運営も混乱していたが、福祉関連のボランティアなども入ってきて、個別スペースも確保でき、入浴など生活支援も受けられるようになった。
- ・一方で、避難所もいずれ閉鎖となるため、住まいを探さなければならない。
- ・自治体の説明では、建設型応急住宅や賃貸型応急住宅には条件が合えば入居できるとのことだったので、ここ数週間、検討しているが、難航している。
- ・建設型応急住宅でバリアフリー対応のものは数が少なく入居の見込みが立っていない。
- ・また、賃貸型応急住宅も探しているが、バリアフリー対応のところは家賃が高く、公的支援の条件に合わない。
- ・支援団体も相談にのってくれているが、公的支援は法律に基づくもので、融通は利かなく、基準を超える家賃は自己負担を覚悟したが、それも認められない制度のようだ。
- ・時間が経過するに従い、焦りが募っていく。

■考慮事項

時刻	-
季節	-
天候	-

🏠取るべき行動

- ・復旧・復興段階になると自治体の相談体制も整ってくるため、バリアフリー対応の建設型応急住宅の住戸数を増やすことやバリアフリー対応の賃貸型応急住宅を探すことも含めた住宅の確保について、粘り強く相談する。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。

場面 150 認知症の高齢者を連れて避難

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	避難所環境
- 地震の後、自宅に大きな被害がなかったが、古い住宅であるため、今後の余震のことを考えると心配である。 - 自宅の倒壊が心配であるが、認知症の家族もいるため、在宅避難を決意した。 - ライフラインが停止している中、自宅で3日間過ごしたが、限界を感じた。 - 母親の介護もあるため、福祉避難所に避難しようと自治体に問合せたが、開設の見通しが立っていないことから、一般の避難所を案内された。 - 避難所での生活を開始すると、大人用のオムツの備蓄がないことが判明した。 - 当面、自宅から持ち出した数枚のオムツで対応するしかない。 - 仕事も再開しないといけませんが、普段利用しているデイサービスの再開の見通しが立っていない。 - 一般の避難所での長期間の生活は厳しいことから、福祉避難所のようなサービスが整った避難所の開設が切望される。					

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- 必要な物資については、避難所のスタッフや自治体の職員に支援を申し出る。なお、自宅エリアに物資を取りに戻る場合には、災害状況の情報をもとに慎重に判断する。
- 高齢者の健康状態については、懸念があれば巡回に来る保健師や医師に相談する。
- 避難所の環境が厳しい場合は、より良い環境への移動を申し出る。
- 親戚や知人宅などへの避難や、他に手段がない場合は、車中泊避難、自治体と相談し、広域避難などを検討する。

🏠被害軽減のための事前対策

- 災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資のなどの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- 自主防災組織や自治会の訓練などに参加し、災害時に助け合う、顔の見える関係づくりに努める。
- 支援者やかかりつけ医などと、災害時の連絡方法や、支援者不在時の対応などを相談しておく。

場面 151 避難所に避難した女性

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅が倒壊したことから、母娘の二人で避難所に避難してきた。
- ・避難所の周辺地域が大きな被害を受けたことから、避難所となっている体育館は避難者でごった返しており、ゆっくり休むスペースを確保することが出来ない。
- ・寝ようとしても隣の人の視線が気になり、仕切りもないことから、着替えをすることもできない。
- ・避難所運営スタッフに、男女別の更衣室などの設置をお願いしたところ、空き教室の使用を提案されたが、教室は鍵もかからず、廊下から中が見えてしまう状態であった。
- ・地震から4日目、物資の配送がされ、女性用の下着や生理用品も届いていたが、配布場所には男性スタッフしかいないため、貰いにくい。
- ・手洗いで下着等を洗濯しているが、女性用の物を干す場所にも困る。
- ・他の避難所で夜間の性被害や窃盗等の噂が耳に入ってくる。
- ・夜間の外のトイレの利用も含めて、避難所生活には不安が募る。

■考慮事項

時刻	夜：防犯のリスクがある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・可能であれば、避難所運営に積極的にに関わり、避難所スタッフや自治体の職員に段ボールなどの間仕切りによる個別空間を確保できる体制の早期の導入、女性や要配慮者への配慮などを強く提案する。
- ・トイレは周囲の女性にも声を掛け、複数で利用するなど、防犯に配慮する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・避難所運営も含めた自主防災活動に積極的に参加し、女性、子供、障がい者等の要配慮者の立場から、避難所の運営改善を提案していく。

場面 152 盲導犬とともに避難した視覚障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	避難所環境
- 地震の後、自宅内を手で確認したところ、色々な物が散乱しており、頭の中にある自宅の配置と全く異なってしまったが、自身と盲導犬が無事であることは分かった。 - 自宅は古い住宅であり、自宅の詳しい損傷が分からないことから、万が一の倒壊を考え、盲導犬と共に避難所に向かう決意をした。 - 避難所に到着すると、避難所スタッフと思われる人に盲導犬連れでの避難を伝えたが、盲導犬との同伴避難に理解がなく、案内まで時間がかかると言われた。 - 案内を待っている最中、「なんで避難所に犬がいるんだ」と大声で怒鳴る声が聞こえた。 - 犬の排泄の世話もあるので、他の避難者とスペースを分けてくれるよう避難所スタッフに申入れると、周りの状況は分からないが、個室のようなスペースに案内されたことから、ようやく落ち着くことができた。 - 翌朝から食料の配布も始まったが、ペット用の食料はまだなく、人間用の食料を与えるしかなかった。					

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- 盲導犬等の補助犬の同伴は法に基づく措置、権利であることを避難所のスタッフを通じて周知してもらう。
- 自身のことや連絡先を記したヘルプカードなどを周囲に見せて、必要な支援を求める。

🏠被害軽減のための事前対策

- 災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- 避難所運営も含めた自主防災活動に積極的に参加し、女性、子供、障がい者等の要配慮者の立場から、避難所の運営改善を提案していく。
- ヘルプカードを非常持ち出し品とともに携行できるようにしておく。
- 自治会などの防災訓練などを通じて、災害時に支援が得られる関係を構築しておく。
- 自治体で作成する避難行動要支援者名簿に登録しておく。また、個別避難計画を作成しておく。

[共助のポイント]

- 自治会や自主防災組織において、平時から、個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認や声掛けを行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。

場面 153 避難所での生活に困惑する知的障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅の損傷が大きいことから、知的障がいを持つ家族と共に避難所に避難してきた。
- ・避難所の周辺地域が大きな被害を受けたことから、避難所となっている体育館は沢山の避難者で溢れていた。
- ・避難所スタッフから専用のスペースを案内されたが、他の避難者と同じ大部屋の一角だ。
- ・普段とあまりにも違う環境で、知的障がいの家族は情緒不安定でパニックになりかけている。
- ・避難所の生活に不安が募る。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・避難所のスタッフや自治体の職員に、家族だけの個別空間が確保できるよう要請する。
- ・避難所での避難に耐えられないと判断した場合は、巡回してくる保健師などに、福祉避難所など障がい者が落ち着ける場所への移動を要請する。
- ・親戚や知人宅などへの縁故避難、自治体に相談し、広域避難などを検討する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
 - ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
 - ・避難所運営も含めた自主防災活動に積極的に参加し、女性、子供、障がい者等の要配慮者の立場から、避難所の運営改善を提案していく。
 - ・ヘルプカードを非常持ち出し品とともに携行できるようにしておく。
 - ・自治会などの防災訓練などを通じて、災害時に支援が受けられる関係を構築しておく。
 - ・自治体が作成する避難行動要支援者名簿に登録しておく。また、個別避難計画を作成しておく。
- [共助のポイント]
- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認や声掛けを行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく

場面 154 乳幼児連れで避難

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅が倒壊したことから、乳幼児を連れて避難所に避難してきた。
- ・避難所の周辺地域が大きな被害を受けたことから、避難所となっている体育館は避難者でごった返している。
- ・何とか避難所である体育館の一角に居場所を確保したが、子どもは空腹のために泣き続け、泣き声が体育館に響いている。
- ・避難所スタッフに授乳スペースはあるかと問い合わせたが、専用スペースはないため、必要であれば空き教室を利用してほしいと言われた。
- ・空き教室に向かうと、一般的な教室であったため、ドアや廊下からも中が見える状態であった。
- ・カーテンに隠れ授乳を行ったが、その後も泣き声と授乳が気になり、一睡もできない。
- ・地震から3日経っても、物流が止まったままであり、行政などからの追加の物資配布はなく、生活環境が改善されない。
- ・避難所にはオムツの備蓄はなく、持ってきたオムツもそろそろなくなりそうである。
- ・今後の状況に不安が募る。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・避難所のスタッフや自治体の職員に、女性や乳幼児に配慮した避難所の環境改善を、避難所の運営スタッフに要請する。
- ・避難所での避難に耐えられないと判断した場合は、巡回してくる保健師などに、福祉避難所など乳幼児連れで安心して生活できる場所への移動を要請する。
- ・親戚や知人宅などへの縁故避難、自治体に相談し、広域避難などを検討する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
 - ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
 - ・避難所運営も含めた自主防災活動に積極的に参加し、女性、子供、障がい者等の要配慮者の立場から、避難所の運営改善を提案していく。
- 〔共助のポイント〕
- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認や声掛けを行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。

場面 155 避難所での生活に困惑する視覚障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅は倒壊していないものの、余震による被害が心配であったことから、避難所に避難してきた。
- ・避難所となっている体育館は避難者でごった返しているようで、白杖を使用しての歩行に気を遣う。
- ・避難所スタッフと思われる人から、物資の配布やトイレの使用に関してのアナウンスは聞こえたが、場所が分からない。
- ・トイレまでの導線は確保されておらず、避難者を避けながら歩行する必要があるそうだが、毎回、近くの人にトイレまでの同行をお願いするのは気が引ける。
- ・翌日、食事の配布のアナウンスがあったが、配布場所が分からず、出遅れてしまった。
- ・日々、避難所内のレイアウトは変化し、ルールも文字情報での伝達が多いことから、把握ができないことが多くあった。
- ・毎回、避難所スタッフに尋ねることも気を遣う。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・避難所のスタッフや自治体の職員に、トイレへの移動に支障がある障がい者等はトイレに近い場所に配置すること、点字による案内を設置すること等を強く申し入れる。
- ・物資や食事の提供などの重要な情報は、音声でも伝えるよう要請する。
- ・親戚や知人宅などへの避難や、他に手段がない場合は、自治体と相談し、広域避難などを検討する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資のなどの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
 - ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
 - ・支援者がいれば、災害時の避難について話し合っておき、可能であれば支援者の協力を得て、避難所運営マニュアル等に要配慮者の専用スペースの設置と配慮等を位置付けるよう提案する。
- 〔共助のポイント〕
- ・声を掛けるときは近寄って、「向こう」「こっち」ではなく「前」「右」と具体的に伝える。誘導するときには、腕や肩につかまってもらう。
 - ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認や声掛けを行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。

場面 156 避難所での生活に困惑する聴覚障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅は倒壊していないものの、余震による被害が心配であったことから、避難所に避難してきた。
- ・避難所となっている体育館は避難者でごった返しており、避難所スタッフと思われる人が、何かを指示していたが分からなかった。
- ・空いているスペースで避難していると、避難所スタッフが近寄ってきて、怒った様子で何かを言ってきたが分からない。
- ・自身の障がいを伝えて、何とか理解してもらったが、避難するスペースを間違えたようであった。
- ・翌日、避難所内に長蛇の行列が出来ていたため、様子を見てみると食事の配布の行列であったが、音声のみのアナウンスであったため、並ぶのに出遅れてしまった。
- ・避難所での避難も3日経ったが、日々、避難所内のルールは変化し、音声での伝達では把握ができないことが多くあった。
- ・毎回、避難所スタッフに尋ねることも気を遣うため、聴覚障がい者情報提供施設と連携し、障がいに配慮した情報提供や避難生活の提供が望まれる。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・避難所のスタッフや自治体の職員に、口頭だけの説明ではなく、文字情報でも伝えてくれるよう避難所の運営スタッフに要請する。
- ・口頭だけの説明に気付いたときは、ヘルプカードを提示し、説明や支援を求める。

☞被害軽減のための事前対策

- ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・ヘルプカードを非常持ち出し品とともに携行できるようにしておく。
- ・自治会などの防災訓練などを通じて、災害時に支援が得られる関係を構築しておく。
- ・自治体で作成する避難行動要支援者名簿に登録しておく。また、個別避難計画を作成しておく。

[共助のポイント]

- ・手話がわからない場合もあるため、絵や図、身振りなどで伝える。
- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認や声掛けを行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。

場面 157 避難所での生活に困惑する精神障がい者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅の損傷が激しいことから、精神障がいのある家族とともに避難所に避難してきた。
- ・避難所の周辺地域が大きな被害を受けたことから、避難所となっている体育館は避難者でごった返しており、受付もあるが避難者の対応に手が回っていないようである。
- ・精神障がいがあるので落ち着ける場所が良い旨伝えたが、一般の避難者と同じ部屋の間仕切りもない一画に案内された。
- ・初日はなんとか過ごせたが、2日目になると、障害のある家族は、環境の変化がありすぎて、不安が大きくなり、幻覚や妄想でパニック気味になってしまった。
- ・避難所の運営体制もまだ固まっておらず、ばたばたしている感じで、要望も伝えにくい雰囲気、症状の悪化にどう対応するか悩む。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・避難所のスタッフや自治体の職員に、落ち着ける個別空間の提供や間仕切りや衝立などの設置を要請する。
- ・避難所での避難に耐えられないと判断した場合は、巡回してくる保健師などに、福祉避難所など障がい者が落ち着ける場所への移動を要請する。
- ・症状が切迫している場合は、医師や医療機関の支援を要請する。
- ・親戚や知人宅などへの縁故避難、自治体に相談し、広域避難などを検討する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低3日分(推奨7日分)の飲料水(1人1日3リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
- ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
- ・かかりつけ医や支援者と、災害時の連絡方法、支援者がいない場合の対応などについて話し合っておく。
- ・自治体が作成する避難行動要支援者名簿に登録しておく。また、個別避難計画を作成しておく。
- [共助のポイント]
- ・自治会や自主防災組織において、平時から、個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認や声掛けを行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。

場面 158 避難所での生活に困惑する車いす利用者

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・地震の後、自宅は倒壊していないものの、余震による被害が心配であったことから避難所に避難してきた。
- ・避難所となっている体育館は避難者でごった返していたが、何とか車いす 1 台分の空きスペースを確保することができた。
- ・トイレまでの導線は確保されておらず、避難者に避けてもらいながら通行する必要があるが、お願いするのは気が引ける。
- ・移動するスペースがないことから、一晩中、車いすで過ごしたが寝付けなかったため体中が痛い。
- ・翌日、避難所内を見て回ったが、体育館以外へ行くには段差があるため介助が必要となる。
- ・ここでの長期間の避難生活は厳しそうである。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・避難所のスタッフや自治体の職員に段差のない、出入りやトイレの移動が楽な場所への配置と、車いすが通れる動線の確保を要請する。
- ・バリアフリーのトイレがない場合は、具体的な改善を直ちに要請する。
- ・避難所での避難に耐えられないと判断した場合は、巡回してくる保健師などに、福祉避難所など障がい者が落ち着ける場所への移動を要請する。

📌被害軽減のための事前対策

- ・災害時の在宅避難を想定し、自宅の耐震化を行うとともに、最低 3 日分(推奨 7 日分)の飲料水(1 人 1 日 3 リットル)、食料、携帯トイレ、カセットコンロ、ライト、医薬品、マスク、生活に必要な物資などの備蓄や非常持ち出し品の用意をしておく。
 - ※孤立が想定される地域や高層マンション、在宅での避難が可能な世帯については、在宅避難の長期化を念頭に少しでも多くの備蓄に努める。
 - ・自治体が作成する避難行動要支援者名簿に登録しておく。また、個別避難計画を作成しておく。
- [共助のポイント]
- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認や声掛けを行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。

場面 159 グループホームの軽度の知的障がい者が避難所に避難

主体区分	要配慮者	場所の特徴	被害	避難所環境
------	------	-------	----	-------

- ・夜間に突然の激しい揺れ、経験したことのない揺れだが、訓練でやっていたように頭を守ってじっとしていた。
- ・揺れが収まりホームの入所者は、興奮した様子で食堂に集まってきた。
- ・ほどなく停電になり、大騒ぎになったが、誰かが懐中電灯を見つけて少し落ち着いた。
- ・夜間は支援者がいないため、懐中電灯を頼りに、近くの公民館に行こうということになった。
- ・公民館に到着すると、既に避難者で溢れているようであった。
- ・入り口で迷っているとスタッフらしい人が来て、自分たちの様子を見ながら、ここは満杯なので、指定避難所になっている●●小学校に行くように言われた。
- ・その場所は誰も分からず、ただ困惑して立ちつくすだけだ。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

🏠取るべき行動

- ・グループホームの居住者であることを周囲に伝え、家族やホームの管理者に連絡してもらうとともに、公民館への滞在か小学校までの誘導の協力を求める。

🏠被害軽減のための事前対策

- ・家族や支援者、ホームの管理者と、支援者不在時に災害が発生した場合の対応を話し合っておく。
 - ・ホームでの防災訓練、地域の防災訓練などを通じて、避難場所の確認を行っておくとともに、災害時に支援が得られる協力関係を作っておく。
- [共助のポイント]
- ・自治会や自主防災組織において、平時から個人情報に配慮したうえで、要配慮者の世帯の情報を共有し、災害時には積極的に安否確認や声掛けを行い、連携して避難を支援できる体制を検討しておく。

場面 160 海外から観光で来ていた外国人

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	------	-------	---	----	-------

- ・ 駅で途方に暮れていたら、親切な方が避難所に案内をしてくれた。
- ・ インターネットやメールが使えず、情報がないことから、状況が理解できない。
- ・ 避難所での情報は、日本語中心で理解が難しいが、〇〇語が話せるスタッフによれば、地震は関東一円で被害が大きく、鉄道や道路の被害が大きく、復旧は見通せないようだ。遠方の空港も被害が出ていて発着は中断しているとのこと。
- ・ 関東から出て、可能なら旅行を続けたいが、交通手段がなく、不安が募る一方だ。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・ 言葉が通じるスタッフを探し出し、意思疎通を図る。
- ・ 支援が必要な事項をカード等を書き、要望を理解してもらうように努める。
- ・ 必要に応じて、自治体が設置する災害多言語支援センターを活用し、災害に関する情報の入手や相談に乗ってもらう。

☞被害軽減のための事前対策

- ・ 各種外国語パンフレットなどで災害時の行動に関する予備知識の確認に努める。
- ・ 災害の状況や駐日外国公館の連絡先、交通機関の状況などの情報を把握する方法を確認しておく。
- ・ 外国語に対応した災害アプリや音声翻訳アプリをダウンロードしておく。

場面 161 罹災証明の取得に苦慮する外国籍県民

主体区分	要配慮者	場所の特徴	-	被害	その他
------	------	-------	---	----	-----

- ・自宅が住めない状態になり、避難所での生活も1か月が過ぎた。
- ・日本語が十分ではないため、当初は避難所で情報が得られなかったが、時間の経過で英語の情報も増え、スマートフォンの回線も普段どおりとなり、状況は分かってきたが、就労先の再開の目途は立っていない。
- ・住居をどうするか不安だったが、応急仮設住宅が提供される制度があることを知った。先日、役所に相談に行ったが、窓口は多くの被災者でごった返しており、案内も日本語ばかりで苦労したが、何とか、英語が多少できるスタッフに相談でき、概略が分かった。
- ・まずは、被災家屋の調査が必要ということで、申込みを行い、本日、指定された時間に、立ち会ってきた。
- ・今後、改めて自治体で罹災証明を取得することで、応急仮設住宅の申請が可能となるらしい。
- ・自宅は住める状況ではないと思うので、支援は受けられると思うが不安は募る。
- ・何より、日本語が十分でないため、窓口の申請1つとっても負担であり、今後の流れを想像するとうんざりしてくる。

■考慮事項

時刻	-
季節	-
天候	-

☞取るべき行動

- ・県の多言語支援センター等を通じて支援を求める。
- ・窓口で言語が障がいになる場合は、身振り、筆談等で支援を求める。

☞被害軽減のための事前対策

- ・外国語に対応した災害アプリや音声翻訳アプリをダウンロードしておく。
- ・各種外国語パンフレットなどで災害時の行動に関する予備知識の習得に努める。

場面 162 展示フロアがある自社ビルが被災した会社

主体区分	その他	場所の特徴	一般地域	被害	揺れによる被害
------	-----	-------	------	----	---------

- ・業務中に突然の強い揺れが襲い、10 階建ての自社ビルは隣接する建物とぶつかるかと思うほど激しく揺れた。
- ・揺れの後、各フロアの被害状況を確認すると、上層階で棚の下敷きや転倒等による負傷者が数名出た。
- ・1 階にある展示フロアでは、スタッフが声を掛け、利用者にその場で安全確保行動をとってもらったため、負傷者は発生しなかった。
- ・しばらく、テレビや携帯電話で地震の情報収集をしていると、列車は全線ストップし、再開の見通しが立っていないとの情報を見つけた。
- ・公共交通機関が停止している中、利用者や従業員の安全をどう確保するか、判断に迷う。

■考慮事項

時刻	昼：利用者が多い可能性があることから、多くの人が被災し、帰宅困難になるリスクが高い。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・消防計画やBCP 等に基づき、負傷者の応急手当と医療機関への搬送を行うとともに、建物の耐震性に問題なく、被災状況も軽易であれば、事務所に留めることを基本に、従業員の帰宅判断、利用者の避難所への誘導などを行う。

📌被害軽減のための事前対策

- ・建物の耐震対策と従業員や利用客が滞在するための備蓄、ハザードマップでの事務所周辺のリスクと避難場所等の確認などを行う。
- ・消防法の防火/防災管理者の設置義務がある事業所は、消防計画や法令の規定に基づき、また、法の対象外の施設においても、独自に従業員や施設の利用者の避難や安全確保の計画やマニュアルを策定しておく。
- ・計画等の策定検討にあっては、会社内に待機する場合及び立ち退き避難する場合の条件及び方法について検討、整理しておく。
- ・BCP の中で、交通機関停止時の従業員の帰宅・出社の考え方を整理しておく。
- ・計画に基づく訓練を定期的の実施し、避難経路と避難誘導體制、初期消火体制等の確認と習熟に努める。

場面 163 交通機関の停止により、生徒が帰宅困難になった高校

主体区分	その他	場所の特徴	一般地域	被害	帰宅困難
------	-----	-------	------	----	------

- ・教室で生徒が帰宅の支度をしている最中に突然、激しい揺れに襲われた。
- ・揺れの後、生徒の安否を確認すると、負傷者はいなかった。
- ・生徒全員を体育館に集合させ、教員で地震の情報収集をしていると、列車は全線ストップし、再開の見通しが立っていないとの情報を見つけた。
- ・生徒のほとんどが列車を利用して通学していることから、帰宅困難となる。
- ・生徒の生命・身体安全確保ができない限り、生徒を校内に留めるが、帰宅困難の長期化も踏まえて、対応を考える必要がある。

■考慮事項

時刻	－
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・生徒を校内の安全な場所で待機させる。
- ・待機にあたり、不足する物資等がある場合は、自治体又は最寄りの避難所に状況を説明し、生徒の一時滞在に必要な物資等を調達する。
- ・あらゆる手段を活用し、保護者との連絡を試みる。

☞被害軽減のための事前対策

- ・防災マニュアル等で、帰宅困難時の対応を確認しておく。

場面 164 交通機関の停止により、社員が帰宅困難になった会社

主体区分	その他	場所の特徴	一般地域	被害	帰宅困難
------	-----	-------	------	----	------

- ・突然、会社のオフィスのビルがゆっくりと揺れ始め、静観していると周囲の携帯電話から緊急地震速報のアラートが鳴り響いた。
- ・揺れの後、フロアの状況を確認すると書類や物が散乱していたが、負傷者は発生しなかった。
- ・テレビ報道によれば関東一円が被災しており、鉄道は概ね停止し再開の見込みはなく、道路も通行可能なところは少ないようだ。
- ・業務継続はできず、従業員には待機を指示したが、社内には障がい者も含め、社員が 100 名以上いる。建物は古く、強い余震が続くと社内での待機には不安が残る。
- ・水、食料の備蓄は 2 日分程度で、長期の待機は不可能である。
- ・従業員は、家族の安否を気遣う者が多くいることから、帰れる者は自力で帰宅するよう指示するしかない。遠方に住んでいる者や障がい者の対応をどうするか、検討しなければならない。

■考慮事項

時刻	－
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📌取るべき行動

- ・要配慮者については、受入れ環境のある避難所や、福祉避難所への入所を調整する。
- ・建物に不安がある場合は、避難所への入所等を調整し、避難所運営に積極的に参画するよう努める。

📌被害軽減のための事前対策

- ・建物の耐震対策と従業員や利用客が滞在するための備蓄、ハザードマップでの事務所周辺のリスクと避難場所等の確認などを行う。
- ・消防法の防火/防災管理者の設置義務がある事業所は、消防計画や法令の規定に基づき、また、法の対象外の施設においても、独自に従業員や施設の利用者の避難や安全確保の計画やマニュアルを策定しておく。
- ・計画等の策定検討にあっては、会社内に待機する場合及び立ち退き避難する場合の条件及び方法について検討、整理しておく。
- ・BCP の中で、交通機関停止時の従業員の帰宅・出社の考え方を整理しておく。
- ・計画に基づく訓練を定期的実施し、避難経路と避難誘導體制、初期消火体制等の確認と習熟に努める。

場面 165 ライフラインが停止した医療機関

主体区分	その他	場所の特徴	一般地域	被害	ライフライン停止
------	-----	-------	------	----	----------

- ・スタッフステーションでの朝の申し送り中に、激しい揺れが襲った。すぐさま安全確保行動を取り、揺れが収まった後にスタッフが手分けをして、各病室の安否確認を行った。
- ・幸いにして、負傷者は発生せずに済んだが、安否確認の最中に停電が発生し、しばらくして再び照明がついた。恐らく自家発電に切り替わったのだと思われる。
- ・自家発電は 1 日しか持たない。また、断水となったので貯水槽が尽きると使用できる水がないことが分かった。
- ・電源が尽き、医療装置が稼働できなくなると命に係わる患者もあり、電源と給水の確保が急務だ。
- ・入院患者は転院させたいが、県全域が激しい被害を受けていると思われるため、転院先も移送手段の確保も難しいだろう。

■考慮事項

時刻	－
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・EMIS（広域災害救急医療情報システム）の入力を速やかに行うなど被災状況を共有する。
- ・自家発電の燃料の確保や市町村に給水の要請を行う等のライフラインの確保に努めるとともに、不急な治療や検査の休止等を検討して、使用資源の抑制を行い病院の機能維持に努める。
- ・入院患者の安全を確保できない場合には、転院調整について速やかに関係機関に相談するとともに、移動手段、転院先の確保等に努める。
- ・在宅での療養が可能な患者、福祉避難所での対応が可能な患者、転院が必要な患者等の優先度を明確にする。

☞被害軽減のための事前対策

- ・自治体のハザードマップを活用し、起こり得る災害リスクを把握し、避難路、避難場所の確認を行うとともに、BCP やマニュアル等に基づく訓練を実施する。
- ・BCP を策定し、電源や水の確保対策を検討しておく。
- ・災害時のライフライン等の支援を受けるために必要な情報について、EMIS の基本情報等の入力を更新しておく。

場面 166 園児の引き渡しに時間がかかっている保育園

主体区分	その他	場所の特徴	一般地域	被害	その他被害
------	-----	-------	------	----	-------

- ・園児の昼食中に激しい地震が発生し、食事や遊具等が散乱したものの、幸い園内に負傷者は出なかったが、建物の損傷が酷い。
- ・恐ろしさで泣き叫ぶ児童を落ち着かせた後、周囲の状況確認や保護者との連絡を試みると、停電と断水が発生しており、電話もメールも繋がらないことから、保護者に連絡が取れない。
- ・近所に住む複数の保護者が子どもを迎えに来たため、引き渡しカードを確認し、引き渡しを行った。共働きの家庭が多いことから、引き渡しにはかなり時間がかかりそうである。
- ・余震で建物が心配の中、長時間の園児の保護に備え、暖房器具、飲料水や食事、生活必需品、携帯トイレ等の準備を行ったが、今後の対応について不安が募る。

■考慮事項

時刻	－
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・近くの避難所に物資や暖房器具の支援を求め、ライフラインの被災等、園内の環境が厳しい場合は、避難所への避難も検討する。
- ・避難所へ避難する場合は、保育園に引取りに来た保護者に向けて、避難場所を掲示で知らせる。

☞被害軽減のための事前対策

- ・園内の棚等の固定、机等の転倒防止対策、照明等の落下防止対策を行う。
- ・ハザードマップで、保育園の周辺にどのような危険があるのか、災害の種類に応じて、どのようなルートで、どこに避難するかを確認し、関係者全員で共有する。
- ・消防法の防火/防災管理者の設置義務がある事業所は、消防計画や法令の規定に基づき、また、法の対象外の施設においても、独自に従業員や施設の利用者の避難や安全確保の計画やマニュアルを策定しておく。
- ・計画等の策定検討にあっては、園内に待機する場合及び立ち退き避難する場合の条件及び方法について検討、整理しておく。
- ・計画に基づく訓練を定期的に実施し、避難経路と避難誘導體制、初期消火体制等の確認と習熟に努める。

場面 167 津波が迫る会社

主体区分	その他	場所の特徴	津波浸水危険地域	被害	津波
------	-----	-------	----------	----	----

- ・突然、周囲の携帯電話から緊急地震速報のアラートが鳴り響き、会社のオフィスビルが激しく揺れた。
- ・周囲では、同僚が机の下に隠れろと叫んでいる。
- ・夢中で机の下にしがみつくと、テーブルやイス、コピー機が大きく動くのが見えた。
- ・揺れの後、従業員の安否確認をしている最中に津波からの避難を呼びかける緊急速報メールのアラートが鳴り響いた。
- ・自社ビルは沿岸部にあるため、従業員には屋上に避難するよう呼びかけた。
- ・全員が屋上へ避難したが、かなり大きな揺れであったため、想定外のことを考えると、高台へ逃げた方が良いかもしれない。
- ・津波の到達まで時間がない中、社員をビルに留めるか、高台へ避難させるか、判断に迷う。

■考慮事項

時刻	－
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

☞取るべき行動

- ・津波到着時間を考慮し、避難が可能な場合は高台への避難を行い、猶予がない場合は浸水深以上の高さのフロアに避難を行う。
- ・火災発生や要救助者がいる場合は、屋上やベランダ等からタオル等を振り、支援が必要であることを周囲に伝える。

☞被害軽減のための事前対策

- ・建物の耐震対策と従業員や利用客が滞在するための備蓄、ハザードマップでの事務所周辺のリスクと避難場所等の確認などを行う。
- ・消防法の防火/防災管理者の設置義務がある事業所は、消防計画や法令の規定に基づき、また、法の対象外の施設においても、独自に従業員や施設の利用者の避難や安全確保の計画やマニュアルを策定しておく。
- ・計画等の策定検討にあっては、会社内に待機する場合及び立ち退き避難する場合の条件及び方法について検討、整理しておく。
- ・BCPの中で、交通機関停止時の従業員の帰宅・出社の考え方を整理しておく。
- ・計画に基づく訓練を定期的実施し、避難経路と避難誘導體制、初期消火体制等の確認と習熟に努める。

場面 168 津波が迫る小学校

主体区分	その他	場所の特徴	津波浸水危険地域	被害	津波
------	-----	-------	----------	----	----

- ・1時間目の授業中に突然、激しい揺れに襲われた。
- ・教室にいた児童は日頃の訓練の成果もあり、幸いにして負傷者は出なかった。
- ・その後の対応を確認していると、外の防災行政無線のスピーカーから大津波警報のアナウンスが聞こえてきた。
- ・急いで事前のマニュアルどおり、児童を校舎の屋上に誘導した。
- ・マニュアルには、校舎3階以上の垂直避難か高台への避難か判断基準が明記されていないため、判断が正しいか不安がよぎる。

■考慮事項

時刻	－
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。 避難に時間がかかる可能性がある。

☞取るべき行動

- ・津波の到達時間前に、津波の高さ以上の高い場所へ迅速避難を行う。

☞被害軽減のための事前対策

- ・自治体のハザードマップを活用し、起こり得る災害リスクを把握し、避難路、避難場所の確認を行うとともに、防災マニュアル等に避難の方針を定め、マニュアル等に基づく訓練を実施する。
- ・最大クラスの津波の到達時間と浸水深の高さを確認し、それを回避する最善の避難を検討する。

場面 169 津波が迫る医療機関

主体区分	その他	場所の特徴	津波浸水危険地域	被害	津波
------	-----	-------	----------	----	----

- ・スタッフステーションでの朝の申し送り中に、激しい揺れが襲った。
- ・すぐさま安全確保行動を取り、揺れが収まった後にスタッフが手分けをして、各病室の安否確認を行った。
- ・幸いにして、負傷者は発生せずに済んだが、安否確認の最中に停電が発生し、津波からの避難を呼びかける緊急速報メールのアラートが鳴り響いた。
- ・当院は津波浸水想定区域にあり、最大で 3 階まで浸水する可能性があるため、1 階の来院者及び 2・3 階の入院患者を 4 階以上に誘導する必要がある。
- ・院内アナウンスで、歩行可能な人は自力で、残りの人はスタッフが、手分けして 4 階以上に搬送するように繰り返し呼びかけている。
- ・2 階、3 階の入院患者の中には、自力で移動が困難な患者や、症状が予断を許さない患者もいる。
- ・津波の到達が気になる中、焦りが募る。

■考慮事項

時刻	－
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・最大津波の浸水深の高さ以上のフロアへの入院患者、スタッフの避難に全力を尽くす。

☞被害軽減のための事前対策

- ・自治体のハザードマップを活用し、起こり得る災害リスクを把握し、避難路、避難場所の確認を行うとともに、防災マニュアル等に避難の方針を定め、マニュアル等に基づく訓練を実施する。

場面 170 土砂災害のおそれがある福祉施設

主体区分	その他	場所の特徴	土砂災害危険地域	被害	土砂
------	-----	-------	----------	----	----

- ・入所者が1階にある食堂で昼食をとっている最中に強い揺れが発生した。
- ・スタッフが大声で入所者に対して、身を守る行動を呼びかけたが、一部の入所者は座ったまま茫然としていた。
- ・耐震性のある建物であったため、幸いにして入所者に怪我はなく、建物の損傷もないように見える。
- ・施設の裏にはがけ地があることから、土砂災害の危険がある。
- ・入所者の中には避難に際して、支援が必要な方もいるため、避難には多くの人員と時間がかかる。
- ・強い余震による土砂災害の可能性を踏まえ、入所者を他の場所に避難させるか判断に迷う。

■考慮事項

時刻	夜：土砂災害の兆候に気付きにくい可能性がある。
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 土砂災害のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

📍取るべき行動

- ・土砂災害の危険がある場合は、立ち退き避難が最優先であるため、上層階のがけ地の反対側のスペースに入所者を避難させるとともに、自治体に立ち退き避難の支援を要請する。
- ・福祉避難所や要配慮スペースが確保できる避難所への避難を自治体と調整する。

📍被害軽減のための事前対策

- ・建物の耐震対策と従業員や利用客が滞在するための備蓄、ハザードマップでの事務所周辺のリスクと避難場所等の確認などを行う。
- ・消防法の防火/防災管理者の設置義務がある施設は、消防計画や法令の規定に基づき、また、法の対象外の施設においても、独自に従業員や施設の利用者の避難や安全確保の計画やマニュアルを策定しておく。
- ・計画等の策定検討にあつては、会社内に待機する場合及び立ち退き避難する場合の条件及び方法について検討、整理しておく。
- ・BCPの中で、交通機関停止時の従業員の帰宅・出社の考え方を整理しておく。
- ・計画に基づく訓練を定期的に実施し、避難経路と避難誘導體制、初期消火体制等の確認と習熟に努める。

場面 171 救助活動に取り組む自治会

主体区分	その他	場所の特徴	一般地域	被害	揺れによる被害
------	-----	-------	------	----	---------

- ・揺れが収まった後、自治会の防災担当として、一時避難場所である公園に向かった。
- ・公園に到着すると、既に公園には近隣住民が自主的に避難していた。
- ・一時避難場所にいた地域住民の安否確認をしようとしたが、自治会に入っていない方が数多くいたため、なかなか人数確認がうまくいかない。
- ・しばらくすると、避難してきた住民から A 地区で生き埋めが多数発生との情報があった。
- ・防災倉庫から資機材を取り出し、集まった人員で救助に向かったが、自治会員は高齢者かつ資機材の扱いに不慣れでなかなか進まない。
- ・119 番も繋がらないため、自分たちで救出するしかない。

■考慮事項

時刻	－
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・公的支援を求め、連絡を継続的に試みる。
- ・火災の延焼や、余震の揺れ等による二次災害に留意しながら活動する。
- ・消防団員や若者等、支援が得られそうな人員がいれば声を掛け、協力を求める。

☞被害軽減のための事前対策

- ・日頃の自主防災組織の活動や訓練を通じて、応急救助資機材の取扱いの習熟に努める。

場面 172 消火栓が破損し消火が困難になる消防団員

主体区分	その他	場所の特徴	一般地域	被害	火災
------	-----	-------	------	----	----

- ・揺れが収まった後、消防団員として、消防団の拠点施設に向かった。
- ・施設に向かう途中、倒壊家屋から火の手が上がっているを目撃した。
- ・施設に到着すると、急いで消防車を出動させようとするが、道路上には様々な物が散乱しており、出動が困難な状況であった。
- ・別の方法で消火を試みるも、車両が通行できず、資機材の搬送に時間がかかったことから、既に周囲への延焼も始まっていた。
- ・ようやく消火活動に取り掛かったが、地震で消火栓が破損しており、水が思うように出ず、消火活動が困難な状況になった。

■考慮事項

時刻	-
季節	-
天候	-

📌取るべき行動

- ・消防力が劣勢であることから、消防団員の安全確保及び住民の避難誘導を優先する。
- ・人手が必要な場合は、安全を確保した上で、周辺住民に協力を求める。
- ・消火活動に当たる場合は、延焼防止に重点を置く。
- ・消火活動を行うことが危険な場合は、消防本部と情報を共有しつつ、撤退も考慮する。

📌被害軽減のための事前対策

- ・自主防災組織等と連携した訓練を通じ、消火栓の使用や地域特性に応じた初期消火活動技術の普及に努める。

場面 173 踏切封鎖解除の対応に苦慮する鉄道会社

主体区分	その他	場所の特徴	一般地域	被害	その他被害
------	-----	-------	------	----	-------

- ・緊急地震速報により、列車は全線で緊急停止した。
- ・緊急停止した直後、大きな揺れが襲った。
- ・地震発生時は踏切の一定距離に列車が止まると、踏切は遮断機が下りたままとなり、閉鎖されてしまう。
- ・遮断機を元に戻すためには、専門の職員が踏切に来て作業するしかない。
- ・この地震では、徒歩による安全点検を全線路内で行う必要があることから、開放までに数日かかるであろう。
- ・復旧作業チームを編成したいが、余剰人員もいないことから対応に限界がある。

■考慮事項

時刻	-
季節	-
天候	-

📌取るべき行動

- ・緊急性と優先度を踏まえ、スタッフを派遣し、踏切開放作業を進める。

📌被害軽減のための事前対策

- ・早期の踏切開放を可能とする、応急人員体制の確保、さらにはそれを回避するシステム整備について検討する。

場面 174 路上生活者を受け入れる避難所の運営スタッフ

主体区分	その他	場所の特徴	-	被害	避難所環境
------	-----	-------	---	----	-------

- ・避難所開設から 3 日目、徐々に避難所の運営が形になり、避難者の受付も自治会や住民で対応できるようになってきた。
- ・受付をしていると、路上生活者と思われる格好をした男性が避難所である体育館に避難したいと申し出てきた。
- ・氏名は言うものの、住所や被災状況等は教えてくれない。
- ・臭気も強いので、どうしたらいいかわからず、少し離れた屋外の場所で待ってもらおうこととした。
- ・それを遠くから見ていた別の避難者から、「何故、直ぐ入れてやらないのか」と非難めいた声が聞こえてくるが、避難所は間仕切りや個室スペースがないことから、他の避難者から苦情が出る可能性がある。
- ・体育館にはシャワー設備はあるが、断水で使用できない。
- ・どのように対応した方が良いか分からない。

■考慮事項

時刻	-
季節	-
天候	-

☞取るべき行動

- ・可能であれば身体の洗浄、更衣等の案内を行い、難しい場合は個別対応を検討する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・出来る限り路上生活者の方の受入れ方針、方法を事前に決めておき、マニュアル化しておくことが望ましい。

場面 175 避難所の開設に手間取る自治会担当者

主体区分	その他	場所の特徴	-	被害	その他
------	-----	-------	---	----	-----

- ・揺れが収まった後、自治会の防災担当として、避難所である小学校に向かった。
- ・震度 5 強以上の場合は、自治会の防災担当者が避難所運営委員として小学校の体育館を避難所として開設することになっていた。
- ・小学校に着いた頃には、地元の住民が数名、体育館の前に避難していた。
- ・私以外の避難所運営委員は、まだ到着しておらず学校の先生も来ていない。
- ・体育館を開錠して中に入るが、本格的な避難所開設の訓練をしたことがないため、避難所運営にどのように着手すれば良いのか分からない。
- ・運営に戸惑っている中、避難者が体育館の場所取りを始めた。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・マニュアルや段取りがわかる者がいない場合、避難者の中で避難所の運営に協力できそうな者を募り、早急に開設方針を立てる。
- ・運営には男女のニーズの違い、要配慮者等、多様な方々のニーズに配慮する。
- ・入所者の確認、名簿化と要配慮事項の確認、要配慮者を考慮したレイアウト、履物の扱いなどの環境配慮等の基本事項を抑える。
- ・避難者の中には、DV やストーカー等の被害者が含まれている可能性があるため、個人情報の扱いを徹底する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・自治体と連携した避難所開設・運営マニュアルを整備し、地域で共有しておく。
- ・マニュアルの中で、入所する避難者が開設や運営に係われるよう、具体的な作業手順などを明記しておく。
- ・作業手順を具体的に示す指示書を整備し、分かりやすい位置にマニュアルと共に配備しておく。

場面 176 車中泊の対応に苦慮する避難所の運営スタッフ

主体区分	その他	場所の特徴	-	被害	その他
------	-----	-------	---	----	-----

- ・地震発生から3日目、避難所はどこも満員の状況が続いている。
- ・各避難所では、車中泊を積極的に受け入れてはいないが、グラウンドには、繰り返す強い余震で建物内を回避する者や、ペット対応、要配慮者がいるなどの理由から多くの車中泊避難者が事実上発生してしまっており、受け入れざるを得ない状況になっている。
- ・車中泊避難は、避難者の把握ができず、健康面も不安視されており、駐車スペースの場所取りでトラブルや苦情も出てきている。
- ・車中泊避難者への対応について、不安が残る。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・自治会やボランティアの巡回等を通じて、避難者の把握と生活等支援情報の提供、健康面での注意喚起等を行う。

☞被害軽減のための事前対策

- ・出来る限り車中泊避難者の受入れ方針、方法を事前に決めておき、マニュアル化しておく。

場面 177 福祉避難所に転用した公民館で、入所者の急変に苦慮するスタッフ

主体区分	その他	場所の特徴	-	被害	医療・衛生
------	-----	-------	---	----	-------

- ・避難所が開設されて7日目、避難所にいる要配慮者や在宅避難を続ける要配慮者のため、〇〇市はようやく福祉避難所の開設を決めた。
- ・〇〇市は、事前に福祉避難所と指定していた施設だけでは入所希望者の受け入れが困難なことから、施設機能として不十分であるが、公民館を福祉避難所に急遽転用し、福祉事業者に運営を委託した。
- ・福祉避難所開設から2日目、持病が急激に悪化した避難者や体調不良者が続出した。
- ・この施設では対応に限界があるため苦慮する。

■考慮事項

時刻	-
季節	-
天候	-

📌取るべき行動

- ・施設で対応しきれない事態となった場合は、躊躇せず、医療・福祉施設への緊急入所を手配する。
- ・巡回してくる保健師、医療チームと情報共有を密にする。

📌被害軽減のための事前対策

- ・福祉避難所の確保・運営体制、一般の避難所の福祉支援機能の強化に努める。

場面 178 一般避難者が押し寄せ福祉避難所として開設ができない通所施設

主体区分	その他	場所の特徴	-	被害	その他
------	-----	-------	---	----	-----

- ・地震の後、施設及び入所者に被害がなかったことから、通所施設として運営を続けていると、自宅が被災した近所の高齢者が避難させてほしいと訪れてきた。
- ・当施設は役所から福祉避難所の指定は受けているものの、役所からの福祉避難所としての開設依頼はなく、スタッフも利用者のケアで手一杯であるが、断ることができないため、受け入れを決意した。
- ・しばらくすると、受け入れたことを聞きつけた他の住民も駆けつけ、施設の空きスペースが一杯になってしまった。
- ・他のスタッフにも参集をお願いしたが、自宅や家族が被災して参集できるスタッフは少ない。役所にも運営スタッフの派遣もお願いしているが、災害対応で手一杯であり、派遣は見込めない。
- ・3日目になり、役所から福祉避難所として開設してほしい旨、依頼があったが、既に近隣住民の避難者で空きスペースがなく、引き渡しが出来ていない利用者もいるため、福祉避難所としての開設はまだまだ難しい。
- ・備蓄食料もスタッフの疲労も限界に差し掛かっており、このままの状態が続くと厳しい。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・一般避難者が入所してしまっている場合は、自治体や自治会等の協力も得て、一般の避難所へ移動してもらう。
- ・不足するスタッフは自治体に手配を要請する。また、入所条件を緩和、例えば介助者1名を、家族単位で入所が可能とするなど、施設スタッフの負担軽減を図る。

☞被害軽減のための事前対策

- ・指定福祉避難所については、平時から受入対象者を「高齢者」など特定し、特定された要配慮者やその家族のみが避難する施設であることを指定の際に公示しておくことが望ましい。
- ・出来る限り一般避難者の方の受入れ方針、方法を事前に決めておき、マニュアル化しておくことが望ましい。
- ・一般避難者への対応、運営スタッフの支援、医療機関との連携、状況変化に応じた入所条件の変更等、自治体との連携体制を確保する。

場面 179 人員不足で福祉避難所の運営に苦しむ入所施設

主体区分	その他	場所の特徴	-	被害	その他
------	-----	-------	---	----	-----

- ・地震の後、施設及び入所者に被害がなかったことから、福祉避難所としての受け入れを決意した。
- ・4 日目から徐々に受入れを開始したものの、スタッフの中には安否が不明な者や出勤ができない者もあり、人手が不足している。
- ・入所は役所の連絡を受けてからの運用だが、次々に高齢者や障がい者が入所を求めてくる。
- ・入所者と避難者のケアで手一杯の中、1 カ月間、福祉避難所として運営してきたが、行政からはまだ閉鎖の連絡はない。
- ・避難者も次の移動先が決まっていないため、退所できず、こちらから退所をお願いしづらい。
- ・医療的なケアが必要な入所者も増えているなか、スタッフの体力も限界に近付いている。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・不足するスタッフは自治体に手配を要請する。また、入所条件を緩和、例えば介助者 1 名を、家族単位で入所が可能とするなど、施設スタッフの負担軽減を図る。
- ・全国からの応援で避難所等に配備される DWAT や保健師チーム、介護職員と連携を図る。

☞被害軽減のための事前対策

- ・運営スタッフの支援、医療機関との連携、状況変化に応じた入所条件の変更など、自治体との連携体制を確保する。

場面 180 社内待機 3 日目で、対応に苦慮する会社

主体区分	その他	場所の特徴	-	被害	避難所・施設
------	-----	-------	---	----	--------

- ・業務中の地震発生から 3 日目、徒歩で帰宅できる従業員を除き、半数程度はまだ社内に待機している。
- ・社内に備蓄している水や食料もあと 1 日分となってしまった。
- ・少し離れた所に開設されている避難所では、仮設トイレが設置され、支援物資も配布されているようだ。これ以上、待機が長引くと、従業員の分をまとめて提供してもらえるか不安だ。
- ・家族の安否が不明の者もあり、帰宅させたいが、公共交通機関はまだ再開見込みはないようである。一部再開したバス路線等は、社内に周知しているが、帰宅するかは個人の判断に委ねるしかない。

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- ・自力で移動できる者は、安全に留意の上、利用可能な手段・徒歩等での帰宅を検討させる。
- ・活動できる従業員は、避難所の運営や被災者支援などの地域の防災活動に協力するよう努める。
- ・避難所は、避難所以外で避難生活を送る被災者も支援する拠点であるため、物資等の支援を要請する。

☞被害軽減のための事前対策

- ・平時から防災訓練など、地域の防災活動に参加し、地域との連携体制を確保しておく。

場面 181 生活環境の悪化等により広域避難の判断に迷う高齢者施設

主体区分	その他	場所の特徴	-	被害	その他
- 地震の後、入所者には被害はなかったが、施設の電気、上下水道、ガス、通信全てのライフラインが停止してしまい、施設にも亀裂が見つかった。 - 備蓄物資で数日はしのいだが、生活環境が悪いことから、健康状態が悪化する者が出始めている。 - 道路事情も悪く、支援もすぐには期待できない中、ここでの生活の継続はあきらめざるを得ない。 - 他の施設に移送させたいが、周辺の施設は軒並み同じような状況であり、より広い範囲で受け入れ施設を探すしかない。 - 移送には、車両の確保の他、介護や医療支援の体制も必要である。また、家族の同意も必要だが、連絡が取れない入所者も少なくない。 - こうした状況の中で、広域避難の是非と実施体制をどうするか、判断を迫られる。					

■考慮事項

時刻	-
季節	夏：熱中症や脱水症状のリスクがある。 冬：低体温症のリスクがある。
天候	晴：熱中症や脱水症状のリスクがある。 雨：低体温症のリスクがある。 雪：低体温症のリスクがある。

☞取るべき行動

- 入所者の安全を第一に、事業者団体のネットワークや、自治体の災害対策本部の保健医療福祉部門に対して、移送先の施設や移送方法などについて支援を求める。

☞被害軽減のための事前対策

- 平時から事業者団体や自治体との災害時の連絡体制の確保に努める。